

信 仰

(俗信を含む)

まえがき

東村は渡良瀬川上流に位し、その部落は川沿いの狭隘な平担部から、さらに両岸の丘陵山岳地帯に開けている。

こうした山村としての特徴は、信仰面にも色濃く出ている。すでに民俗調査の結果が報告されている、六合村、片品村などと同じく、十二様（山の神）祭祀が盛んである。十二様は、部落によつては安産の神ともされている。

卯月八日の赤城参りの民俗については、夙に今井善一郎氏が柳田先生に御報告され、先生が「先祖の話」（定本柳田国男集第十卷所収）に詳述せられている。先生は、先祖の御靈祭りが、仏教に習合される以前の、古い信仰の面影をとどめる貴重な民俗であろうとされている。

社名	祭神	鎮座地	備考
諏訪神社	建御名方命、大名乎那命	萩原字宮原（〇〇）	
三島神社	素戔鳴命、大己貴命 事代主命、火產靈命	花輪字三島（二）	
大己貴命、菅原道真	倉稻魂命	第一〇五代後奈良天皇 弘治四年	勅請と伝えられる。
吉備真備	花輪字御堂（三一）		
赤城御堂神社			

庚申講が盛んなことも、各部落を通じて特徴づけられる。信仰としての面もさりながら、娛樂の集まりという感が強いのは、恵みの少なかった山村の故でもあらうか。

江戸期における修驗の徒の活動も見逃がせない事実である。

信仰が、人一生、年中行事、言語伝承と緊密な関係にあるのは当然である。それらの項も参照されたい。

（佐藤清）

一、社寺一覧表

ここで現在の信仰状態を示すために、主な社寺の一覧表を掲げておく。この表は東村役場などに残る社寺の記録を参照し、作製したものである。

二、神社信仰（氏神・産土神・その他）

ここでは一覧表にあるうちのいくつかの神社と、その他の社祠について述べる。

三、島神社

祭日は四月（新曆）六日と九月（新、旧曆）十九日で

					八幡宮	誓田別命	花輪字橋原道上
					稻荷神社	倉稻魂命	三三
					豊郷神社	大己貴命	
					鳥海神社	安倍宗任	
					太郎神社	田原太郎忠広、大山祇命	
						櫛御氣野命	
					日枝神社	大山祇命、安倍宗任	
					武尊神社	菅原道真、安倍宗任	
					東宮神社	日本武尊	
						経津主神、誓田別命	
						草木字原二	
						澤入字東宮三	
						草木字内手六七	
						座間字山玉三五	
						神戸字宿天六	
同	慈眼山						
	普門寺	花輪字中野二十一面觀世音					
		祥寧寺末					
		一〇八代後水尾天皇寛永二年建立					

(2) 寺院・仏堂

ある。各組(花輪の上、中、下の各宿、大煙、高ガイト)から總代五人と当番(世話人)が二人ずつ出て、御札を氏子に配る。御札は神主が作る。縄を上、中、下の街道筋に立てる。各戸赤飯をふかして祝う。(花輪)

祭日は七月二十六日である。八坂神社はもと大烟につたが、今は三鶴神社に合祀されている。八坂神社を前の宮、三鶴神社を後の宮といふ。

当番の組が街道に御飯屋を建てる。御飯屋には、御神酒、御饅米、御供え餅一重ね、胡瓜茄子、トマトなどを供える。

当日は御輿が町をわり歩く。若衆が担ぐ。御輿の通る道筋の家では、バケツに水を汲んで、御輿にふりかけれる。御輿は御飯屋で休む。

午後一時頃からもみ始めた御輿は、三時頃渡良瀬川に行く。その折、御幣一对、飾り馬、天狗、寶鏡箱などが、御輿の前を行く。天狗の面は赤く、白い髭のついた普通のものである。なお、天狗は白裝束をつけ、一本歯の下駄をはき、右手に团扇、左手に矛を持っていて。御輿は川で、水浴び(禊)をし、さらに川を渡って大煙に行く。馬などは橋を渡って行く。この折、川原には多数の見物人が集まるということである。この行事がすんでから、子供達が山車を引っぱる。山車は花提灯で美しく飾られている。昔は、彫り物のある立派なのが三台もあつたが、現今では、自動車に山車をとりつけたりして、祭の様相も随分と変わってしまった。(花輪)

太古前家の氏神は神明様(祭神天照大神)である。

神明様



座間の鎮守日枝神社の鳥居——村人はヒシ
神社と呼んでいます。(撮影 郡九十九一)

日枝神社

月二十五日(昔は六月十五日)と
九月十九日。座間中の人が出、神
主が来て拝む。祭の準備はお祭り
番がする。ツボ(組)一人ずつ酒
二升位と赤飯を上げ、外に供物七
種(例えは、胡瓜、茄子、桃、葱、
菜、米、頭付)を上げる。

太郎神社

お祭りは五月一日(八十八夜)
と、九月一日頃(二百十日)で、
村中よってやつた。今はお祭り

番が出て、酒を上げて子供達に菓子をやる。

神主は、桐生の藤倉若磨氏をたのむ。昔は神部義門という神主が、高
助にいたが、明治三十七、八頃亡くなつた。この神部氏はもと大行院と
いっていたのだが、神主となつてから、名を神戸義門と名乗つた。ところが、高瀬次郎氏に、神戸で神戸と名乗るのはならぬと叱られて、神部
という姓になつたという。

昔は神社の祭礼には踊りがあつた。手踊りで、土地の人がやつた。八
十八夜などにも若い衆は踊りをしたものであつた。祇園の神輿もあり、
二、三年前までは出たが、今は中止になつた。(神戸)

天神様

高助に天神様のお宮があり、昔は九月二十五日に大人も子供もよつて
お祭りをしたが、神社合併で浅原へ御神体をやつた。浅原に御神体のな
いお宮があつたからである。村のお祭は太郎様と一緒にあつた。(下神戸)

同	無量山	長寿寺	小夜戸字崎下	釈迦如来	一样禪寺末
同	福聚山	大倉院	小中字大平三三	釈迦無尼仏	新里村常光寺末
同	高界山	宝泉寺	神戸字宿三五	正觀世音	大胡町長興寺末
同	普門山	清水寺	神戸字谷頭七九	正觀世音	利根郡月夜野町玉泉寺末
同	大王山	広福寺	草木字内手舟	利根郡月夜野町玉泉寺末	九六代後醍醐天皇の御代の創建と伝う
同	華岳山草木院高常寺	地藏菩薩	北群馬郡子持村雙林寺末	第一一二代雪元天皇の御代の開山と伝う	第一二代梅田町天台宗南蔵院受持
同	龜宝山	大沢寺	草木字内手舟	第一二代梅田町天台宗南蔵院受持	桐生市梅田町天台宗南蔵院受持
不動院	花輪上野	沢入字西元	釈迦無尼仏	第一六代桃園天皇の御代建立	

これが柄原の八幡様に合併し、一区の鎮守様となつてい
る。昔は霜月十五日に新嘗祭をやづた。そのとき太古前
の大本家は四坪半程の社地を提供してあって、また二十
ずつ赤飯をふかして村中に配つた。神前に席を敷き、赤
飯のお握りを子供達に配り、大人は御神酒を飲んだ。三
ヶ郷で拝ましてくれといでので、それから三ヶ郷全部で
拝むようになったといでの。これは約六〇年程前まで行わ
れたことである。

合併後大本家は気に入らぬところに合祀したといでの
で參拜せず、自分一人祠で從前通りのことをして祀つて
いた。合祀後の祭典費用はフラスキー等で平等に出し合
うをして調達した。神酒・供物・直会・神官謝札、子
供に配る菓子などのためにある。(三ヶ郷)

(上神戸では神社合併前には、原組におくまん様、小池に琴平様、各組に大朝神様、小池源五郎氏の家に弁天様などが祀られていた。)

東 倉 様

沢入の鎮守は東宮神社である。祭日は七月と十一月の十五日で、この日は村全体で費用を出してお祭りをする。御輿も出して祝う。

石 尊 様 (雨降山)

七月二十六日に道がりをして御神酒をあげボンデンをたてる。昔は日照りのとき雨乞いのために箕をつけて雨降山にのぼり、雨のふらないときは山を降りないと願をかけた。また雨天続きの時には、夜、拝殿で太鼓を一晩中叩いて信心し、朝、太陽が見えたので大喜びをしたことある。(松島)

琴 平 様

四月十日がお祭りで、赤飯を上げて、子供に分けてやった。

(この外、柱戸に不動様(木村氏関係のお宮)と橋詰におくまん様(東宮家関係のお宮)がある。)(座間)

蚕 影 神 社

蚕影神社(撮影穂貝福七)



蚕影神社の御 神 像(撮影穂貝福七)

蚕の神さままで、四月二十五日がおまつり、蚕のさかんなころは近在からおまいりに来た人が多かった。(黒坂右)

小中の島海神社

小中の島海神社はもとは松島家の屋敷神であり、小中の鎮守様は腰越の十二様であったという。それがいつしか島海神社が村の鎮守様となつたという。現在は、小中全体で島海神社と十二様をおまつりしている。

三、家及び屋敷の神

家中の中には、恵比寿、大黒、火伏せの神などが祀ってある。ところで、家中の中にも祀られている神々は、皆かたわものという。このあたりでは、便所に木刀(正月のもの作りの日に作って供える)をかざつてある

のは、神がかたわものなので、悪者が入って来たら、これで防ぐためといふ。(検証)

大神宮様。これは伊勢からお札がくる。村の氏子総代のところに神主がそのお札をよこし、総代が氏子に配る。今は一枚五十円。

年神様。このお札は神主が作って、総代が各戸に配る。

三宝荒神。年神様と同じである。

以上は神棚に祀られている。

恵比寿。大黒は勝手に祀られる。この外、馬屋、便所、稻荷、水神様等に幣束を立てる。(神戸)

稻荷様。屋敷の内には、稻荷様が祀られている。毎年初午(二月の初午の日)にお祭りをする。

旗を上げ、豆腐を上げる。この豆腐は、どういうものか四隅だけはす

かいに切って上げることになっている。

お宮は石の宮、木の宮(これは赤くぬる)で、蚕のお宮はない。

蘆戸

物のコソコソ様（狐）を上げる家もある。（神戸）

年神様の棚を表の間に作って祀る。神棚は茶の間の西向きにある。（荻原）



おいなり様——座間金子誠一郎氏方
(撮影都九十九一)

ある方へ行き、途中で馬が立ち止まると十二様が乗ったといって帰つくる。すると無事子供が生まれるといった。

また、十二様にお供えしたものを食べさせるとお産がかるい。

小中で十二様は四十八社もあった。部落中で祀るのは、足腰では十二日で、昔は鏡餅を上げたが今は赤飯である。

また、十二様にお供えしたものを食べさせるとお産がかるい。

四、山の神(十二様)祭祀

—十二祭・十二講—

毎月十二日に祀る。十二様は山のいたるところにあり、普通は石祠である。

十二日は山仕事に入ることをつつしむ。搬出はするが木を切ることをしない。

十二日は山のいたるところにあり、普通は石祠である。

炭焼連中が話しあって十二日(月はかまわないので)に十二祭りをした。たいてい仕事はじめにした。

この日は仕事を休まないと村中から嫌がられる。窓の天井でも落ちる

お祭りには御神酒を貰い、オサゴ、水を供えてお祝いする。(荻原)

十二様は女神であるともにお産の神ともいわれている。

難産のときは、オカマ様の幣束を馬の背に立てて家を出かけ、十二様の

十二祭の時につくことが多かった。山小屋で、働いている人たちが、米を煮て、煮えたところで水をしぼって、醤油樽みたいな容器の中につく。もっともコビキはホタの上などでついた。アンコなり味噌なりを牡丹餅形にしたものについて食べる。

バンダイ餅は、家のダシの下でつくものではないという。(神戸)
座間の平では一月一日に神主を頼んでやる。毎年祭り番が定まり、平の上下で交互に宿をする。一戸一人ずつ出る。賄いは御飯(白)オカズオシトギー(白米をといてついてやわらかにし、さらに団子にして笹の葉にのせる)を十二個供える。お膳は御飯、尾頭付き(今は鮭の切れ目などつける)、ツボにはイカとニシンをまいたのを小さく切ったのが入る。ヒラは切昆布に里芋、スモモノは皿に大根・人参の千切ナマス、その他昆布巻。(その芯には季節のもの陳や鱈などが入る)汁はケンチン汁。酒は一本ずつつく。

朝、当番五人が体を水でふいて清め羽織をきて、宿の家のトボクチへならんと「オーフ」と大声で呼ぶ。そうすると十二様が呼ばれてくるのである。ホーバイの人の集るのは八時頃である。神主が来て祝詞をあげ、皆で御神酒をとりかわして式が終る。それから膳部が出る。十二時半頃迄食いする。

飯の食い方も、一通りたべてから三杓回り（サンジナタマワリ）といって約子で三つずつ盛って食べ、また高盛といって山盛りにしたのを食べねばならない。

戦争後は署式になって、うどんやしるこを食べることもある。その時の相談による。

御飯を食べるとお茶の代りに小型のオニギリを蟹色にやいて急須に入れてつく。それが香ばしい。それを一杯ずつ呑んで帰る。

十二様の時は一年間の懲罰を晴らすために酒の上で文句をつけることが多かった。なごやかに十二講の終ったことはいくらもない。手ぶり足ぶり（暴力的行為）はないが、平均四合位呑んで、膳部の箸のおき方がわるいとか、切れ目が少さい、お膳の据え方が上下ちがうなどいろいろのことにして理屈をつけた。いわれる方でもなれいでいて適当にあしらうので、後に根の残るようなことはなかった。

今は一年のレクリエーションの日である。

竹製の御神酒スズ十二サゲ、芝でなつた襷でつるして上げる。また、オシトギを笹の根にのせて上げた。最近は餅など上げる。（座間）

日は不定だか、山かせぎする人同志で山の神を祀り、手製の料理を食べる。十二様はあちこちの山に祀つてある。

山の神はお産の神様で、五・六尺の長さのさらしに「十二山神社」と書いてお参りすると、お産が軽くなるという。お供え餅をついて上げる。水沼のむこうの十二様には、お産の時お参りしてお札をもらつてくれる。（下草木）



山の神武尊神社境内
御神酒スズに杉の葉が供え
てある（下草木）
（撮影）関口正巳

草木八社とい
つて、上草木・
下草木・富沢・
初沢・マス淵・
横川・白浜の日
向にそれぞれ祀
つてあった。今
はほとんど祀ら

なくなつた。天狗様と合同で祀り、神体は同じものらしい。（白浜）

山の神様は二月十二日に山へ登つて、霜月十二日に山から下つてくるという。仕事が片付いてから、どこかで冬ごもりしているという。

正月四日は山はじめの日で、この日山へ行つて切りぞめをする。標識を上げて木を一、二本切りそめする。このあと山へ入り、木を切つてもよいという。（春場見）

中畠にある山の神はおおごとの山の神という。この由来はつきの通りである。あるとき、乞食がこの山の神様のところに泊つた。この乞食は妊娠していた。神様の前で子供を生んではおおごとだと心配していたが、思いの外かく生むことができたという。それから、この山の神様は、お産をかくるとしてくれる神様だというので人々がお参りにくるようになった。お産がかかるべきものはお礼参りにくるものとされ、六尺ほどの布の旗を奉納していくものもある。

山の神のローソクをもつて、陣痛のときにお産し（産婦）の前に上げると、かるく生まれるという。また、山の神の旗を借りてきて腹にまいておくと、安産できるという。お礼に旗を上げる。



名越の山の神（沢入）
左井 安雄
(撮影)

この山の神の祭りは三月十二日、イリ（榆沢、春場見、名越）全体で祀る。世人は榆沢、春場見、名越の三つのツボ（組）から一人ずつ三人である。この人達がだしえで赤飯を作る。（宿の家で作る）これを神に供え、またお参りにきた人にふるまつた。この日産婦は沢入の方からもお参りにきた。

山の仕事をする人が祀る山の神はこれとは別である。これは男の神で大山祇神という。怪我をしないようになると祀る。祭りの日は一月四日、イリ全体で祀り、順番に宿をする。これは四日祭りという。

前の日から、宿のツボの女の人気が手伝いに行つて食事の用意をする。四日には男の人が手伝い出て、竹を切つて御神酒筒を作つたり、豆腐を作つたり、ゴフ（米をひいて餅と同じようについてまるめて、火

に焼く）を作つたりする。各家では、前の日に、米を茶好み茶碗に一つ、酒一合、うどん一把、ローソク代として一円を出し、あいでの用意する。御神酒筒は、呼ばれてきたもの（一軒一人づつだれでも呼ばれていく）に何本でもやる。これはもつ帰つて、水切りの神様とか、稱荷様とか、ほかの神様に上げた。

座敷には山の神様の掛軸をかけて祀る。祭の主体は男衆で、代りに女性寄りならよかつた。若い女衆の場合は、お勝手の手伝いをした。

昔は、夜中まで祀つていて、最近では昼食を食べ、夕方に終りにする。服装は普段着である。祭りに参加するものは、石屋や、炭焼き、その他の人で、招待されてくる人もある。しかしこの人達は、儀式には参加しない。（春場見）



山の神神像（沢入春場見）
(撮影 井田安雄)

沢入には、山の神が二十五社あった。山仕事をする人は、山の神とか天狗様を、氏神同様に信じたものだ。昔、伐採をする人は、十二日は山の神様の日だから、仕事をしなかつた。最近では、手間があれば、毎月十一日の夕方に山の神様のところを掃除して、十二日の朝、山の神様には御神酒をお供えしてから山仕事をしている。

お天狗様は以前は山の中の木のお宮に祀つていて、今では十二様に合併している。八十八夜を、お天狗様の祭日としていた。

五月十二日に山の神のお祭りをするが、この日お供えするものは、御神酒、オサゴ、ゴマメ（または鱈、尾頭付き）、赤飯、お供え。

沢入の十二社 沢入にはつぎの場所に十二社（山の神）がまつてあった。この中には現存しないものもある。

西、名越、神土皆戸、押手、オオゴト、深井戸（二カ所）、セト、黒坂石、石坂、水元、検沢。

山の神は、むかしの街道の起点のようなところに立っていて、今でいう道するべの役目を果していようだ。

また、山の神を信心すると、お産ができるといわれている。

(沢入、西地区)

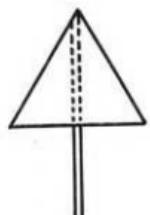
十二社のまつり 沢入の西地区では、十二社（十二山神社）のおまつりを、もとは旧暦の十月十二日、現在では十一月十二日にやっている。農家の仕事がおわってから、山へ入るときにあらためて祝ったものである。

毎戸一升ずつ米を出しあって、もちをついた。毎年まわり番に宿をきめ、そこへ一戸一人ずつ、朝から手伝いに行つてもちをつく。このもちをバンダイモチという。うるちを臼でついたもので、二種ぐらいの厚さ、直径十種ぐらいのものである。（あんをつける）このもちを西組の子供たちに一人一つずつくれた。子供の喜ぶ顔をみて山の神が、自分でおいしそうに思つていて、木をさられて、おこらないということである。また、あつまつた人たちは、このほかに、あればもちかえつてもらう。山の神には、このものほかに、おかしらつきのさかなをあげる。夜、宿へ、一戸一人ずつよばれて行つて祝う。

バンダイモチについて

バンダイモチはうるちでつくった。これは、むかし、ソマやケズリといふ山で仕事をするものが山の奥の仕事場ではじめたものであるといふ。うるちをかたくにて、ぱんの上にのせて、ヨキのみねでついてこしらえたもの。そのためバンダイモチという。むかしはひらくのはじら味噌をつけてやいてたべたという。その香りを十二社がこのんでいた

という。図のような形のもので、大きさは四寸ぐらい、木のひらたくくしをさした。山小屋の中に十二社をまつておき、そこにこのもちをつくつて供えた。数は別にきまつてない。これを家のものもたべた。明治になつてから、白でつくようになつた。



(沢入西地区、高畠由次郎さんはな

し)

一月十二日に、山の神ののぼりを

たてたり、子供に翼子をやつたりして祝う。この日もちをついてお供えする。各人、家の近くの山の神へおまいりに行く。

山ごとに親方がいて、そのものを中心に山の神のおまつりをした。(向沢入)



十二社の西の井田安雄
(撮影)

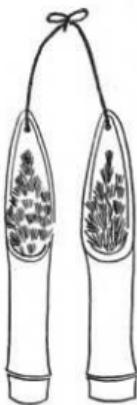
八月一日に全体的な山の神のまつりをした。この日は、仕事を休んで、もとじめが旅行につれて行つたり、お祝いをしたりした。(向沢入)

十二日に山崎某が山に入つて木を切つた。そしてその木を山から落そうとして、はじかれて死んだ。藁人形をそこに置いて試したところ、同じような結果になつた。実際によつた話である。それから年に一回(二月十二日)には必ず十二講をすることになり、現在でも行つてゐる。この部落の十二社はこの事故のために建てられた。この日各戸一名(男)が参加し、酒を呑む。その折部落のことについて種々相談する。

(下小夜戸)

十二様は石祠に祀られている。主として山の水の湧出するあたりに祀られている。伐採の折には、酒を竹筒に入れて行き、仕事をしている場所の木の株のところにさし、十二様に供える。その折、尾頭付きも上げる。(閑守)

十二様祭祀は、座間の四部部落どこでもやっている。一月一日、宿は頗番に交替してつとめる。「十二神社」「山の神社」「十二山神」などと紙をついで作った大きな旗に書いて上げる。竹で御神酒スズを作り、酒を入れて上げる。杉の葉を上にさす。



この二本二組のものを十二組作って上げる。以前は赤飯を上げたが、今はうどんを作つて供えるようになった。(座間)

五、ドウロク神・金精様・大草鞋

ドウロク神

峠の神である。大間々山中ではドウロク神は、峠を越えて疫病の入るのを撃退すると伝えている。(西)
ドウロク神は耳だれの神様である。自分の年の数だけ、竹のふしを作つて上げれば耳だれはなれるという。(春場見)



一人立ちの道祖神
(沢入春場見)
(宝曆7年建立)
(撮影井田安雄)

ドウロク神は耳だれの神様なので拝んで耳だれをなおしてもらうと、石像のところへ酒を上げ、耳の形にした竹の一ふしを(前國)をお礼に供えた。(春場見)



竹の一ふし

ドウロク神は耳だれの神様である。この神様は大変な酒呑みであったので、かみさんがあきれて逃げてしまったといふ。そのため、この神はかみさんが恋しくて、一年中住還に立つて通る人を眺めているのだといふ。お姿は一人立ちで、とつくりとさかざきをもつたかたちをしている。

糸を通したもの

大草鞋



明和3年の道祖神像
(神戸)
(撮影 都九十九一)

金精様(陰陽石)



文政二卯年四月吉日 組中
金精様 (撮影 池田秀夫)

陰陽石



(撮影 都九十九一)

豊郷神社の金精様は子供のできない人が拝む。子供ができたら絵馬を上げた。またお礼は何んでもよいという。高さは一米十四種。

(小夜戸)

神戸から入ってくる座間の入口に、道を横切つて繩(今は針金)を張り大きな草鞋が空中にぶらさげてある。これは魔除けのためで、他所からわるいものが入ってこないためにしている。先年(六・七年前)やめたら一寸した流行病(赤痢)が入ってきたので、また始めて今もやっている。

旧の六月八日に当番が回わり番で出て社務所で作る。材料は稲藁の時もある。小麦藁の時もある。

これは草鞋というが、実際は鼻結びの草履である。

下げる場所は六箇所で、それは小夜戸口、梅田口、広沢口、柱戸山地道、草木口、神戸口である。(座間)



座間の大わらじ
(撮影 今井善一郎)

神戸の太郎神社境内にある。陽石には“根性大明神 小池谷頭文政二年己卯三月十日世話人”とある。(神戸)

六、仏教関係

（一）寺院・諸仏

祥禪寺（禪宗）



無縫仏を集めた靈地
(撮影 池田秀夫)

祥禪寺は日本に三つしかない立派な寺だったという。明治三十八年に焼けた。戦死者の村葬の残り火が原因だといい、また墓地の団子に線香が倒れ火がついたのを鳥がくわえて寺の屋根に運び、それが原因で火事になったともいう。そのため今でも檀家人の人達はお参りの折には線香に火をつけないであげている。

ここには壮大な無縫仏の墓石を集めめた靈地がある。檀家は東村全体におよぶ。八月一日にはこの無縫仏の清掃があり、三ヶ郷の人だけがいく。従つて無縫仏に対するお布施は、他部落と違つて出してない。ここにいう無縫仏とは主に土地の売買によって、血縁者なくなった人の墓をいう。また行路病者、村への新入者が墓地を買ったときそこにあつた墓はこの無縫仏に移したりして出来たものである。

（花輪）

明和二酉年
本町十五人
講中
中町七人

八月吉日

願主 净心
(花輪)

つきの写真は下小夜戸・荻原由雄氏所有地にあるのだが、その他でも見かける。馬頭尊であるが家畜の神といわれている。

お盆に花を供えるほか正月十四日に十日夜に使うような薬の約半分の長さのツトコを十二個作り、これを根で結えて、大麦を煮たのを入れて供え、家畜の健康を祈つた。（小夜戸）



（撮影 池田秀夫）

（撮影 池田秀夫）

銘

汝是畜生
飯依三宝
發菩提心

（馬の姿を陽刻）

神戸の清水寺の境内に觀音様のお堂がある。この觀音様は中禪寺の立

木觀音と同一の木で彫つたものだといい。靈験あらたかで、一月十七日が御開帳で、午年には一月と三月十七日にお祭りをする。昔は黒保根方面からも沢山の馬が参詣にやつてきた。

像高七十八厘米 台石銘

觀音様

祥禪寺の入口にある。七月九日お寺でお祭りをするが、村人はやらなければ。

観音様は天保九年に建物が焼け再建された。本尊は助かった。
(神戸)

(神戸)

十九年吾妻郡吾妻町本宿に生れ、庄屋加辺治左衛門の二男で、十一才のとき上野寛永寺に弟子入り、明和九年善雄寺に入り、文化二年隠居) イボができるとオガシヨをかける。イボが落ちるとお礼に豆で作ったジユズをあげる。(小夜戸)

イボ地蔵

正徳三癸巳天

天

(向つて右側) 安楽寺所願主
敬白

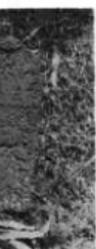
(向つて左側) 十月朔日

日



馬の墓馬頭様といふ。
(神戸)

一元6年正月16日—
(撮影 今井善一郎)



馬の墓一小中大薈院一
(撮影 関俊治)



善雄寺の薈葉師(萩原所在)

祭日は旧一月四日、四つの子に御利益ありといい、四つの子を背負つてお参りする。

善雄寺は延元三年六月弘秀上人の開山といい、第二十二世堯慶が八十八の春、生きながら入定して薈葉師如來となつたと伝える。(発慶は享保



名越の地蔵様(沢入)
(撮影 井田安雄)

名越の地蔵様

ここ地蔵様には、あたまやむねのわるい人がお願生をかける。なおつた場合には、あたまの場合には頭巾を、むねの場合にはあかい胸かけをつくって奉納した。

この地蔵塔は享保十六年四月仲六日に女人講中十人によつて建立されたものである。



(撮影 池田秀夫)

マリシテ

眼が悪くなると毎日あるいは一週間に何回かオガニシヨをかける。そして下方に溜った腐った水を目につけると治るという。治ると「め」字を自分の年の数だけ書いて供える。高さ(一三〇厘米)

銘 永保十一年十月十九日

(小夜戸)



(撮影 池田秀夫)

正月の神様に上げる餅(白木の曲物)に御飯を一杯もり、箸を家内の人数分だけそれにさして仏壇の前に上げる。大晦日に上げる時は丸い箸木と呼ばれる木を茹でて、皮をむいて作つた箸である。小正月の十四日の晩にはハラミ箸を上げる。前者の箸はお正月家中で用いて御飯を食べる。

(座間)

寝駕迎様と妻の川原

沢入には寝駕迎様(双輪塔)があり、妻の川原といふところがある。

寝駕迎様は、自然石に彫刻した一丈五尺程のもので、成立の由来については不明である。妻の川原は寝駕迎様より西進したところにあり、一帯は岩場でほとんど樹木の生育をみないところである。あたりの標高は一五五〇メートルである。以前は旧四月八日、戦後は五月八日に、大沢寺の坊さんが寝駕迎様のところまで登って祈禱し、集つた人に寝駕迎

様信仰の利益などを説いた。寺の行事であるので、村の人は関係していない。しかし、以前は四日八日より何日か前に沢入の青年が道切りをした。現在は五月七日に山岳会のものがしている。祭の日には、沢入以外の人も登つた。盛んな時には、数百人は登つたといふ。

その年に子供を亡くした人達は、この日、寝駕迎様にお参りし、それから妻の川原へ登つた。(この間徒步で大体四十分かかる)妻の川原で、子供のために石をつんでやることである。(落居) もと、四月八日には妻の川原へ行って、石をつんできた。子供をなくした人はとくにのぼつて石をつんできた。あらほとけの出た人が、妻の川原へ行くと、死人に見えるといふ。(沢入西)

(二) 修 駿

萩原の修験

萩原の修験(センドツ)としては、宮原に明池山泉藏寺、北山に北山山万蔵寺、関守に文殊院とあった。泉藏寺の当主は小林一布氏、万蔵寺は小林一布氏の本家に當る。小林一布氏宅には修験關係の金光明最勝王經などの經典、文書、僧衣等多數保存されているが、江戸初期からこの道にあったと考えられ、一部は次の記録に示す通りである。なお当家は京都聖護院の本山派であつたと考へられる。

浅黄緑結製表着用
三事被免許三旨依

聖護院宮御氣色

執達如件

法印源寅不放障ニ能加付

安永三年八月十七日 法印譽秀 (花押)

上州勢多郡荻原村 法印源泰 (花押)

泉藏寺順秀

裏面には次の如く裏書きをしている。

依為洛陽新熊野別當心院大僧都
霞加裏書者也

賞賛

印

その他元禄三年には僧都、正徳二年には金襴地結袈裟を許され、享保十一年法印、文久二年法橋に叙す文書、同年秀盛は権律師となり、以下江戸末期までの記録が現存する。

なお現在は全然この道になく農業を営んでおり、修驗から転ずる折の状況を伝えるものもある。伝承もなく、近くの善雄寺寄薬師第二十二世発慶和尚が入定のとき形見として当家に残した脇差一振があるのみである。

また小林一布氏宅裏に薬師堂がある。(写真)高さ八七種、幅五七種奥行四〇種の厨子には十一面觀音(高さ一八種)釈迦(高さ十六種)薬師(高さ二二種)が祀られ、堂内に鏡が三面ある。夫々怪、十一種から十二、三種のものでいずれも江戸時代の蓬萊鏡で、鏡台には次の銘が読まる。この薬師堂の祭日は八月十五日、今は当家のみで行っている。

安政四年 当所
十二月吉辰 村田源右衛門
寄進

介葉 諸事

(撮影 池田秀夫)



(三) 卯月八日の赤城参り

旧の四月八日(今は五月八日—赤城山の山開きの日)に、過去一年の間に死者のあった家々では、家人(主に施主)が赤城山に御参りをする。(草木・上草木・下草木・春場見・栗生野・宮沢)親が亡くなった場合、そのあと始めてむかえる四月八日に、家人が赤



免許状

(撮影 池田秀夫)

城山にお参りに行つた。(押手)

身内の者が亡くなつた年には、卯月八日と限らずに赤城山に登つた。

(寒沢)

死者の魂は、死んだその年には赤城山に行っているといわれている。

(草木・下草木・春場見・宮沢・押手)

赤城山に登り、沼のところまでくると、死者の姿が見えるという。また死者によく似た人が見えるともいう。(春場見)

旧四月八日には、赤城のさいの河原(地蔵岳にある)へ行つて、石をつんでなくなつた人たちの供養をしてきた。とくに子供のなくなつたときには、赤城へ行かなくてはならぬとされた。(小中)

新仏がでた場合には、神まつりができるのがふつうだが、赤城山だけは、その場合にもさしつかえないといわれている。(花輪)

登山の折には何も持たずに行き、赤城神社を拝して御札を受けてきた。土産物としては餡と串柿を買い、御参りのしるしとして近所に配つたりした。(草木・下草木・宮沢)

神社参拜の折には鳥居の上に石を投げ上げてくる。(栗生野)

仏事だからというので、地蔵ヶ岳に登り、また賀の川原で石を積んでくる。(草木・上草木・寒沢)

どこの峯でもよいが地蔵ヶ岳などに登つた。(下草木)

登山の際、部落の人が連れだって行くことはない。

(草木・下草木・宮沢)

一軒一人ぐらいで連れだって行く。(栗生野)

昔から十六才の女性は、赤城登山してはいけないと。赤坂の道元の娘が、十六才の時に赤城の小沼に入つて死んだからだといふ。

(下草木)

旧七月一日(かまのくちあけ)には、先祖様の靈が赤城山から降りて寺にきているといわれている。この日にはかまつぶた餅をこしらえて靈に供える。先祖様はお寺へ来るので、盆むかえの日には、お寺へ行

つてむかえてくる。(春場見・押手)

かまつぶた餅は、新らしいうどん粉で作つた。先祖様は、この餅を投げつけて、地獄のかまのふたをあけて出てきたといふ。(春場見)

七、講

庚申講

庚申の日、夕食後男女共に集り、米の団子を山のようにつくり、小豆の粥、ケンチン汁を煮て食い放題に食べる。道具は宿の道具を用いる。

宿は廻り番で、年六回ということになつてゐるが、夏時はやらないので五回位となる。宿は普通はその年にやつた家を除いて籠引きで決める。

結局一回全部回り終るまで籠引きしない方法で全部回ることになる。

十三仏の掛図をかけるが、掛図を一軒の家に止めておくと何か悪いことがあるという。またこの夜にてきた子供は、手くせの悪い子になると云つて忌む。

閑口氏の組は六戸で山を共有して林業もやつていたので、そこでも講を行つた。一〇戸の村組織としての組でもやつた。(中野)

沢入に庚申様があり、毎年三月お祭りがある。そのお札をうけてくる。(神戸)

組を作つて庚申をやつた。この組は四軒であつた。但し次頁の写真のよう文久二年の「覚」によると、二・四・六・八・九・十一月の年六回、六人の組であったようである。

掛け軸をかけて水を供えておく。そうしないと、地震がこの日くると、講をやり直さなければならない。この掛け軸の前に、口をゆすいで、お露香をあげて、ナムコーンソーンセーネマイタリマイソワカと唱えた。

お膳、お碗、お鉢、お御簾を入れる竹筒などが箱に入れて用意してある。

百姓が作ったものを供えれば、庚申様は喜ぶと言って、何でも供えたし、また来会者にはこってり盛って出し、たらふく食べた。ただし生きものは食べないことになっている。今は年に一回ずつしかない。寒になると翌年になる。もちろんオトウはチングリハングリ行なう。三年続けて籠が当るとよいといって、そういう場合は、餅をついて供え、御馳走した。この晩は寝てはいけない。長い話は庚申の晩にしろと言ってゆつくり話をする。



庚中の掛け軸一座間一
(撮影都九十九一)



庚中の道具を包みかける布一座間一
(撮影都九十九一)



庚中のお椀、くじ、くじを入れる竹筒
—古文書一座間一
(撮影 都九十九一)

夕食にうどんなり飯なりを食べてから「オタチ」といつて椀に山盛りにしたのを必ず食う事になっていた。外の物を充分食べた後である。それから夜遅くまでいろいろ話をして、また夜食として小豆粥を供え、自分達でも食べたりした。庚申様にはその外菓子を上げた。この晩は百姓の話をした。この晩は夫婦二人で寝てはいけない。なお庚申様は手がハ本あると伝えている。

一座間の橋詰では一年に一回、秋、庚申講をしている。その日に地震があつたらやり直すことになっている。庚申講をかざる前に水を上げてしまえばやり直さなくともいい」という。

庚申様の掛け軸をかけて「ナムコウシソンセンソウ、マイタリマイタリソワカ」と拌む。全部の人が終りに口をゆすいで線香をあげる。

平では庚申講を特定の人がやり、橋詰と柱戸では皆でやっている。これは冬至前に終る。生ぐさものや酒は使わない。(座間)

春場見では、庚申待は組合(ツボ)五軒でやっている。昔はもっと軒数があった。庚申待の晩には家中のものを呼んだが、今は男衆だけ呼ん

でやっている。オトウ人數というのは、庚申待の晩に、各家から男衆が一人ずつ参加する場合にいう。

庚申待は秋になつてから庚申の日にやっている。この日、かまど、

いろいろの火は全部新しくしてから煮炊きした。庚申待の呼びにこられれば、生ぐさを食べてはいけなかつた。この日、女の人は髪を洗つてはいけないとされた。

庚申待に参加する人は夕方から宿に集まつた。宿はその年の最後の宿で、鐵引きで決めた。戦前は年内に五軒の宿を全部まわつたが、今は年に一回である。仕度は普段着のいいもの、呼ばれてきたものは風呂に入り線香を上げた。となえことは特にない。

食べものは、夕飯と、夜食がである。夕飯は、もとは御飯、今はうどんである。夜食は小豆粥で、庚申様に供えて、皆で食べて、十一時から、十二時頃解散した。庚申様に供えるものは、水とおひらに五色で、油揚、昆布、いも、大根など何でも良かったが、生ぐさはいけなかつた。庚申様は酒が好きであったが、酒で失敗したために、庚申待の晩には、酒は呑まないのだといふ。庚申待の晩にはお碗にもれるだけもって食べた。

○庚申様はふつき（富貴）の神様であり、御馳走などは豊富にこしらえるものだとしてあまるほど作つた。あればその年は豊年だといつた。庚申様の好物はあんころ餅で、これは庚申様の宿が三年続くと、四年目にについて供えた。

つぎに、庚申関係の俗信をあげてみる。

○庚申待（背面金剛像の掛け軸）があるとそれを庚申待の座敷にさげておくのが最中に地震があると、同じ宿でやり直しをしなければならない。

○庚申様は血ぶくをきらう。

○飼師（鉄砲ぶち）の話はするものではない。

○旧十月十六日は庚申様が土地に下る日だといふ。この時には日を見なくとも、お庚申様の祭りをしてもいいという。（そのために、この日に

お祭りをして、ほかの日にやらなかつたこともあった）。

○お庚申様の日は寒いという。寒申は祀るなという。寒に入る前、節分のあとに祀れという。

○昔は五軒で順番に宿をしたので、その年最御の宿をした家では、庚申様の掛け軸、勝板類をあずかることになる。この家では、お正月には、正月様とは別の部屋に庚申様の掛け軸を下げておく。正月の餅も、正月様とは別に、ふかしたり、ついたりして庚申様の掛け軸のところへ供えた。餅は一升ついて、一重ねお供え餅を作つて供えた。掛け軸は一月二十日頃まで下げておいた。その理由は解らないが、いつたえでは、庚申様は大変やかましい人で、おしたじなども、作るときは味を見てはいけないという。

（春場見）

庚申待のとき人に呼んで、まず普通に腹いっぱい食べてから、二、三時間たつてまた夜食をする、これをタチといふ。全部のものが食べきるまで座を離れないことになっている。この晩はいくら沢山食べても腹をこわさないといわれている。大体一晩に一人で一升五合は食べるといふ。

庚申待の宿は鐵引きで決めた。正月の晩にあつた人は、一年庚申様が泊まつてゐるという。同じ順番を三年続けると、餅をついてふるまうことになつてゐる。普段冗談に、餅が食いてえなどといふ。一つの楽しみになつてゐるようだ。

当番（宿）で一切の費用を負担することになつてゐる。いわゆる宿味噌木損である。なるべく質素にやるのがたてまえで、庚申様は質素の神様といふ。

庚申様はサルダヒコダイジンであるとされている。ここでは、庚申待の由来について、つぎのような伝承がある。

昔因作の年があった。皆で集まつてどうしたら作物をとることができるか相談しようとしても、集まらなかつた。食いもんがねえときだから、食う大会をしたら集まるんじやないかといつて、人を集めめた

という。

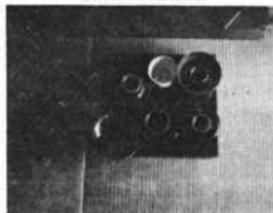
そして、そこでじっくり作物をとるにはどうしたうよいかを相談した。

そういうわけで、庚申講に入っているものは、ここに昔からいるもので、よそから新しく来たものは入っていない。

なお庚申ばらというのがある。これは一ヶ月おきに、赤い小さい花を咲かせる。（春場見）



百庚申塔（沢入名越）
(撮影 井田安雄)



庚申講の膳椀（春場見）
(撮影 井田安雄)

沢入の大沢寺の境内に庚申様のお堂がある。この中に青面金剛の半身彫の石塔が祀られている。この庚申塔は伝承によれば、押手からうつししたものという。（五一頁写真参照）

戦後は中止になつたが、それ以前は五人一講の庚申講がたつて、この村の周辺から代参にやってきた。縁日は毎年四月二十三日で、沢入には庚申の世話人が二人いて、寺世話人と相談して祭りの世話をした。この日東村の寺の住職がきて、大般若をやつた。戦前のことだが講のものは一人二十銭ずつ出しあい、一講五人で一円もってお参りに來た。これに



庚申塔一（座間）
(撮影 都九十九一)



庚申塔部分二猿（座間）
(撮影 今井善一郎)

沢入の西組では、今は庚申待をしていないが、以前は秋と春にした。戦時中に物資が不足したのでやめにした。西全体で一つの組をつくってした。宿はまわり番であった。参加者は米を五合ずつもちより、こ馳走は宿で自由につくつて出した。庚申待は夜にしたが泊らなかつた。

庚申さまは百姓の神様で、手が六本あつて仕事がよくできる人だという。

参加者は一戸一人ずつで、誰が参加してもよく、手のない場合は子供でも参加できた。

風呂に入つてから宿へ行き、線香をあげた庚申様のおすがたをかいた掛け軸を出してまつた。

夜食には必ず小豆のかゆがでた。庚申待のときには、食つただけとれるといい、沢山たべた。庚申様は作神様というわけだからである。なお、庚申待のときには魚はつかわなかつた。酒も出なかつた。不幸があつて、四十九日すぎない家では、ブクをきいてるので、参加しなかつた。

なお、庚申さまをおがむときの唱えごとがあつたが、ことばはおぼえていない。

正月には庚申待はしない。春はかいこ前、秋はとりいがすんでから、庚申さまの日にすることになつてゐた。(沢入西組)

五軒の組で庚申様を祭る。作神様で秋の正月前のうちにやる。くじを引いて宿を決める。宿が統いて三年になると、餅をついて近所の人を呼んで祝い、拝み出す。庚申様のお姿をどこかよその家へやる。くじが当った家は運がいいといふので、お姿を持ってきて正月中飾つてお供え餅を上げる。くじでお年を取る家がきまる。下の家では十月十六日を「お庚申さまが下る日」ときめて拝んでいる。宿では夕食にはうどん(前にはこほん)をさんざん食べて、そのあとオタチといって、お椀に山に盛つた上にハシを立てて食べさせられる。そのあとは世間話などして、十一時ごろアズキのおかゆを夜食として食べて解散する。もとは家内中のものが集まつた。朝から魚類は食べさせない。酒も使わない。ただ大食する。庚申様が「背の割れるのを見てえ」というので背の割れるほど食べる。だから、大食すると「庚申様のようだ」という。膳や椀がある。

五軒ぐらいで組んで、一年に一回どこの家でもしていたが、今は遠のいている。宿をした家に庚申様のお姿や昭和五年の講一組がある。百姓

のお祭りで、石屋などはまざらない。オタチ(てんこもり)はしなかつた。(白浜)

六軒一組、年六回庚申の日に開き、膳碗と掛け軸がある。話は庚申の晩でといい、夜おそくまで話し大飯を食つた。

組かたは隣り組と異りとびとびで組み、五穀豊穣、丈夫で儲けるなどの御利益があるといふ。(松島)

(二) 十一一講

山の神講 入り組の榆沢、春場見、名越の三つの組で一月四日に山の神講をした。これは新年会のようなもの。この席で共同水車の収支決算報告、足尾銅山の煙害対策費の要求、部落の運営のことなどを協議した。宿はまわり番。(榆沢)

十二講 旧正月二十日、米七合持寄り、御神酒錢五銭位出し、宿の増加タラダメ(不足高)を出した。膳にはツボ、ヒラ、チョコもつけた。(松島)

十二講 山仕事の人々の十二講を祀る仲間を十二講といふ。十二講はパンダイ餅が好きである。これは、ウルチの餅で、木ビキは板の上の間にせてつくので、この名がある。一月二十日は、ビンサ祭りといつて、十二講の人々は、パンダイ餅を作り、山の神を祀り、供え物をして飲食を共にする。(沢入)

(三) 二十三夜講(三夜待ち、三夜様)

毎月二十三日、月が上る夜中まで待つて拝んだ。若衆、娘が中心であるが、個人で拝む場合もあった。根本的には若者の集りとしての性格を持つている。二十三夜様は運の神であるといふ。(中野)

昔は毎月行われた。男も女も集まつて、御馳走を作つて食べ、遅く上の二十三夜の月を待ち、月が上ると口をゆすいで拝んで解散した。

昔はこうした物日が楽しみで、若い者が集まつてやつたのである。

(座間)

以前沢入りのツボ(組)で、三夜待ちが行われていた。参加者はおか

みなさん連中であった。この日にはお茶うけ（小豆粥とか汁粉など）をこしらえ、お月様の出る時（午前一時頃）まで待っている。三夜様はお月様のこと、信仰すると小銭に不自由しないといわれた。男衆がまじっていたこともある。また、博打ができるというので、夜どおり宿にいたこともあったという。年寄は、三夜待ちの晩はとてもおもしらなかったといつていて。（春場見）

宿を回り番にして小豆粥を飲いて御馳走した。三夜様が上がるまでやつた。その翌日に精進というのをした。米を五合ずつ持ちよって釜を洗つた汁を呑むまねでした。男だけで（「二十三夜も男が出る」）飲いて食べたのである。五合の米は食べるのに二回かかった。（白浜）

農閑期になると、毎月二十三日の夜、部落の中の組のものが、十五、六人宿に集まって、オダをあげて夜ふかしをする。二十三夜の月が空に上がると併んで夜食におかゆやヒモカワなどを食べて解散した。（下草木）。戦前までホウハイの十一、三軒でしていた。年十一回（養蚕期だけ休む）で宿が一回ずつ回った。夕飯後寄つて夜食にアズキがゆを食べ、月の上がるまでいて解散した。（白浜）

四 愛岩精進

愛岩精神ともいひ、火産禦を祭る。正月二十四日村中一戸一人以上必ず之に会す。其の法先ず早朝より婦女を避け、男子のみにて食物を調理し精進潔斎して其の年の豊穣と村内の息災安穩とを祈り旁ら風儀の善美と秩序の維持と協議す。是れ村内に於ける年中行事の大綱を議定するの会なり。今は全く廢れたり。（東村郷土誌）

正月と五月、三夜様の次の日に、その宿に米五合ずつ持ち寄つて、一べんに御飯をたいて一べんに食べた。別にすることはないが、水を浴びて愛宕神社にお参りした。愛宕神社は武尊神社の境内にあるので、ふるをわかしてはいってからお参りした。（下草木）。愛宕様は火伏女の神だから、宿に集まって、寒中でも川で水を浴びてお参りした。（寒沢）。

正月と六月の二十四日にホウハイで集まる。米五合持ち寄り、昼食の一合を白いかゆにたいておかずなしで（ホグイ）食べててしまう。その後ナオライで飯をたいて、三、四時ごろおかずをつけて食べる。ただごろつちやせていて休み、水でも洗びてくる。酒は使わない。（白浜）

四 その他

旧暦二十六日の夜祀る。小豆粥を食べる。二十六夜様を祀ると子が生まれるという。（中野）

伊勢講

代参が伊勢参りに出かけるのを抜け参りとする。（関守）

中津寺参り

中津寺で御詠りする時には白装束でした。生ぐさものは一切食べなかつた。素人の集りだったので、精進はさびしかつた。（座間）

柳平の男体山

花輪の中川原にもとお宮があった。大水でお宮が流れるというので、柳平の山上に移した。昔、日光の男体山に行く時、一週間水垢難をして出かけ、帰ると必ず中川原のお宮に御参りしたものという。

（花輪二区）

不動講

六月二十七日の夜、御籠りをした。信心者が集つて話などして一晩あかした。酒は呑んだ。（座間）

その他の講

講は盛んではない。昔はいくつかあった。

成田講（千葉）商売繁昌

高尾山（東京）火難除け

川崎大師（神奈川）厄除け 迦葉山（沼田）養蚕

古峯ヶ原講（足尾）養蚕

（足越、柏ヶ原）
昔、古峯ヶ原講、庚申講、天神待などがあった。今戸隠講が少々あり、お札をもらっている。（下神戸）

代參講

桐生の恵比須講

城南村大室の産泰神社

黒保根八木原の十二様

日光一荒山

沢入の庚申様

日待の事

信

八、俗
術

（一）巫

術

昔、アガタという女の口寄せが回ってきた。箱につかまつて、脇を立てる顎をのせてしゃべった。箱の中には人形が入っていた。生き口（遠くへ行っている人）死に口（死靈）の口寄せをした。

昔、アガタといふ。多くは暮暮の時に於て行ふ。年中の災厄を払い幸福を祈る。（東村郷土誌）

昔、九百年たった狐が神戸にいた。若い衆が集つて真中に中坐を立て幣束を持たせ、北の方の戸を少しあけておき、周囲の人々が「アサヤマハヤマ、ハグロノゴンゲン云々」と繰り返す。その時に神主の大行院が横

目で裏のあいている所を見ると、例の九百年たった狐が片足を縁にかけて中を見ている。間もなく、中坐が幣束を振っておどりだす。そしてなんでも聞いてくれという。周囲の人々が尋ねると中坐がそれに答える。どんなことでも答えたという。

中坐には誰がなつてもいいのだが、人によつてのりうつらぬ場合もある。高瀬屋のじいさんが中坐をしたときはなんともならない。仕方ないので、遊び友達の悪口をいって叱られたという。（神戸）

オカマカジ 青年などが集まるとした口寄せである。箕の中に幣束を持って立つ人を中坐といい、その周囲で、「朝山、早山、羽黒の権現並びに稻荷の大明神」と繰り返すと、中坐の持つている幣束がゆれはじめ

る。その時前に出て、「何様でござんす」と聞くと、「何様様だ」といつてしゃべりだす。中坐は誰でもできるが、ウスノロが良い。中坐を戻すときには、背中に字を書けばよい。（足越）

三ギッヂ タケさんという人が桐原でおぼえてきて、ボンデンなどを立ててやった。見物が沢山きた。某氏の叔父さんが物知りで、タケさんを呼び寄せてやらせた。その叔父さんが難かしい字を書いて読ませたから、それっきりかなくなってしまった。悪くのは、稻荷とか、孤とかいう。明治三十年頃のことである。（神戸）

小池（神戸の）に稻荷様を信仰する女の占師がいて、頼むと御祈りをして、「何某のたたりである。」などといつて聞かせた。（神戸）

一、三年前になくなつた人で、亀里多作という人があつた。唇をみて占いをした。随分盛つた。村の人はさほど見て貰わないが、他所の人が噂を聞いてやつてきた。お礼はお思召しだつたが、それでも金ができるて、桜を中学の周囲に植えた。戦後、五百円の苗木を何百本と植えた。多作様という。（神戸）

足尾の妙見様には女人がいて、いろいろ死んだ人の声を聞かせる。（神戸）

(二) 占・兆

○山で絆の果が木の上の方にあるときは嵐がない。下の方にあると、今は低いからあぶないといふ。

○嵐のある年には、トウモロコシの根は地上の高いところからで、土に足をひろげる。

○十五夜の雨は、大麦がはずれ、十三夜の雨は小麦がはずれる。(松島)

○カナカナが馬鹿になくと、天気になる。

○子供が騒ぐと、明日雨が降る。

○鼻にデキモノができると、伯母ごがはらむという。

○子供ができる夢をみると死ぬという。最早子供をもつ年でもない人に、そんな例があつていいだしたらしい。

○人が死ぬと寺に知らせがある。女が死ぬと台所で水を呑む音がする。

(三) 禁忌

切つてはならぬ木

「峯(尾根)の三叉、沢の二叉」といって、こういう形をした木を切るのを忌む。山の神(十二様)や天狗様が登っているからだといふ。

(関守、下草木、春場見、檢沢)

こういう木を「十二様のあそび木」という。(下草木)

まど木(木の枝が窓のような形をしている木)は切つてはならぬ。山の神や天狗様が、そこにとまって、方々を眺める場所だからといふ。

(検沢)

センの木(アクタラ)は、葉が天狗様の扇に似ているので切らない。

(関守)

便所の禁忌
便所の桶を地中に埋める場合には、桶の底を抜いて埋めねばならない。そうしないと、けつめど(尻の穴)の悪い子が生まれるという。現

にそといった例があつた。(神戸)

便所には汚ない物を乗せてはならない。何故なら、便所神には手がないので、その汚物を口に加えて出さなければならないからといふ。

(倫沢)

便所神は、昔は武士であったが、何かの遺恨で両手を切られてしまつた。だから、もし便所を汚された場合には、両手のかわりに口できれいにしなければならない。それでは困るので、人間が便所をきれいにしてくれば、流行り病(下の方の病)をおおしてくれることになった。

(春場見)

鼠の呼び名

養蚕期には、鼠のことを嫁御といつた。呼び乗てになると鼠にいたずらをされるからであるといふ。正月にも同様に呼んだ。

(宮沢、下草木)

初午の日の禁忌

昔、稻荷様が、支那に行って稻の穗をくわえてきた。ところが、むこうから追いかけてきたものがあつたので、稻荷様は茶の木の下に隠れた。

そのため、初午の日には十時前(四ツ前)にお茶を入れるな(煎じるな)といふ。これは、稻荷様が隠れているからお茶の葉を摘むなどいうことらしい。イリ(檢沢、春場見、名越)では今でも、初午の日

十時前にはお茶を入れない。(春場見)

種蒔きについての禁忌

戌の日に麦蒔きをしてはいけない。犬ほど人が集まつて食われてしまふからであるといふ。(檢沢、春場見)

戌の日に種蒔きはしないが、もし蒔く場合には、犬に食わせるだけ余分に蒔けば良いともいふ。(春場見)

種蒔きをしたら、十日程たつてから見回りをしろといふ。何の種でも蒔きっぱなしにしてはいけない。生えないところ(忘れざく)があると食えない人がでるとか家族に死ぬ者がでるとかいう。

(倫沢、春場見)

足尾の庚風呂あたりでは、十日種は薄かぬといふ。これはとうく（遠く）来るといつて忌む。

さくを跨いで大根の種を蒔くと、二股大根ができるといふ。くず大根なので忌む。（倫沢）

禁忌作物その他

生麦を作る悪いことがおきる。理由はわからないが作らない。

（黒坂石）

倫沢の亀井家は、亀井六郎の子孫と伝えている。亀井家では瓢箪が作れない。先祖が戦いに負けた原因が、瓢箪のつるに足を取られたからである。また亀井家では、小正月の十四日に松をおろしてからないと餅がつけない。昔いが行なわれ敵がよく攻めてきた。何時の頃か、暮に正月飾りをして、餅をつこうとした時に敵がきて餅がつけなかつた。以来暮に餅をつかない。現在でも十二月一日のカワビタリの日から、正月十四日まで、フカシ（セイロ）が使えない。（倫沢）

名越の松島家では、胡瓜が作れない。天王様に病気がなるようにオガシショをかけた時に胡瓜を作らないように誓ったからである。（名越）

高瀬家では、黍と胡瓜が作れない。また、正月に餅がつけない。昔、貧乏して餅米が買えなかつたためといふ。小豆飯を飲いて食つた。子供の頃三箇日小豆飯を食つたのを覚えていた。（今では行なつてない。）逸原家も胡瓜が作れない家例だったが、今では作つてている。

金子家、根岸家、坂本家も胡瓜を作らなかつた。

上山家は胡瓜が作れない。紋が三巴のためといふ。

（神戸）

高瀬盛治氏の家では餅がつけない。小林家では胡瓜が作れないといつたら、祖母が蒔かせなかつた。先祖が胡瓜のボラ（支えに立てる

木や竹のこと）に引っかかって転んだからといふ。（栗生野）

胡瓜を作つたら、一番初めのを天王様に上げないと罰がある。

（栗生野）

四 怪異・妖怪・異獸

光り玉 茶香み茶碗位の大きさの黄色い玉で、鳥が飛ぶよりいくらか速い。尾を二・三尺ひく。何の仕業かわからないが、人によつては山鳥だともいう。光り玉がよく見える人と見えない人がいる。母と一人で見た時には、玉が飛んでいて、木か何かにぶつつかつてバーンとぶつちらかつた。その話をしたら田黒の人も見たといった。最近では少なくなつた。（栗生野）

人玉 昔はあつたといふ。見た人がある。光る青い玉が尾を引いて空中を飛ぶ。

狐火 秋になると夕方山腹にピッカリとつく。続いて十五も二十もつく。ボーと消えてまたつく。（話者もみたことありといふ。）

（閑守）

狐の嫁入りともいふ。渡良瀬川のむこうの県道を提灯をつけて通るようと思えるが、思いがけないところで灯が行列をしている。急に消えたりする。時には馬か牛でも渡良瀬の方へ落ちたので人が出しているのではないかと思われる程、思いがけぬところに灯が沢山見えたこともある。（座間）

夜山をみてると、人が提灯をつけてあるくよう、いくつもみえて、それがぼんと見えて、見えたり、ついたりして見えることがある。それをきつねのよめとりといふ。（沢入落居）

猪 猪は落し穴でとるが、その肉を木にさして食べたら盲になつた。

（閑守）

オサキ オサキ憑き。オサキもよく人に憑いた。ほんやりした人や強情な人に憑く。鉄砲うちの五郎さんは、こんなものに憑かれるかといつていたが、秋刀魚を買ってセーブルに入れ、がつちりしばつておいたの

をとうとう取られた。その時に憑かれたような気がした。隆さんが魚を持つてしまった後からついてきた。取らせねえと思っていたが、とうとう取られた。(栗生野)

オサキが悪くと、その人は病人になつて人が変わる。一升でも二升でも、いくらでも食べるが、オサキが吸つてしまふので、身体が弱る。

氣違いと同じ喫り方になり、べらべら喫る。おとなしくしている者と暴れ回る者とある。八沢の人に憑いた時には、素裸で暴れ回り、ガラス戸一枚突き破つて、台所に飛び降りたが、どこも怪我をしなかつた。部落総出でおさえてしばっておき、夜明けに役場の車に乗せて群大病院に連れていった。群大では精神病と診断した。そこで三日間病院にとめてくれと頼んだ。次ぐ日には、おちて正気にかえつた。そしてどうして病院に連れてこられたかと看護婦に聞いたといふ。身体が弱っていたので、三日位泊めておいて帰つたが、その後は何ともない。五・六年前の話である。その人は、連れて行かれる車中で、「沢入の学校の下で、キツネの畜生が、俺の背中の上にいたかりやがつた。拳銃でうつ人が回りにいって、打ち殺されるから俺はじつとしていられない」と口走つたともいふ。

オサキに憑かれた人は、雨傘をさして川の中に入ると、オサキがおつかながつて、ふところや背中から出てきて傘の上に集まるので、傘こと川の流れに投げ込んで帰つてくるといふ。オサキは鼠位の大きさで、栗鼠に似ているが、尾が二つにさけている。そしてどんどんふえるといふ。

オサキに憑かれた人は、雨傘をさして川の中に入ると、オサキがおつかながつて、ふところや背中から出てきて傘の上に集まるので、傘こと川の流れに投げ込んで帰つてくるといふ。オサキは鼠位の大きさで、栗鼠に似ているが、尾が二つにさけている。そしてどんどんふえるといふ。

昔は、オサキを飼っている家があったといわれている。

オサキは、鼠みたいなもので、よくふえる動物である。オサキを飼っている家では、えさをやらないとひどい仕打ちをうけるといふ。たとえば、オサキが他所からその家の人に運んできたものを、またどこかの家の人に持つていつてしまう。そのため、オサキは大事にしなければいけないとわれた。

オサキは、おかしい(薬)でも、粉でも、なんでも、体につけて運んでくるといふ。持てきかたが上手で、粉などは上方(表面)はしつかりして、下方がなくなっていることがあるといふ。オサキがあまりとつくるとその品物がありあまつてしまふので、しまいにはオサキをからかさにのせて川へ流したといふ。(春場見)

ムジナ・狐昔、ムジナや狐が化けたものにさわれて、山の中に引つぱつといかれ、一晩中歩き回つて、ばかげた恰好をして帰つてくる人がかなりいた。豆腐屋が品物をかいだまゝ、山林の中を歩いてきた。また、下の武作は二十二・三才の頃、沢入の酒屋に仕事に行って、朝、顔を洗つていて、線路の上から女に手まねきされ、山路の方まで引っぱり回されたりした。某は某で、山で豚を密殺した時に、罠を忘れさせていたので取りに行つたところ、血をなめにきていたムジナに一里も一里半も山奥まで引っぱり回された。(栗生野)

神主(神戸氏か)はヒツギ(火渡り)、ハスルギ(刃渡り)をした。上草木の者が、白浜で、豆腐、油揚をかついて、ムジナにさわがれて一晩中歩いた。

神主、オサキを使つて家へ行って貸してくれといったところ、馬鹿なこというなことわられた。ところが、オサキが神主についていて、座間の橋詰のある家へ拝みに行つた折、神主の肩をチクリといたくした。その家の内儀がうどんを打つていて、行儀わるく坐つていたので隠しが見えいたのを、オサキが教えたのだという。(神戸)

御飯を食べている時、茶碗を叩くと、オサキがくるから、叩くなという。

肉を買ってきて、鉄橋のそばで取られた人もある。タスキとムジナは同じだかしんねえ。（草木・下草木）

ムジナにまやかされた話はよくあつた。上草木の元一という人が、豆腐と油揚をかいできて、白浜でまやかされ、一晩中つかつ回っていたという。鉄砲がてきてから話である。

某の親父は、下から肉を買ってきてすっかり取られた。（宮沢）

昔、狐にばかされた話はよくあつた。神戸で油揚を買ってきて、いつ間にかなくなっていたりする。中には丁半に負けた人が狐にばかされ、着物までとられたなどといって家に帰つたこともある。（座間）

沢入のむこうの草木に道のまがつたところがある。むかしはうそうたる森林があつて、道の上まで木がかぶさっているほどであった。そのころ、その道を夜おそく通ると、きれいな女に会つたり、うしろから巡査がついてきたりしたという。魚をもつてあるけば、しまいには、みんなとられてしまわれたという。（沢入落居）

ムジナはゴクロ（岩と岩との間の穴）によく出てくる。トウモロコシを食ひ荒すし、庭のツボ木をかじついてることもある。去年の刈り払い（下草刈り）の折、夕方、手ウキでたたいて一匹取つた。「うまいものにはムジナ汁」と昔からいって、なかなかうまい。油が強すぎるしくさいといふ人もいる。

熊の野あらし

以前は、秋のとうもろこしの出来あきに、部落の中を熊があるいた。とうもろこしのはたけをよくあらした。一晩に一畝ぐらいのはたけはあらしてしまうという。四、五畝のはたけなら、二、三日通つくると全滅させてしまったということである。熊は火がきらいたつようだ。

○伊様に上げた御飯を食べて出掛けると、道に迷わない。（大烟）

（沢入落居）

イタチ イタチは柏子木をたくように、カチカチと早い音をたてる。家中にいても、よく聞こえるようなえらい音をたてる。

（栗生野）

山犬 猿。山犬様は、山の神の使いで、こわいものではない。昔は道に迷うと送りとどけてくれたものである。ただ途中で転ぶとかじるので注意が必要である。

昔は山犬が家の近くに出没した。使用中無防備状態なので、便所には本刀をおいておいた。（春場見）

牛沢の桑原源太郎さんが鹿打ちに行つたところ、ちょうど死んでいる鹿があったので、持ち帰つて売つたか、食つたかしてしまつた。そのうち母親が亡くなつたので、葬つたところ、墓が掘られて足袋とか何とかだけ残され、死骸がなくなつてゐた。狼が仕返しに掘つたのだろうという。山犬がとつた鹿を持ち帰る場合には、必ずそこに塩を置いてくるものだという。（神戸）

猫 以前、岩焼きの火熱で風邪をひいて寝ている人があつた。すると猫が障子を破つて入ってきて、病人のまわりを回る。同じことを三日くりかえしたので、四日目に火吹き竹で猫をなぐつたら、風邪がけがりとなりおつた。（松島）

死者の上を猫が三遍往復すると、猫の魂が死人に入り、死人が動き出す。この時、死人は水を飲みに行き、水を飲むと強暴性をおびてくるので、飲ませないように早く席で仰がなくてはいけない。それでたゞくと猫の魂がぬける。平素は、等でやたら人を叩くものではないという。

（松島）

（五）呪いと民間療法

○仏様に上げた御飯を食べて出掛けると、道に迷わない。（大烟）

○赤城山に登る時、梅干を含んで行くと、霧が晴れる。 (大畑)
○雨が降り過ぎた時には、神社に星間集まり杉、檜をどんどん燃やした。(下草木)

○深い井戸がある。十二個の梯子がとどかない位深い。雨乞いの時に井戸がえをする。けえるか、けえきらないうちに雨が降った。

○井戸の中にはかまと岩(あがま、おがま)があつてその上に水がのれば、花輪へ水がのる。あれを見てこい、のれば水びたりだといった。明治三五年の水害の時は恐ろしいほど出た。渡良瀬川は、人とり川といわれた。(草木、下草木)

○正月十五日の小豆粥を、お膳の上に一寸上げて、手につけたり、足につける真似をすると蛇よけになる。

○小豆粥の器や粥を供えた神様の鉢を洗つた水を家の周囲にまくと蛇が来ない。

○その余った水を甘柿にかけて、「なれ、なれ、ならぬと切るぞ」というと良くなるということだ。

○兄弟で柿の木のところへ行き、兄が刀をさして、「なるか、ならぬか」といい、弟が「なーる、なーる。」と答える。そしてその水を柿にくれた。柿がよくなるとか、洪がぬけるとかいう。

○粥がき棒につけた歯玉をとつておいて歯取りに行く時、少しづつかいたのをたべさせた。腹除けだという。(座間)

○初午の朝早く、その家の主人がからうすを叩くと、神様がこの音を聞いて、穀物がなくなつたから、早くとつてやらねばならぬというのだという。(春場見)

○安産は産奉様に祈る。これは荒砥村勢多郡城南村にあり、お札には底なしひしゃくを進せる。(中野)

○斎藤新吉氏の家の金仏は足尾からもつてきたもので、この仏様にヨロイをあげて拌むと安産である。また水天宮のお札(ご真言)の紙を切つて呑ませるのもよい。(車沢)

○黒坂石の高草木利男氏の母親は、呪いの名人で何事にもよくきく。この人の姑は柄木から嫁にきた時この呪法を伝え、代々嫁に伝える秘法になっている。

○別に春場見にはオガミヤがいてよくきいたが、現在では死亡していない。(黒坂石)

○こり 大病の時、生きかしてえつていうので、武尊神社の方に向つて、もよりの川や水はで、頭から水をあびて、こりをとつた。四十年ほど前に実際にやつた。(草木、上草木)

○たまよび 大病の時、くずやの屋根に上つて、破風の方から、その名を呼び返すと生きる。(草木、上草木)

○悪い所を治すお願シヨウをかける時に、豆腐の四寸みを切つてそのまま豆腐を屋敷桶荷に上げる。今でもやるが、日は限らない。

○身体が痛い時には、稻荷様に豆腐を上げるからとお願シヨウするとな

おる。一六三除 (下草木)

○暑さまけ (暑氣あたり)

○胡爪の葉を塩でもんで、足の平につけるといい。(座間)

○大根おろしを頭にあてるといい。(黒坂石)

○首笠をかぶせて水をかける。水が笠の下へもるとイキレが治る。もららないのはイキレではないなどという。また蓼を塩でもんで、足のうらやコメカミにこすりこむといい。(東沢)

○風邪 豆りいを作つて紙に包んで三本辻においてくる。風の神をおくるといい。(下神戸)

○風邪にはネギ味噌をこさえて食えばなおる。(宮沢)

○イボ お盆様に供えた茄子の馬で、人に見られないようにイボをなせておくとよい。(東沢)

○お盆様に供えた胡爪、茄子をこすつてつけるとよい。

○ボウ数だけの米粒に墨をぬり、それを紙につつみ、柿の木の下に埋

めるとよい。（黒坂石）

渡良瀬川の向う岸にあるオボシ岩にたまつた水には、星間の十二時に行つて見ると星が映つてゐる。その水をイボにつけるとなおる。

○マメ 足のマメのまわりを半分ずつ、指で「アブランケンソワカ」といふながら豆の上をおす。（神戸）

石川五右衛門と唱えてなで、後にアビラウンケンソワカといつてお

す。（神戸）

（神戸）

○田虫 墨をすつて「鳴」という字を沢山かく。二回そうするときく。

（神戸）

○塗かぶれ ゴマをすつて付けるとよい。（黒坂石）

（神戸）

○火傷 熊の油をぬるとよい。熊の脂肪を溶かしたもので、熊狩りの人

に分けてもららう。（黒坂石）

○ブチミ（打ち身）蠍のアルコール漬けの液を患部につけるとよい。

（黒坂石）

○こう手 男なら女の末っ子、女なら男の末っ子に紐でしばらせる。障子でも格子でも目どから手を出してしばつてもらうとなおる。

（神戸）

両親のある末っ子に越しに手を出して糸でしばらせる。（東沢）

（神戸）

○吹出物 蝋の皮で忠部をなでるとよい。（黒坂石）

（神戸）

○虫歯 松の芯を呪つて（梵字を書いて）かませる。かんだところを釘で柱にうちつけるとなおる。（東沢）

（神戸）

カラミオシの中へ（オロス時）白南天の実をすつて入れて、その水を耳へ（左歯が痛い時には右の耳へ、逆も可）一滴たらすとよい。

（神戸）

○耳だれ 馬の糞をしほつて布でこして耳に入れると熱がとれる。

（座間）

○血どめ 薙の根を切つて傷口にあてるとよい。（黒坂石）

何の葉でも三種類もんでつけると止まる。（神戸、黒坂石）

○鼻血の止め方 男が右の鼻から出した時は、女人の人が懐手して左の乳をつかむと止まる。女の鼻血の持には、男が反対の墨丸をつかむとなおる。

（草木、下草木、宮沢）

（神戸）

○血の道 猿の黒焼きを食べるとよい。（黒坂石）

（東沢）

袈裟丸山にあるオーレンを煮じて呑むとよい。実母散にも入れるといふ。（東沢）

○チグサ（乳のはれもの）墨をすつて、筆ではれたところへ、鰹鮎、鰯鮎、と書き、まつ黒にする。家のじいさん（高瀬盛治氏）のが書いてやつたので、沢山の人が来た。これは墨の中にニカラワが入っているのできくのだという。終わりにアビラウンケンソワカといつて、ブーと吹ぐ。

○乳不足 猿の黒焼きを食べるとよい。（黒坂石）

（神戸）

○中氣 柔の木の榦で食えは、中気にならない。

（草木、下草木、宮沢）

彼岸の中日に鳥居参りをするといふ。（草木、下草木）

○高血圧 植の葉の新芽を煎じのむとよい。（東沢）

（神戸）

○胃病 蠍を食べるといふ。（蟻は肋膜にもよくきく）（黒坂石）

（神戸）

○発熱 熊の胆をのむ。熊狩りの人に分けてもらって常備した。

（黒坂石）

○喘息 キキョウの根を煎じてのむ。（東沢）

（神戸）

○虫くだし センダンを煎じてのむ。（東沢）

（神戸）

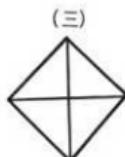
○麻疹 ゴボウの種を三粒のませるとよい。（黒坂石）

（神戸）

○ジフテリヤ 南天の葉を塩でもんで、汁をしほつてのませる。

（東沢）

○子供の夜泣き 半紙に鬼という字を書いて折って、枕の下へ入れる。
紙の折り方左図の通り。線内へ折る。



りにそのかほりをうつすと、厄病がみが入らぬといった。最近はあまりいわない。(押手)

○便所神には両手がないといふ。そのため便所をよこしてはならない。よこすと子孫にさわるにいふ。(押手)

○臼の上へあがるな、あがると臼のせい(背丈)しかならないといふ。

(補足資料)

沢入地区の造塔資料(一部)

二十三夜塔 文化三年丙寅年六月二十三日

道祖神塔 (二神立像) 年号なし

地蔵立像 享保十六年亥四月仲六日

念仏供養塔 宝曆十一辛巳十月十六日

当村中

道祖神塔 (二神立像) 年号なし

地蔵立像 享保十六年亥四月仲六日

講中歎喜 念仏供養

おくに、おとう、〇〇〇

お〇め、おふじ、お満す

おせき、おは満、おたま

おいま

馬頭観世音 安永八亥天十月吉日

若干念佛塔 如是畜生 発菩提也

峯文化第七星次上章教禪孟夏仏生日
(以上、沢入名越、道端岩の上)

百番供養塔 (石宮) 年号不明

願主 龍井半六

庚申塔 (青面金剛尊半肉彫) 元禄九年丙子九月吉日
(觀音半肉彫) 元禄九年丙子九月吉日

名越春場見講中

ひづ、いと、つる、〇〇

- にぎり飯でも弁当鉢でもころがり出すことは縁起がよい。ころがると獲物を倒すにかけたもの。
- 女が鉄砲をまたぐとよくない。
- 朝不吉の話を聞くとよくない。
- 不幸に縁のあった人が加わることを忌む。
- お産のあった家人も忌む。
- 女性の月のものあるときは炊事をさける。
- 汁かけ飯を忌む。出掛けに欠けたといって忌む。汁の中へ飯を入れるのは問題にしない。(暮平、暮坪)
- こと八日(一ヶ月おきくなる、年に六回)以外にはねぎをもやはしてはならないという。こと八日のとき、くさいものをもやすとか、家のまわ

○つ、○○、いね、とら

せん、たつ、て○、まん

たつ、いせ、きち、みや

○く、あき、うし、いま

た○、て○、つ○、たえ

百庚申塔

天明六丙午五月吉祥日

庚申塔

天明六丙午季夏吉日

庚申塔

元文五庚申天十二月吉日

庚申塔

押手中

庚申塔

天保三壬辰年正月大吉日

庚申塔

寛政十二庚申年三四月庚申日

庚申塔

青面金剛明王

茲時享保拾六年亥天四月吉祥日

庚申塔

寛政十二庚申年六月吉祥日

庚申塔

寛政十二庚申年

庚申塔

天保六年

庚申塔

西組講中

庚申塔(三基)

年号なし

念仏供養塔

(阿弥陀坐像) 宝曆九己卯四月十六日

地蔵立像

享保四己亥四月吉祥日

地蔵念佛供養

(以上、沢入大沢寺境内)

庚申塔

年号なし

庚申塔

万延元庚申年

庚申塔

天保七年十一月

庚申塔

当国山田郡山地村初太郎

庚申塔

花輪村

高草木新太郎

庚申塔

万延元庚申年

不動明王立像 明治廿五年一月廿日

炭焼有志連中

不動明王立像 明和戊子六月

施主 松島某、吉田某

植松九左衛門、松島某

同文右衛門、同某

小林弥兵衛

(以上、沢入、不動滙近く)



不動石像

沢入不動滙の傍に立つ

建立年 明和戊子六月

施主 小林弥兵衛ほか6名

(撮影 井田安雄)

年 中 行 事

ま 先 が き

山村とはいゝ、鉄道も通じ採石業が発達している土地がらだけに、早くから生活が近代化し、古いものの消滅は意外に早かった。生活が忙しくなり昔からの風習は急速に消えていったが、ここに記すものは、その残存ともいゝべきものであり、それなりにこの地域の特色も見られる。

まず、山の神・十二様の信仰は、なおかなり強く残っている。正月四日の山入りや十二日には山の神にお参りし、オミキスズという竹筒に酒を入れて供えている。(このオミキスズは前に同行の上野勇氏が報告されたことがある)。

小正月行事はかなりにぎやかに古風を残している。ドンドン焼きはほとんどしないが、盆の迎え火(カド火)をたかないとともに何かこれを廃した事情があつたものだらう。正月十四日と大みそかの夜、オタキアゲをして御飯を鉢に盛り、箸を家の人數だけさしてオミタマサマ(仏壇)に供える風習は珍しいもの一つで、早くから都九十九一氏も注目されてきたが、正月が祖靈を迎えて祭るものであった本来の意義を示しているものと思われる。十五日のかゆをコタネガニとい、カユカキ棒でかきまわしてハラミバシで食べる風習は広く見られることで、今年の生産の豊かさを祈る呪いの一つであろう。一方、成り木責めもよく伝承されていた。十五日のかゆの汁を柿の木にかけて、なたで傷つけて「成

らなきや伐るぞ」とおどすこわい呪いや、兄弟で柿の木に向かって「なるか、ならねーか」「なる、なる」というかけ合い式のははえまい祝い行事まである。

十七日の観音祭りに、「むこいじめ」が残っていたのも珍しい。はだかになつてお参りするむこに、水をかけたり襷でこすつたりしたというのは、村入りを承認する儀礼とも、成人式の変形とも見られる行事で、話には聞くが、実際に残っていたというのは珍しい。

二十日祭りにシトギを作つて山の神に供える風習もあり、シトギは笹の葉に包んで上げたというから、チマキなどの原形を示す古い食物の一つだしたものである。なお、二十日祭りの日にえびす講もするが、また、当番の家に集まつて共同飲食したり、組のケイヤクをしたりしているのは、えびす講が文字通り「講」の行事だつたことと関係がありはないか、もっと他の例に当たつて見たいところである。

二月初午前夜のオシラマチも伝承が多く、オシラ様(蚕神と考えている)にマユ玉を一升ますに盛つて供え、夜中にカラ白をついて神迎えをしている。初午の食事はシミズカリやでんがくと決まっていて、特に火を忌むきびしい物忌みが伝わっている。

四月八日に、前の年に死者のあつた家では必ず赤城登山をする古い風習が全村にひろく残つてることは、かつて今井善一郎氏が報告されて有名になったことだが、死者の靈魂が山頂に集まるという古い信仰を残しているものであろう。この日に、藤や卯の花を山から取ってきて、トボや神仏に供える風も行なわれ、四月八日が一般に仏教の方から祝賀が

生まれた日というだけでなく、もっと古風に山から神を迎えてきて祭る

大事な日だったことを示しているようである。

七夕には「三粒でも雨が降らないと厄病神がはびこる」「不作になる」といって、雨の降ることを期待したり、七夕飾りを菜大根の煙に立てて虫除けの呪いにしたりする風習は、七夕が本来農業神の性格を持つてい

たことをよく表わしている。

盆には迎え火（カド火）をたかないと、盆迎えの帰りに線香を一本ずつ途中に落としてくると、その煙にのって先祖様が来るという所もあり、百万灯の名残りを思わせる。新盆参りの挨拶に「結構なお盆様でねでとうございます」という意外なことばに奇異の感を持たされるが、死者の靈にとては、なつかしい家の帰つて来て祭られる盆はめでたい

日だったのであろうか。送り火はどこもよくたいていた。三本辻でも

やして、青竹が威勢よくはねる音で盆様は帰るといわれる。その後、墓

参りをしているから、靈の帰る先は三本辻から先の外界とも、墓地とも

考えていたらしい。

秋の十日夜には「九日餅に十日だんご」といつて、だんごをトント入ったツトコダンゴを作つて、室内の神々や、外の稻荷・山の神・墓地などの神々に供える非常にいねいな祭り方をしている。このツトコをカエルがしょって神様の所へ持つていったという話も残っている。今年の収穫を神々に感謝して、つい重に供え物をして祭る敬けんな古来の信仰の残存であろう。

コト八日のダイマナタがここにもあつた。コト八日様という箆竹に餅をさして肥やし場に立てて祭り、カゴをカドに出して魔除けとしたり、「水もならぬコト八日」といつてきびしく物忌みしていたことが伺われる。

以上、ごく目だつことだけ取り上げてみたが、本文では各調査員の報告をまとめたために、精粗が入りみだれ読みにくいくことをご容赦願いたい。

モノ日、コトビ

あまり区別しない。昔は月に一度ぐらいは何かあって、半日ぐらいずつ香気に入らが、今はほとんどなくなり、正月か盆にゆっくり遊ぶくらいである。（下草木）

五 節 供

三月三日、五月五日、七月七日、九月九日、十一月十五日をさす。ハツサクはあまり言わなくなった。（下草木）

ツサクはあまり言わなくなった。（下草木）

一 月

年 神 様

元日の卯の刻に入る。帰るのは卯の日の卯の刻に帰る。「年神様が永くいる年は悪年だ」という。（萩平、幕坪）

年 男

三ガ日は家の若大将が若水を汲み、火をたきつけて、おぞうにつくる家が今もある。女たちは起きない。（栗生野）

三ガ日は若水を汲む。七日、十五日、十六日もする。オカンの水は汲むだけなく年男が入れる。（萩平、幕坪）

若水を年男がくむ。年男は戸主となる。（神戸）

元日、年男が若水を汲んで、お雑煮をつくり、神に供える。（二日、三日も同様）お雑煮をしないで、栗の強飯をする家もある。丸山（近くの山）に初参りをする。（関守）

お供えは家の外の神（カワバタの水神様、稻荷様など）からあげてくる。朝の雑煮の汁にはごぼう、人参、大根、芋、豆腐をきまつて入れる。昼はウドン、夜は柏漬の魚で御飯をたべる。（大畠）

年神様の棚は神棚とはべつに有る。この棚は組立て式になつていて、節分までつるしておる。節分のときには、いった豆をますの中に入れてこの棚へあげておく。正月のおそなえもちは、この棚へ節分まであげておく。(花輪)

正月 棚

組み立て式の棚がある。これを高瀬英寿氏方では上段の間にかざるというが、他ではオモテノマ(一般的な茶の間)につるるのが普通のようだ。

この棚の上にコブ、カキ、アサだけ上げる。(神戸)

初参り

近くの神社へ早朝お参りする。貴船神社や成田山へ出かける人も多い。(下草木)

新年 会

元日に大字の人が武尊神社にお参りして、会館で酒を飲む。(下草木)

年始回り

塩かま、手ぬぐい、はがきなどをもつて、親戚を回った。組合も回った。(白浜)

親類、組合、寺に年始に出掛ける。(関守)

村内全部に年始回りをする。(大畑)

むかしは戸別にめぐつた。今は部落の鎮守鳥海神社の社前で元日にす。そのあと組合年始がある。組合年始は本家へ分家が集つていき、次にその次の分家へ本家の人がまず一人でいく、ついでじゅんにめぐる。

年始日は三日。(神戸)

家 例

袖丸の柳沢家は三ガ日はオカンを食べた。オカンといふのは、里芋、ゴボウ、人参、大根、頭つきなど七種類のものを煮出したつ。(汁)のこととでそれに餅を入れて雑煮にして食べた。(萩平・暮坪)

釜技の大塚姓一軒は正月三日間は餅を食べないで赤飯をたべた。よそから貰うのはかまわない。十四日も赤飯で餅を食べない。(萩平・暮坪)

仕事初め(二日)

正月二日、山へ行ってちょっと仕事、下刈りとか煙仕事とかをしてくる。初買いなどはしない。(神戸)

親戚に御年始に行く。(大畑)

仕事始めとして、ほんの少し、山仕事などをする。(大畑)

出初め、仕事始めなどといつて半日仕事をして休む。(萩平・暮坪)

棚さがし(四日)

三ガ日は毎朝雑煮を作り神棚に供える。四日の朝、神棚の供物を下げて、かゆにして食べる。(白浜)三日までに供えたものを下げる。(神戸)

山入り(四日)

山入りは、山の神にへいそくを上げる。(白浜)

「山入り」と称して、お十二様(峰々の清水の湧出している所に、多く祭祀されている山の神で、社は小さな石宮)にお参りし、竹筒に酒を入れて供える。(関守)

和尚の年始(四日)

坊さんと女の年始日だ。ただし、嫁は生家に帰らず、近隣の年始をする。(神戸)

和尚さんが腰をもつて年始に入る。(大畑)

和尚さんが半紙に刷つた仏の絵をもつて年始に入る。(関守)

和尚さんと女の年始日だ。(大畑)

六日 女の正月といつて女の人が休む日。(萩平・暮坪)

六日ドロ」と言つてとろ飯。年取りとは言わない。(神戸)

七 章(七日)

七草がゆを作る。あり合わせのナツ葉・ゴボウ・ニンジン・大根・セ



サクタテ（神戸）
(撮影 都九十九一)

山入りと山じまい
山入りは一月八日、山じまいは十二月二十六日、もちつきがはじまる
ので山を下る。（向沢入）

山の木をきりはじめるのは暦をみていよい日にする。（向沢入）
クワダテ（十一日）

「蔵開き」と言っているが、実際にはこの行事ではなく、また「タワダテ」という。蔵に供えたお松と御幣しめを持って烟に行き、サクを三サクばかり切つてそこに松を立て、赤飯を供える。（神戸）

この日は百姓の仕事はじめの日、この日家人のだれかが烟へ行つてサクを三サクほどきいて、そこへおさこにぼし、へいそく、お松（俵にさしたもの）をもつてひつてあげてくる。（春場見）

この日、烟へ幣束をたて、頭付とオサゴ（白米）をあげ、サクを三サクきる。この日はモノヅクリの日、山へボタきりにいく。（萩平・幕坪）

リなど、烟でとれるものを主に入れる。昔はセリタタキをしたが今はしない。（下草木七色いたおかゆは必ず食べるも。栗生野）

朝、七草がゆ（春の七草の入った）を食べる。（関守、大煙）

セリ、ナズナなど七種類の野菜を入れてかゆをつくる。その時「七草なすな、どうどの鳥が日本の国へ、わたらぬうちに、七草なすなでストントン」

と唱える。（神戸）

山入りと山じまい

山入りは一月八日、山じまいは十二月二十六日、もちつきがはじまる

ので山を下る。（向沢入）

山の木をきりはじめるのは暦をみていよい日にする。（向沢入）

クワダテ（十一日）

「蔵開き」と言っているが、実際にはこの行事ではなく、また「タワダテ」という。蔵に供えたお松と御幣しめを持って烟に行き、サクを三サクばかり切つてそこに松を立て、赤飯を供える。（神戸）

この日は百姓の仕事はじめの日、この日家人のだれかが烟へ行つてサクを三サクほどきいて、そこへおさこにぼし、へいそく、お松（俵にさしたもの）をもつてひつてあげてくる。（春場見）

この日、烟へ幣束をたて、頭付とオサゴ（白米）をあげ、サクを三サクきる。この日はモノヅクリの日、山へボタきりにいく。（萩平・幕坪）

山の神へイソカが立っている（栗生野）（撮影 関口正巳）



オミキスズ一山の神に酒を供えた竹箇
(栗生野) (撮影 関口正巳)



山の神へイソカが立っている
(栗生野) (撮影 関口正巳)

俵様（米俵に松飾りが立ててある）を畠に持つて行き、酒、赤飯、オサゴ、干し柿などを供え、サクを三サクか五サク切つて後、立つたまま酒を飲み、食事をして帰る。この行事は「鎌入れ」（関守）「鎌立て」（大煙）といわれている。

蔵開きをする。（関守・大煙）

ハナギを切る（ニワトコの木が用いられる）。（大煙）

倉の中のお飾りを烟に持つて、クワでサクを三サクきつて、そ

の真中にお飾りを立て餅を上げた。最近はしない。（白浜）

十ニ 様（十一日）

山仕事をする人は、十二様にお参りする。竹箇一本に酒を入れて供える。（関守）

十二様の日、この日は木を伐らない。（萩平・幕坪）

「尾根に三つまた、沢に二つまたは、十二様の遊び木だ」という。ナラ

山仕事をする人は、十二様にお参りする。竹箇一本に酒を入れて供える。（関守）

十二様の日、この日は木を伐らない。（萩平・幕坪）

「尾根に三つまた、沢に二つまたは、十二様の遊び木だ」という。ナラ

の木が多い。（宮沢）

部著の役ぎめ

正月十二日は十二様の祭りで、回り番の宿に寄つて食する。その時に、常会長・PTA役員・衛生委員・代議員・寺世話人等の役になる人を決める。部落により七草や、二十日正月にする所もある。（下草木）

小正月

お松ひき（十四日）

松とマユダマのさしかえをする日で、お松は夫々の家で燃してしまふ。ドンドン焼はやらない。（三ヶ郷）

松飾り、オシメは、十四日にさげて、稻荷様にしんぜる。（閑守）

朝風にあわない内に、お松をさげる。（大烟）

下がたお松はまるめて、子供などにいたずらされない所（各戸、置く所は決まっている）に置き、かわいたら燃す。（大烟）



門 松（座間）
(撮影都九十九一 昭和38年)



お松ぐい（座間）(撮影都九十九一 昭和38)

山から白萩の木をとってきて画玉を作つてさし、蚕の神に供える。お松をさげたところへは全部あげる。（閑守・大烟）

ハナ（ニワトコの先端を切つて）をオシメをさげた後にあげる。（大烟）

モノツクリ

大正月は單に正月と言い、大をつけないが、小正月の方は小をつけて区別する。

ボクとしては山桑、ナラ、白ハギなど。花木にはニワトコ、ミズブサ、ノデンボウ（ねるで）でカタナ・カユカキボウ・ハラミバシをつくらる。カタナは大小をつくってボクのところに飾るが、これは子どもが健やかに育つよう、とのことである。

小正月餅をつき、オマイダマ（画玉）もつくる。そのうち、十六デンジと呼ばれるだんごは、うるちの粉で、テニスボールぐらいの大きさである。

花も十六段にかく。

右のような行事が正月十四日で、これをモノツクリと言つてゐる。（神戸）

正月の松をひいて、マユ玉をボク（何の木でもいい）にさして飾る。ノデンボウの木で刀・きね・かゆかき棒などを作る。マユ玉は十六デンジと云つて小判形の平べつた大きいのを十六作り、他は丸いのやマユ形のを作つた。ドンドン焼はしなかつた。ニワトコの木でハナをかいて、家の中央や神社や墓場に上げた。（下草木）

小正月には、竹の先をわってハナをつけ、回りにヌデンボウの木を下げて、「花が咲いたり実がなつたりした形」を作り、堆肥場に立てた。（下草木）

十三日に小正月かざり、けずり花をかざる。（萩平・幕坪）

蚕があたるよう、オシラ様を祝うため、マユ玉飾りを作る。また、ミズブサ（ミズキ）の木を取つて来て、ハナをかけて神棚に飾る。やる

ことをしないと、具合が悪かったりした時に、やらなかつたからだといわれた。(栗生野)

蛇・ムカデのまじない

十四日にはユ玉のうで湯を家のまわりにまく。蛇・ムカデの家に入らないまじない。(萩平・暮坪)

オミタマサマ

高瀬英寿氏方では、「オタキアゲをしてオミタマサマに上げる。」と言つていたが、とくべつにどこがオミタマサマかわからない。ただ大みそかと正月十四日の晩にオタキあげはする。夕食の最初の部分を鉢に盛り、それに普通の箸を家人の人数だけさして、ショジン(諸神)様の棚、お棚、庚申様の棚に上げる。(神戸)(大みそかの項参照)



正月棚(座間 高瀬弥十郎氏方)
(撮影都九十九一 昭38)



正月棚(座間 高瀬弥十郎氏方)
(撮影都九十九一 昭38)

に小屋はつくらなかつた。最近(十年ほど前から)は防火上からこれをやめにして稻荷様にあつめている。(春場見)

十五日がゆ(十五日)

小正月十四日のかゆをにたなべを洗つて、その水を家の回りへまくとヒビ(蛇)や何かがはいらないという。(宮沢)(栗生野)かゆはハラミバシを使って、吹かずに一ぱいだけおかずなしで食べる。そのハシは取つておき、あとはおかずを食べる。主人の使つたハシを別にしまつておき、訴訟の時に持つていくと必ず勝つといわれる。(栗生野)

かゆかき棒

もとを四つに割りユ玉をはさんだ棒で、十五日の朝、かゆを煮る時にかん回してから大神宮様に上げておく、そのまま、次の年の正月まで置き、田の水口にはささない。ハラミバシを作つて、十五日のかゆを食べる。(下草木)

コタネガコを食べる(閑守)

朝小豆がゆをつくつて食べる。小豆がゆはノデンボウ(カニカキ棒)でかきまわす。ノデンボウの先は四つ割りにしてユ玉をはさんでおき、かきまわしてそのユ玉を中におとす。ノデンボウはヘイガミにつつんで神棚にあげておき苗代の水口に二本さす。

小豆粥は、吹いて食べてはいけない。また粥の中に塩気を入れてはいけない。

粥を食べた。ハラミバシ(中太の箸)は、主人のものだけとつておき、訴訟事の時、その箸で食事をして行くと、理屈に負けない。(大畠)
成り木賣め

十五日の小豆がゆを食べる前に、かゆを手足につけるまねをすると蛇除けになるという。また甘納の木にその粥を兄弟で持つて、兄が「なるか、ならねーか」と言い、弟が「なる、なる」と言つた。兄は刀をさしていつたが、今はそんなことはしない。(座間)
小豆がゆまたは白がゆで、「これは残さないようにみんな食べてしま

ドンドン焼

一月十四日の晩にする。この日の朝、正月のおかざりをさげて、なわでしばつて、おおごとの山の神様のところまではこんできた。イリ地区の各家のおかざりをあつめてこれに火をつけてもやした。他地区のよう

え」と言われた。その鍋に水を入れてよくすすぎ、その水を湯桶に入れてトギレのないように家のまわり中にまく。これによってへびが家に入らないという。

またこの水を柿の木などに持つて行って注ぎかけ、「ナラネートキルゾ」などと言ひながら、なたで木に伐りつけ傷をつけたる。(神戸)
コタネガユは米のかゆの中に小豆や粟、稗など小粒の穀類を入れ、力
ユカキ棒でかきハラミバシで食べる。刀は二本つくる。(萩平・暮坪)
成り木賣めは十四日のマユ玉のうで湯を十五日の朝果樹にかけ、「な
るかなねえか、ならなきやきるど」と三回まわる。そのとき木を刀で
はたいてきたるまねをする(萩平・暮坪)。

十 六 日

十六日は「熊鬼の首もゆるす」といって、子供がいたずらしてもこの
日はしからない。マユ玉をさける。朝はマユ玉を煮る。(萩平・暮坪)

十 七 日

マユ玉をさけて、食べる。(但し、大神宮様と、年神様のは二十日ま
でそのままにしておく)。(大烟)
十九日までにマユ玉をとる。

小正月は二十日で終る。

觀音祭り (十七日)

高常寺の境内の觀音様は正月十五日、神戸の觀音様は十七日に祭る。

この二つの觀音様は姉妹で、日光の立木觀音のうら木で刻んだものとい
う。一本の木から、立木・草木・神戸の觀音の順に刻んだものとい
う。馬を引いていった。(下草木)

觀音様(清水寺)神戸の觀音様のさかる日、馬で商売する人は馬に着
物をさせ、船をつけて着飾つていくくる。(萩平・暮坪)
むこいじめ

神戸では正月十七日の觀音祭りには、むこがはだかになつて水をぶつ

かけられ、繩のたわしで火の出るほどこすられた。(下草木)

正月十七日は清水寺の觀音様の祭りだが、新しく結婚した婿は、十六
日の晩、はだかになつて、ミタランで水を浴びて、石段を登つてお詣り
をした。参詣者がいる間はそれを続けねばならなかつた。また憎まれて
いる婿は、杉葉で背中をこすれたりした。今はしなくなつた。(神戸)
旧正月十七日が觀音様のお祭りである。神戸に来た婿は十六日の晩か
ら十七日の朝にかけて、觀音様の石段の下に石船の水(手洗)が湧いて
いるのを浴びて、裸のまま、長い石段を上つて觀音様へお詣りしなけれ
ばならない。村の者がこれは強制した。杉の葉などで背中をこすつたり
して寒くしたりした。(神戸)

えびす講・二十日祭り (二十日)

正月にはえびす様がかせぎに出かけ、十月にはかせいで金をしょつ
来るという。正月には朝祭り、十月には夜祭る。十月には赤飯にサンマを
必ずつけて、お膳立てして供える。お金も供える。(下草木)

エビス講にはお供え餅、マユ玉、大根、人参などの入ったお雑煮をた
べる。(関守) 大神宮様と年神様のマユ玉をさげ、それを雜煮にして食
べる。(大烟)

当番の家が宿になり、各戸から米八合ずつ持ち寄せて、酒一升と決め
て酒代金を集め、共同飲食をする。八台ますに斗かきまでついてでき
てある。よそから来た人も参加するが、家が小さいので宿の番にはなら
ない。(白浜)

えびす講はえびすさまのはたらきに出る日。(春場見)

「えびす講」「二十日祭り」などいって組が集まり里芋など食べ契約
をしたので「いも祭り」などともいった。(暮坪) 東浜では「二十日祭り」
は夜酒一升買つて一年中のことをきめた。このとき豆腐を一軒一丁買つ
て集つて村役などをいためた。宿は順番、宿をすると「宿・みそ・木損」な
どいつたがこのほかに芋など煮て出した。個人の家では正月は朝恵比須
と称し、十一月をヨイ恵比須という。恵比須様が正月に働きに出かけて

十一月に帰ってくるというので正月は朝飯をあげ、十一月は夕飯をお供

えした。(萩平・暮坪)

正月二十日には組ごとに二十日祭りを行う。米五合ずつ持ち寄せて、ヤドに集って食べる。五合の米を一べんに煮て、膳に盛って出すので、とても食べきれるものではない。そらを散歩して来たりして食べる。おかげにはせいぜい塩引きぐらいいなものだった。

昔は一升飯を食べた者もあった。(神戸)

山の神にオシトギを供える。オシトギはうるち米を水にひたしてすり鉢ですって粉にしたもので、握って笹の葉に包んで上げる。一本の笹に二枚の葉をつけたものに二つずつくるみ、二つは上げてくる。オシトギを作る時、とうふも細かく切って、いっしょに笹の葉に包んでしまる。

一本に七つとか、十一とかつける。山の神はこれらのものを好む。八沢では、七日にする。(白浜)

十二祭りを村全体でやるけれども、やる単位はツボ(組)単位だ。谷頭は小池といっしょにやった。まつり番が決っていた。毎戸一人ずつ出ることになっていて、この者が、部落高手で「オマツリだぞう!」とがなる。めいめいの家から、ソラヌキ(米や金の出し合い)を持って集まつて飲食した。谷頭、小池では戦争中終ってしまったが、下神戸では今でもやっているという。(上神戸)

正月の二十日にツボ(原、小池、谷頭)で米五合ずつ持寄って、それを吹き五金全部お膳に盛ってしまう。おかげは塩引一切位。

これは山の神の祭りである。(神戸)

お精進(二十四日)

一家の主人が、米、三、四合を持ち寄り、年神様のお棚板だけで饮いて食べる。食べる前(朝)近くの川や井戸で水あびをする。炊いた飯は一べんに食べてしまう。どうしても食べ切らなければならない。食いつけてから愛宕神社(火伏せの神)に参詣する。煮炊きした火は川に流す。料理に生臭は絶対用いない。(関守・大畠)

毘沙門祭

以前は各家々に鉄砲があったので、その頃はこの日は山に鹿をうちについた。鹿がいなくなつたので兎になり森林組合が援助した(火薬を買つて分けてくれた)毘沙門様は狩猟の神であるという。(萩平・暮坪)

大日様(二十八日)

二十七日に大日様(近くの石宮に祭祀されている。昔は御堂があつた)のヨイマチ(宵祭)。若い衆が主体で、徹夜で騒いた。(大畠)

二十八日は大日様の本祭、和尚さんがきておがむ。(大畠)

大日様は牛を飼っている人たちだけが、回り番で寄つて祭る。(下草木)

本

二月 節 分

次郎の一日(一日)

二月一日のこととて「次郎の一日黄金で祝う」という。(小中東沢)

年とり・豆まき

年とり(節分)の晩は塩引きの頭でシミツカリを作つたべる。

ヤフカガシと云つてイワシの頭を二つ、大豆の茎にさしてあぶる。「青虫の口をやきます、天とう虫の口をやきます」など唱えて睡をかける。

豆まきの時このヤフカガシを持つて歩く。

豆まきの順序は明きの方からまきはじめ、神棚、年神様。戸外で稲荷様、カワバタ、便所などにまく。(座間)

餌をたべる。御飯はふんだんと変わらない。

マユ玉をつくり、それを樹一杯にし、オシラ様(蚕の神)にあげる。

年男が「福は内」「鬼は外」ととなる。

年だれ豆をくう。(閑守)
自在鉤に紙につゝんでさげておき、雷が鳴るとき出して食べる。(閑守)

年神様は節分まで飾っておく。

豆がらで豆をいる。いりながら、いわしの頭につばきを吐きかけ「二の虫の口を焼く」などと呪文を唱えながら焼く。これをヤカガシといい、トボ一口の上にさしておく。豆は、太郎神社、櫻の稻荷、家の稻荷、神棚、その他土蔵などにまく。「福は内」「鬼は外」と唱える。(神戸)

豆がらを燃し、鰯の頭と尾を大豆の棒にさして焼く。「鰯の頭も信心から」で焼きながら「根切り葉切り虫の口を焼くなり」と唱えてツバをかけてやく。そのあとトボの上にさして盗難除けにする。
大豆は明きの方から恵比須様、大神宮様などの願にまき、「福は内、鬼は外」ととなる。豆の残りは自在カギにしばっておき初雷にたべる。

(小中東沢)

ヤカガシ

まめまきの豆をいる時に、つばをひっかけながらイワシの頭をやく。このヤカガシを作る時は三回焼きながら唱え言をいう。「マムシの口を焼き申す」「油虫の口を焼き申す」「葉つばや大根の虫の口を焼き申す」「四十二口の口を焼き申す」。(宮沢)
節分の晩に、年取り魚のサンマの頭を大豆のからや木の枝にさし、いりで焼いてつばをひっかける。この時「きれいなもの」の口を焼きます』へびの口を焼きます』などと唱えた。それをヤカガシ、ヤケグシといい入り口にさしておく。最近までやっていた。(下草木)

コト八日(八日)

一月八日はめいめいの家で、カイドヘ大きなタサカゴ、キノハカゴの

口を下にして地面にしておく。魔除けだという。

この日赤飯をす。仕事は早い。(神戸)。

オコト始メで二月八日に草刈かごをカイドに出した。厄病神を追いかえすという。(小中東沢)

針供養

二月八日は針仕事を休む。豆腐に欠けた針をさして川へ流したりした。

(小中東沢)

初午

オシラマチ

初午の前の晩をオシラマチといい、いものレンガク(田楽)となんこを作る。オシラマチは蚕の神様で、だんごを一升ますに山盛りに盛つて供える。オシラマチの掛軸のある家もある。(下草木) 初午の前の晩、夜中の十二時になるのを待つて、台所でカラ白を三回つく。この音を聞いてオシラマチが下つてくるという。(栗生野)

マユ玉を一升ますに山をかけて盛り上げ、四つ角にクワの枝を立てて、オシラマチの掛軸を飾つた前に供える。夜食にレンガクを食べる。夜ウシの刻にカラ白を三回つく。この音でオシラマチが下つたという。(栗生野)

オシラマチは蚕の神様、初午の前の晩にオシラマチをする。いものでんがく、とうふのでんがくをつくつてたべた。この晩よびてあそんだようだ。オシラマチの晩から初午にかけて、男の人がばくちをしたというはなしをきいている。(春場見)

オシラマチは二月の初午の日におまつりをする。オシラマチは蚕神としまつつていて。

三つ枝の桑の木をとってきて、それにマユ玉をさして、神棚へそなえる。蚕があたるようだと。

この日シミズカリ(ニガラミ)をする。これは、大根にさかなに大豆

をいたにしたもの。（押手）

オシラマチといつて、夜とうふやさといものでんがくをつくつてオシラ様にそなえる。

この日はまた、いなりさまに、ニガラミとだんごをわらのツトコの中にいれてそなえる。（押手）

屋敷稻荷

屋敷稻荷に旗を立てたり、アズキ飯が好きなので供える。ますにだんごを盛つて、名指して蚕神様（神棚）に上げた。また、いも串やレンガクをこざえて上げた。屋敷稻荷は屋敷の守り神で、先祖とは関係ない。（宮沢）

高草木弥平氏（草分け）の家の正一位稻荷を祭つて、集まつた人にレンガクを夜ッビテ（一晩中）くれた。（宮沢）

初午

稻荷様に赤飯を供えたり、色紙で旗を作つてあげる。魚があれば供える。初午には「火を燃さない」とか、「ふろをたてない」などといった。また「仕事をすると火にたたる」「烟にはいるものではない」などといわれる。（下草木）

だんごを作つてオシラ様に上げる。また、レンガク（里イモ）やとうふも供える。オシラ



左一屋敷稻荷、右一山の神と天神を合祀。（寒沢）

（撮影 関口正巳）

稻荷様に「正一位稻荷大明神」と書いたのぼりをたてる。「この日に仕事をすれば、火に立つ（火難にあう）」といわれる。（大煙）

火のたたりがあると言つて、朝は茶を呑まない。夜は風呂に入らない。

夜はオシラマチと称する。里芋を四～五こ串にさして、桑の木を燃してそれを焼き、それを膳にのせて、神棚の下に供え、また食べる。豆腐を四つ切りにしたものと同様にして神に供える。その晩のうちに

奉納 稲荷大明神
昭和 年二月 ○○氏

と、五色の旗に書いて稻荷様に立てる。

この日赤飯をする。一日中休む。（神戸）

初午の日には、朝の十時前にお茶を飲んではいけないとしている。その理由はわからない。（押手）

丙午の時は二の午をまつる。「午の日が早くくると火早いから気をつけろ」という。夕飯は小豆飯、マユ玉をつくりオシラ様にあげる。オシラ様は女神で、繼母にいじめられた。（小中東沢）

天神 祭（二十五日）

一月二十五日天神様が流された日。「旧の二十五日はやみ夜のわけだがこの晩はうす明るく見える」などといった。（小中東沢）

ひな市（二十六日）

花輪にひな市がたつて、おひな様の外、種々の商人がやってきて近在の人たちで賑う。（花輪、大煙）

様はコカガ様ともいい、蚕の神様。沢入の黒坂石に祀る。（栗生野）

種荷様に五色の旗をあげる。それに「奉納正一位稻荷大明神」と書く。芋レンガク（田楽）——里芋をやきみそをついたものを食べる。

（関守）

節供（三日）

一日か二日に餅をつく。草餅は必ずついた。その他栗餅、モロコ

シ餅をつく。米餅(白)・草餅(緑)・栗餅(黄)・モロコシ餅(赤)で

菓饼をつくる。(大烟)

おひな様に菓饼を供える。汁粉をつくるものが多かった。(閑守・大烟)

三月三十日から四月一日にかけて餅をついた。一夜餅はいけないといふ。この節供の餅をヨモギモチなどともいつた。栗モチ、キビモチなどもつき、七五三に菱形に切つてあげた。嫁が節供の餅を里へ土産に持参することもむかしはした。

節供には親元は大きな雛を贈り、悪意の人や親戚にも雛を贈った。しかし返しは特にはしなかつた。

八日節供で雛をしまう。「七日帰りは悪い」と称し、三月二十八日頃傳つて八日目にしまつのがよい。一日の人は八日にしてしまう。(西沢)

四月二日は草餅、重ねひし餅をつくる。初節供の家では餅を近隣・親戚に配る。それらの家からは、すでに雛人形等が届けられている。内裏雛は嫁の生家から。嫁は客に行く。(神戸)

初孫の場合に、ひな人形や御殿を親元から贈る。お返しは桜餅。(白浜)

四 月

卯月八日(八日)

四月八日には藤の花やウカの花を、お神や屋敷福荷やトボヘ上げるものだった。(宮沢)今は五月八日に、フジの花をこの辺の山から取つて飾る。(栗生野)

菓餅様のお祭りで、草餅をついて上げる。藤の花やウカの花を取つてきて、トボッ先にさしたり、神棚や仏間に上げた。(白浜)
子供達は寺に行き、仏像に甘茶をかける。寺から甘茶をもらつてくる

る。(大烟)

赤城登山

お駕遊様の日で、寺で甘茶をもらって来て呑んだ。
それとは別に、四月か五月の八日には、この一年間に死者のあった家では、家族の者が赤城山に登る。地蔵岳の頂上の手前のサイノカワラから石を持って行つて、石を重ねてくる。昔は山から藤の花や葉を取つて來て仏様に供えた。神様には上げない。うどんを供え、また米の御飯を炊く。(神戸)

人が死ぬと翌年の四月八日にその家族は赤城山へ上る。どうしても上らねばならぬと言つて今でも上つている。(座間)

(押手)

新仏のでた家では、旧四月八日に家族のものが赤城山へ行つたといふ。

右同様である。四月八日まではよもぎのことをモチグサと言うが、以後ヨモギと区別している家もある。(座間)

フジの花を神廟にあげる。

前年に人の死んだ家は赤城へ登る。赤城は地蔵へのぼり、子供の死んだ家などは賽の河原で石を積んでくる。しかし「十六の娘は赤城へのぼるな」という。今は五月八日。

子供は寺でアマ茶をかけいく。(松島)

(信仰の項参照)

旧の四月八日の日に藤の花を軒端にさす。この日からモチグサの事を

モギとよぶようになる。
この日女の子に(男から)ショウブ酒をやる。それは酒の瓶にショウブを一本さしてやる。

昔の話に女の子がいくらか大きくなつて、野原で小便していたら蛇がちよいと出てねらう。女の子は動けなくなつてしまふ。ショウブ酒をのんだ子は蛇にねらわれないと云う。(座間)

金比羅祭(十日)

村中全員神社（小さな石宮で、同様の八坂神社と並んで、村はずれの小丘の上に祀られている）に集まり、席を敷いた上で飲食をする。当番が二軒きめられていて、赤飯や料理をつくる。米や費用は、祭の前に各戸から集めてある。（関守）

下旬に各戸大掃除をする（関守）。

天狗祭り（十五日）

旧三月と八月十五日が天狗神社の祭りだった。今は四月十五日だけ祭る。前日に道の手入れをして行灯をつくる。翌日、代表がお参りし、宿で御飯を食べる。天狗神社はツボの鎮守様である。（白浜）

花見（二十日）

女衆が農工大学の寄宿舎に集まって花見をする。愛林組合から助成金が出る。植林の時に苗木を山に運ぶのを手伝うから。（栗生野）

五 月

八十八夜

農作祈願のため、神戸全体で費用を出し合って御神酒をいただき、子どもたちには菓子をくれた。赤飯。太郎神社のお札を各戸に配る。お札は神棚へはる。（神戸）

八十八夜には食べものをすこし変りものをつくる程度でたいした行事もない。

平野部落では「八十八夜の分霧」などというが「九十九夜の分霧」といっている。

「ソバを播くのも八十八夜から九十九夜までがよい」という。（松島）

節供（五日）

ヨモギとショウブを交ぜて軒場に下げる。屋根に葺く。ショウブ湯に入る。難を除けることができると言わせられている。（神戸）

六 月

大わらじ

六月八日ごろ、大きなわらじを村の四方の出入口に下げる。四五年前やめたら伝染病がはやったため再びつくって下げる。小麦わらで。（神戸）



コイノボリのさお立て台—みかげ
石の産地ならではのりっぱさ。
(上草木) (撮影 関口正巳)

餅は一日から三日までの間につく。

ヨモギ、ショウブ、カヤを軒にさす。物置、便所、水場、稻荷などで入口にさす。厄除けのまじないという。また男は頭にショウブでハチマキをし、女はショウブをはぎつて髪にさした。四日の晩はショウブ湯をたて、これになると中風にならないといった。五日はショウブ酒

五月の節供のショウブ酒は女の子には呑ませるものだ。（座間）男の初孫には、親元から吹き流しを送る。さおや台石まで贈る家もある。ここ十四・十五年に流行したが、もとはのぼりだった。お返しは柏餅。（白浜）

神戸より座間への入口のわらじ
(撮影 都丸九十九)



七月

八月は盆月だから、祝いことははずす。(葉沢)

カマツタモチ(一日)

八月一日には、餅もついたが、ふかしまんじゅうがふつうであった。

「地獄の餓鬼も許される日」。(神戸)

昔は六月十五日(旧暦)、今は七月十五日から二十五日まで。八坂神社のみ靈を仮小倉に移し十日間はお祭りに行く。二十五日には、祭り世話番が天王様を出して部落内を回した。県道を神社から部落外まで行き所で休んで回した。その晩は

八月一日は金の口あき、各本一パイで道路普請をした。個人は墓掃除

(ふさいでおく)のだという。(押手)

「カマノロアケ」で、赤城山から仏様が出て来て、お盆様にくるといふ。(下草木)ヤキ餅を作つて食べた。かまのふたの意味か。かまのふたをあけて、盆様が寺へ来ているので、寺へ盆迎えに行くようになる。(白浜)

八月一日は金の口あき、各本一パイで道路普請をした。個人は墓掃除をした。(松島)

七夕(七日)

八月七日。六日にタナバタの飾りをつくり、お膳を机にすえて供えた。また手を通さない着物をこの飾りにかけた。これは「七夕様に着物をかすと着物がたくさんもてるようになる」といった。若い男女の着物をかける家が多い。子供などは新らしい着物ができると七夕様にあげてから着るなどとい、この日まで着ない子が多くた。

短冊に書くのは川の名、天の川などのほかに歌もよく書いた。芋の葉の露で書く。

「天の川過ぎわたしにあらねども

くもいにまごうおきつ白波」

「七日は三稲でも雨が降らないと厄病神がはびこる」といい、作物も不作になるともいつた。

朝早く起きて人にみられないうちに川で髪を洗うと髪の毛がよくなるなどともいつた。

ネブタ流し、自分の願いをこめて朝早く川へ流す。

八月



七夕の竹（三ヶ郷）
(撮影 池田秀夫)

七日早朝、なるべく早く新たにネブタの枝をもって川に行く。このとき女、子供は「ネブタは流れろ、豆の葉はとまれ」と唱える。然しだ豆の葉は持て行かない。

また七夕の色紙のつるした竹は煙にさす。これは煙に虫がつかないことを祈念してのものである。（三ヶ郷）

ネブタ流しは旧七月十一日。（花輪）

七夕の竹は煙に立てる。虫がつかないという。（松島）
七夕の飾りをする。必ずその年に生えた竹を使う。七夕の早朝、女性は渡良瀬川に髪洗いに行く。汚れがきれいにとれるといわれている。

子供達はネブタ流し（ネブタの木を折って渡良瀬川に流す）をする。

その時の称え言、「ネブタ流れる、豆の葉は止マレ。」

早朝、ネムツタ（ねむ）の葉を川に流した。川で水をあびて来る。

朝、竹に色紙の短冊に切ったものをつけて上げ、夕方これを大根畠に立ててくる。（神戸・座間）

旧七月七日の早朝川に髪洗いに行く。頭髪の油はこの日ならばどんな水でも落ちないことはないといわれる。

この日前後には墓掃除をする。お盆の準備である。

七夕の竹は煙に立てる。

この日午後には墓掃除をする。お盆の準備である。



七夕の竹一畑の害虫除けにする
(上草木)
(撮影 関口正巳)

七夕には
雨が多少で
も降るもの
と思つて
いた。雨が降
らないと、
天の川の水
がふえない
ので飲料水

に困るという。また、雨が降つて天の川の水がふえて二つの星が会えないと、

盆（十三、四、五、六日）

八月十日か十一日に盆花迎えに行く、十一日は墓掃除で、新竹を伐つ

物（ゆかた）なども上げた。お膳を作つてこちそを供えた。子供は豆の葉とネブタの葉を取つて、朝早く川に行き「ネブタ流れる、豆の葉止まれ」と唱えた。こうすると朝早く目がさめるようになるといわれた。昔は女の人が髪を洗つたという。（下草木）

新コの竹を伐つて、色紙に字を書いたのやおり鶴などを用する。字は「天の川、たなばた、和歌」などを書く。七夕飾りはやく柱にしばりつけ赤飯、うどんなどを供える。

七夕飾りは次ぐ日に菜大根の煙へ納める。汚れが来ないように。七夕は空の神だから、雨が三粒ぐらいでも降つた方がよい。生え葉が出ためにはおしめりが欲しい。（寒沢）

七夕の竹は、七夕がすんでから大根はたけへ立てる。そうすると、大根が病氣しないでとれるという。（春場見）

七夕の竹飾りはあとで菜大根の煙に立てておくと、虫のたかるのが少ない。（栗生野）

て竹の花立て十三日に花をかざる。十一日はそのあと市へ盆用品を買ひにいった。(小中東沢)

十一日に荻原に市が立つ。主に盆用品をうる外、大間々などから機屋が生絲を買ひにきたりして賑う。(荻原・大畠)

盆前の十一日に必ず墓場の掃除をして、道もきれいにしてくる。(栗生野) (落居)

十一日にチガヤ取りをする。(座間)

墓掃除は釜の口あき(八月一日)後ならいつでもいい。大体九日頃する。

盆花は十一日にとる。花の種類はヒイボ(白イオトコベシ)アワバナ(キイロ・オミナエシ)キヨウ(ムラサキ)カルカヤ(赤イ坊主)オ

ゼンバナ(赤イ花)節黒仙翁)スイセン(黒水仙)チガヤトリは十一日にとり、盆様の籠になつてかける。

盆迎えは寺と墓と両方へ迎えにゆく。(座間)

この辺りに咲く黄色のオミナエシである。(落居)

寺へ金を包んで持つていく。ちょうどさんは持つて行かない。寺から五如来を迎えてくる。迎え火は別に燃さない。(下草木)

カド火をたく家はわずかで、かたい家だけ。寺へは子供が迎えに行く。新盆でも子供がいく。

盆棚は組立式で西沢と同じ。この日にナスの馬をつくり、お茶を茶の葉に包んでチガヤでつる。(小中東沢)

八月十四日の朝、盆迎えに行く時は、先ず縁側にローソクを立て線香に火を付ける。これはそのまま縁側の前の庭におき、一部の線香は約十

間ごとにおいて墓に行く。仏さまはこの煙に乗つてくるという。墓にお詫りして仏さまを連れてくる。連れて来ると盆棚に線香を上げてからローソクを消す。(落居)

十三日にお寺へひきよらいをもらいに行つてくる。

十四日の朝、墓地へ提灯をもつてむかえにいく。これはくらくて足もとがみえないためという。墓では、おかりをあげておいて、それから提灯に火をつけて家へ先祖様を案内してくる。その火を消さないで、たなへうつした。その火で線香をあげる。また、先祖への道しるべとして、むかえてくる途中に、むぎわらでも、ひでもつかつてそれに火をつけておいてくる。仏さまが家へかえつてくるのにまちがえないよう

との意味。盆のときのそなえものとしては、そのときにつくつたもののほかに、ぼたもちをあげるのが一般的である。(押手)

先祖の足洗い場

十四日の朝盆むかえのときは、朝くらいうちにおきて先祖をむかえてきて、一番先に水場に案内する。ここで先祖さまが足を洗うという。むかしはこのときたいまつをいたが、今はローソクをつける。水場には水神様がまつてあって、お盆のときには、ここに花立てをつくって、野花をあげておく。(押手)

十三日に寺へ盆迎えにいく。カド火などはたかない。しかし、お墓の清掃はこの日にし、家から新竹の筒を一本持参し、それに盆花をさして飾つてくる。

盆花は十三日前に近くの山から採つてくる。(東沢・足腰・柏ヶ谷)

盆 棚

表座敷に盆棚(位牌を祀る棚(上)と、供物をあげる棚(下)とある)を作り、仮壇から位牌を全部出して棚にのせる。棚の前に机を置き、燈明や線香をのせる。

供物としてはその日の食事(ホタ餅やウドンなど)と野菜などである。

(閑守・大畠)

盆棚は新竹で、三フジに枝がついているもの四本使用し、それを手が

ヤの繩で三度回してとめる。チガヤの繩は左繩になわなければならない。

(大烟)

十三日に盆棚を飾る。棚は大工の作ったものなどを使い、新しい竹四本を四隅に立てる。前に太い竹を三段に刻んで花がさせるようにして立てる。チガヤの繩をなって四つの柱に回し、寺から盆迎えの時に迎えて来た五如来という五つの仏様の名を書いた色紙を吊す。

盆花は山へギョウ・オミナエシ・カルカヤボウズなどを取りに行つたが、今は家に咲いている花を何でも上げる。(草木)

竹を四本、四方の柱としてたてる。ぼん花は近くの花を適当にとつて

くるが、とくにさいの河原付近(標高約千米)には黄色いオミナエシの花があり、これを主としてぼん花としてあげている。

大人の位牌は上のたなにのせるが、子供のものは、ぼんだなの下にそなえものをする。子供は高いところへはあがれないといふ意味である。

(落居)

盆だなは新竹四本で柱をつくり、チガヤでつくったなわでとめ、また、

たなのまわりにそのなわをまわす。秋の草花をかざり、たなの前のなわには、うどんのゆでないものをショイナワとしてかけておく。これを盆おくりのとき、おほんさまがごちそうとかおみやげをもつていくときにつかうものといっている。盆だなは十三日にたてる。(押手)

盆棚はシンヨ(新竹)を用い、チガヤの繩でシメを張る。シメ繩のな

い方は、正月のは右ナワで盆棚のは左ナワである。(大烟)

盆棚は十三日につくり、十六日に送り盆で青竹をとり、盆がらの十八日頃まで棚はのこしておく。

大人の位牌は上の棚に飾るが、子供の位牌は盆棚に向つて左側の下に板で細い棚ができるところがありそこに飾る。(足腰)

もとは、部落の女衆が集まって念仏をした。十五日念仏という。新盆

参りに親戚や近所の人が來

た。この時には特別のあいさつをした。「結構なお盆

さつをした」といふ

とおめでとうございます」と言う。これは新盆様

にとつては、それは家に対し

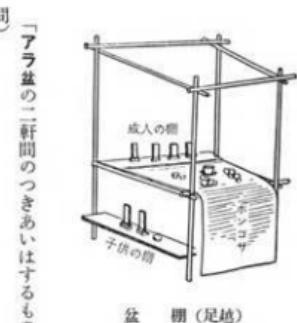
て待ちに待つお盆様がき

たものだからとのこと。(下

たものだからとのこと。(下

たものだからとのこと。(下

たものだからとのこと。(下



問

「アラ盆の一軒間のつきあいはするものでない」と言つて避ける。(座

沢)

大工に頼んで盆棚の形式を作り位はいをのせる。新盆の時でないと盆

棚を作るものでない。十三日に盆迎えするが、十六日までの間に新盆見

舞に親戚やツボの人が来てくれる。その時節のものを作つて出す。(寒

沢)

ここでは新盆のたなを別につくることはしない。ふつうの棚のまん中

辺に区かくをする程度である。(宿)

寺への迎えは子供、新盆参りは葬式にきた人がくる。むかしはウドン

と銀杏をもつてきた。「あまりもらってウドンが食べきれない」などと

いった。(小中東沢)

無縫 仏

墓場のない、本家が亡んで新宅のみになった家などの場合一箇所に集

める。これは昭和初年に行つた。こうした無縫仏にはお盆がなく、迎え

だとき同家の墓地に葬つた。明治初年のことで、独身のままだったの

(萩原)

人にならないで死んだ仏さまは、実際にはともかく、気持の上では大事にされない傾向がある。盆などの場合にも、一人前の仏さまとしてあつたつてもられないようだ。(宿)

盆棚の上にはガキ仏(子どもの死者)をまつ。無縫様の墓まいりを盆中にする。(座間)

無縫仏はお盆のとき盆棚の下に祀る。三、四代前の関係で誰がどういふ関係のものか判らぬ人の靈をいう。また独身のまま死去した者もムエボトケといふ。

子供は盆棚に上の権利がないという考え方がある。(三ヶ郷)
子供に達しないでなくなったものはガキボトケといって、他のほとけさまとはべつにそなえる。(押手)

盆は八月十三日～八月十六日。表の間に盆棚をつくりチガヤを切ってコデに縄をない、シメ縄にしてこれに生のウドン(馬のショイナワといふ)、色紙のカギバタをつるして盆棚を飾る。

お盆さんのお迎えは十三日、お寺の本堂のアカリをもらつてくる。迎え火はたかない。送り火もたかない。また祥禪寺では、昔、線香の火が団子に移りそれを鳥がくわえて屋根に飛び、それが原因で火事になったことがあったので、お盆には線香に火をつけない。墓前の線香も火をつけないままのものであった。

盆棚の下にはゴザの奥にショウウリョウサマを祀る。棚の上のはホトケサマといふ。

供物は水、緑茶、オハギ、農作物等でイモの葉にナスの馬を作つてあげる。そしてミソハギの花を五、六本束にして、枝の部分を紙にくるみ水に浸しては馬とイモの葉、供物にかけてやる。

ショウウリョウサマに供えたものは毎日下げないでためておき、十六日の午後盆棚を崩すときとつて用に流したり三本辻に捨てる。

仏壇の仏様はこのお盆の期間中はオルスイサマという。お盆様に供え

たものと同様のものを供え、お盆様と同様に毎日おろして家族でたべる。

盆花は昔は山にとりに行つた。黄色の花(アワバナ)、キヨウ、アバナに似た白い花などである。

新盆はアラボトケというが、死んで四十九日にならぬのは新盆ならない。

未婚のまま死んだ人は盆棚の下にゴザを敷いて、盆棚の上の供物と同じ供物をあげる。(花輪)



盆棚の材料を三本辻に捨てる
(花輪)

(撮影 池田秀夫)



お盆さんを送つて盆棚の材料を
墓地に捨てる (花輪)

(撮影 池田秀夫)

盆のあいさつ

「結構な盆さまでござります。おせんこうをあげさせて下さい。」(宿)

盆の食事

十四、十五日は朝、ボタ餅、昼ウドン、夜、御飯にトウナスの煮たものをお食べる。生魚は食べない。(大畑)

盆送り(十六日)

三本辻みたいな所へ盆様に使つたものや供え物を持って行つて、三・四軒集まって燃やす。いいかげん燃えて柱に使つた青竹がはねると、「仏様が行つた」というので、線香に火をつけて帰つて来る。それから墓場

（水と線香をつけて送って行く。）

（宮沢）

（水と線香をつけて送って行く。）



盆棚一盆おくりの後（座間）
(撮影 今井善一郎)

香、花、そなえものである。（落居）

盆おくりは十六日の一時か二時ごろ、新盆の場合には夕方、盆だなの

おかりに竹の音を聞き、それを家の墓地へおこうしていく。お

かりしたものは、まとめて三本辻でやく。盆おくりのときは、キュー

ウリ、ナスでうまをつくり、お茶を桑の葉でつぶんでもちがやでしばって、

ふりわけにして、三つずつ馬にのせて三本辻までおくった。これはお盆

さまへのおみやげという。

三本辻では竹とむぎわらを燃す。そのとき竹がわれて音を出しが、そ

の竹のはねる音をきいて、それを合図にお盆さまはかえって行くといふ。

（押手）

十六日の午後に家の近くの三本辻にナスの馬や盆棚に結いたけた青竹

を小麦藁といっしょに燃す。竹がトカンとはねると仮は天にのぼって帰

つたのだという。（足腰）

盆おくりは、おくり火をたが三

本辻でたくところも、お墓迄いって

たくところもある。一軒だけで送る

のも二軒一緒にする処もある。燃え

て「竹の音が三回したら帰るものだ」

という。

三本辻などの送り火した処に、お

盆様へ上げた供え物のナスやうどん

などおいてくる。

新盆同志の家は盆づき合いをしな

いことになつてゐる。（座間）

十五日に生ウドンを盆棚のチガヤの籠にかける。これを背負籠とよん

でいる。仏様が帰るときにお土産を背負つていくためといふ。十六日の午後に盆棚の竹とナスの馬などをもつて三本辻へ行き麥藁といっしょに

もす。竹がはねるとお帰りになつたといふ。次に墓送りで線香、ダンゴ



盆送り送り火をたいたい所（下草木）
(撮影 関口正巳)

を持つて墓詣りをする。先祖から願に

まい。(小中東沢)

盆棚の竹や籠、供えてあった盆花や

ごちそう、キュウリやナスの馬、お水

などをもって三本辻などの道の分かれ

めのような所に送りに行く。三、四軒

八木節が流行し、戦後、新民謡踊りが流行している。(松島)

盆踊りは八木節を盛んにやつた。青年団の数が減ったので去年は休んでいたが、今年はにぎやかにした。今まで見物客のハナ代でやっていた

が、今年は寄附を集めていた。小中・神戸・沢入からも来ていた。(上草木)

盆棚は十八日の盆がらにこわす。おそい人は二十日頃までおく。昔は

十八日から二十日までは盆がらで休日とされ、区長から農休みの掲示があつた。(小中東沢)

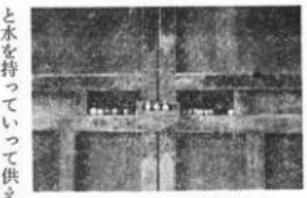
八月十八、十九日、二十日は農休みであった。が最近は勝手になつた。(神戸)

盆がら

盆棚は十八日の盆がらにこわす。おそい人は二十日頃までおく。昔は

十八日から二十日までは盆がらで休日とされ、区長から農休みの掲示があつた。(小中東沢)

八月十八、十九日、二十日は農休みであった。が最近は勝手になつた。(神戸)



盆の団子 神戸の銀音様にて
(撮影 今井善一郎)

と水を持っていて供えてくる。(下草木)



盆入りのダンゴと盆花(栗生野)
(撮影 関口正巳)



おくり盆の馬(名越)
(撮影 井田安雄)

戸

九月

ハッサク(八朔)

旧八月一日。赤飯にうどん。娘も特に生家に帰らず、贈答はない。(神戸)

ハッサクは八坂神社の祭り。家では別に贈答などしない。(寒沢)
赤飯を食べて、仕事を休む。(大畑)

三夜様(二十三日)

八月二十三日は三夜様で、宿で小豆がゆを食べた。小中川で、夜、水を浴び月を拝んだ。(小中東沢)

お精進(二十四日)

八月二十四日で、前日の夜の水浴びからつづいている。自分の手鍋を下げて宿の家で一人一升の米を食べ、愛宕様をおがんだ。この日は大食いほどよく「鍋や釜を洗つた水までのまない」といわれた。この晩は部落の相談をする晩でもあった。(小中東沢)

ハツサクの節供は、特にない。（松島）

二百十日

春祭りと同様、世話番が毎戸から金を集めて、神社の境内に集まつてオミキをの込み、子どもには菓子。境内でドンチャン騒ぎをする。厄日の難除けとして神社からお札を出す。（神戸）

オクンチ（九日）

もとは武尊神社の祭りで、すもうがあつたり、八木節おどりや映画会をした。（上草木）

太郎神社の祭り（ナカダンチ）（九月十九日）

赤飯、うどんを作り、家ごとの祭り。（神戸）

九日、オクンチ。八幡様に赤飯をあげる。（大畠）

近くの親類でよびっこする。（閑守）

十四日 氏神、八幡様の宵祭。（大畠）

十五日 八幡様の本祭。赤飯をもつて八幡様に行き、集まつている子供達にやる。（大畠）

十五夜

旧暦八月十五日。十五本のススキ、大根一本、さつまいもを供える。食習 オマル（だんご）を作つて供え、ふかしまんじゅうを供える。（神戸）

団子や農作物を供える。子供たちがさげにくる。黙つて持つて行かせる。（大畠）

すしをあげる。子供たちがさげにくる（閑守）。

十五夜には赤飯・餅・まんじゅう・うどん・ソバ・五目飯などを作る。おまるだんごはあまり作らない。縁側に机を出し、ススキを飾り、

ミの中にお膳を作つて供えた。供えた物は、せつかく上げたのに下げてもらえないといつて起が悪いといつたりして、もとは子供が下げて回った。前には村祭りの晩が十五夜だった。（下草木）

おでまるを一升瓶に入れてお供えし、「下げるもらうと蓋があたる」という。子供達は「あがったかい」と声をかけて下げるあるく。

「十五夜に暑いあれども十三夜には暑いなし」などともいつた。（松島）

十五夜にはミニ大根二本を添えて箸とし、団子と秋の収穫物を供えた。「子どもは月さまだ」といわれ供え物を「さげさせておくれ」といって昔は巡回した。子どもが供え物をさげて歩いた方がよいといわれる。盗むようにそっと持つていても悪いこととされなかつた。（西）

彼岸の入り口には提燈で墓まで御先祖さまを迎えて行き、走り口にはやり提燈で送る。この日ボタモチをつくる。（神戸）

昔は、ぼたもちを親戚とやりとりしたが、今はしない。（下草木）

墓掃除を彼岸の入りまでにする。墓地はイチマケ毎にあり、先祖祭りなどはしなかつた。

「くされ彼岸が七日ある」

「暑い寒いも彼岸まで」

「彼岸に松島山に猫のひたいぐらいの雪がある年は豊年だ」。（松島）

豊獅神社祭（二十六日）

大沢にあり、今は九月二十六日。むかしは九月十九日が祭日で、子供に菓子をくれたり、剣道大会、相撲大会などの催しもあつた。世話人は巡り番で、ツラヌキ（毎戸平均で出しあうこと）で資金をあつめた。（松島）

十月

神無月

十月は神様が出雲大社へ行くという。しかし、神送りや神迎えの行事はない。（寒沢）

十三夜（旧九月十三日）

十三夜には大根二本を必ず供える。十五夜の時のように、出したお膳の両わきに大根を葉つきのまま一本上げる。これを「お月様のハシ」だという。十日夜には大根は使わない。（下草木）

十三夜。十五夜と同じ。（大烟）

二十三夜 月が上がるまで起きていて、汁粉などを食べた。（二十三夜は、農繁期と養蚕期をのぞいた各月に行われた。）（大烟）

十一月

十日夜（旧十月十日）

九日に餅をつく。「九日餅、十日団子、タ飯食つて腹太鼓」と昔からいう。（大烟）

十日がトウカニヤ。子供達は薬鉄砲（新薬の中に芋がらを入れて、繩や藤づるでまいたもの）で「トウカニヤ、薬鉄砲、モグラモチハ、オ留守カナ」と声をはりあげて、地面をたたく。（閑守・大烟）

薬のツトッコ（新薬一つを二つに折り、先の方をゆわえ、その中に、団子二つ、餅二切れ入れたもの）を神仏に供える。（閑守）

ツトッコダンゴ

十日夜にはツトッコダンゴを作つて墓場へ供える。十月は神無月で、神様が出雲の国へツトッコを持っていくといわれる。墓場は先祖様のいる所だからだんごを供える。ツトッコダンゴは稻荷様や十二様にも供える（宮沢）。

十日夜には地鎮様に怒られるから煙にはいってはいけない。ワラデッ



（草木の武尊神社）
撮影（関口正巳）

去年までツトッコダンゴを作つていた。

コダンゴを作つていた。ツトッコにマユ玉の小さいものを一粒が二粒入る。（米ヒエ）

それをお墓、稲荷、水場、便所、こやし場、山の

神、蚕室などに全部供える。（栗生野）米の粉のダンゴを作りソバがらのツトッコを作つて入れて、墓や山の神に供える。初午のダンゴは神様の上けるだけ。また、盆や彼岸のダンゴは小麦粉。（白浜）

十月十日は薬箇の中にダンゴや餅を切つて入れ地神様にあげた。（十日夜十日夜、大麦あたれ小麦あたれ、三角煙の麦あたれなどと云ふ。三角煙は悪い土地の意。このワラ筒打ちはモグラ退治などともいふ、「この音をさいて大根が年をとる」などという。「十日夜前は大根をとるな」ともいった。（松島）

ボウでたたいて地固めする。「九日餅に十日ダンゴ」といつて、だんごを

作つて、ソバがらでツトッコを作つて十個入れ、「十日夜様へ」と名指して、床の間へ上げる。ツトッコダンゴは一個ずつ入れて、神や仏、山の神、墓場などに供える。十日夜が来ると大根ができる。ワラデッポウ

の音を聞いて大根が年を取るといい、十日夜後、大根を掘る。（寒沢）「九日餅に九日ダンゴ」といつて、九日の夜餅をつく。十日には秋に取れた米なり、栗・ヒエでダンゴを作り、わらで作ったツトッコに入れて墓場に供えてきた。ツトッコダンゴは一つ一つの墓に供え、あとで子どもが下げてもらつたりした。墓地が煙の中にがあるので麦まきなどで踏み荒らすから、地鎮祭のように鎮めるためにダンゴを墓に供えるのだといふ。家では神棚に供える。（下草木）

十日夜は百姓のまつりで、地神様をまつる。旧暦の十月十日が十日夜だが、「ココノカモチニトオカダンゴ」といって、九日の昼か晩にもちを一うすつき、十日の朝（午前）ダンゴをつくった。「モチとダンゴは同じ日につくってはならない。縁起にさわる」という。葬式（おじやんばん）のときには、モチとダンゴをいちどにつくるので、モチとダンゴを同じ日につくってはいけないという。

モチは一うすついて、のす前に一かさねおそなえをつくり、のしてきりもちをつくる。

ダンゴは米の粉でつくった。糰のわらでツトツコをつくり、その中にきりもちを一きれと、ダンゴを十こずつ入れる。これを五十も六十もつくつた。ツトツコ二つとおそなえもらを大神官様へあげる。そのほか、仏様や神様のところは全部あげた。（墓場でも、稻荷様でも山の神でも全部）十日の昼すぎに子供でもだれでもあげにあつた。むかしは、ツトツコをカエルが背負つて神様（どこの神だか不分明）のところへもつて行つたものだといった。

この日は地神様のまつりだといふ。地神様ははたけ（土）の神様で、はたけの中に石碑がたつてある。この地神様を十日夜にまつっている。麦まきがおわるとモチをついて祝うのだが、それが間にあわないで、十日夜にモチをついて祝うのだといふ。



地神様（沢入春場見）
自然石がはたけの中に立
っている。

（撮影 井田安雄）

モチをつくる。
この日のごち
そうはとくにな
い、なにをつく
つてもわまわな
かった。

（春場見）

い。十日夜だから大根をとつてもいいという。

また、十日夜には、ワラデッボウをつくって、わかいしゆが庭をたててあるいた。これはむかしのことで、おぼえてこの音をきいたこともない。戦前までしてた。（下草木）

ワラデッボウにイモがらを入れる所もある。「十日夜十日夜、朝ソバきりに昼ダンゴ、夜めし食つて腹だいこ」と唱えながら地面を打つて地がためする。（寒沢）

「九日餅に十日ダゴ」（食習の項参照）といふ。団子に餅もませても

ろもろの神、墓場、十二様、畑（地神様）に供える。

子どもたちはワラブトを作り、これで土をたたきしめて歩く。その時十日夜、十日夜、十日夜のわら鉄砲

誰の鉄砲がよくなる

地がしまれ、地がしまれ。

などと唱える。

この日は土を動かしてはいけないといつて畑に入らない。（神戸）

一年じゅう一番いい日で、何に当たつても「シミズよし」といふ。曆見なくも良い日である。七五三祝いをする（宮沢）。

七五三（十五日）

七五三の祝いで、氏神様に参る。

男の子はハカラをはかせる。（ハカラ着といふ）。女の子はオビをしめる。（オビトキといふ）（大畠）。

七才の子供の帯トキ祝いで、子供に帯をしめさせ、新しい下駄かジヨウリをはかせウジ神様（武尊神社）にお参りさせる（宮沢）。

十日夜は大根のととりといふ。大根をとつてきて供えることはしな

川ビタリ(一日)

十二月一日を川ビタリといった。

小豆をたべないうらに川を渡ってはいけないといって、ぼた餅でも、小豆飯でもいいから小豆の入ったものをたべる。(座間)
川ビタリ餅をつく。十二月一日。ツジニクダングはない。(神戸)
「アズキを食うものだ」といわれ、餅をつく。川へは持っていくない。馬とも関係はない。(下草木)

十二 様(一日)

十二月一日(前は十一月十二日)に回り番の宿に、ひとりもち米一升、あづき一合ずつ持ち寄り、あんころ餅を作る。山の神に上げたり食べたりしてくる。(上草木)

コト八日(八日)

「しわす八日はコト八日」で、こやし場に籠の葉をきりつめて上げ、ごちそうを供えた。また、草かりかごをカドに立てたが、何も入れない。籠の葉は丸めてしまつて、こやし場にさし、ソバやうどんを掛けて供えたもので、名称は不明、コト八日は死んだ人に着せてやる「キヨウカタビラを織る日だ」といわれた。(下草木)

ダイマナク

竹のウラをとめて、餅をさしてこやし場に立てた。ダイマナクといつて、かごを庭に出しておくと、カゼの風がたまげて来ないからカゼがはやらないといった。また、ネギをいろいろにくべた。この匂いでカゼの神が来ないと。《宮沢》やく病が入らぬようにカドへ草刈りかごをおつかせた大目玉(ダイマナク)を出す。かごにはでかい目がたくさんあってにらみついているからやく病神がはいれない。また、コト八日様

といつて、籠の葉をまとめて肥やし場にさし、赤飯を供えた。(寒沢)
「ダイマナクを出せ」といって、木の葉籠をひっくり返してカイドにかぶして置く。籠のでかい目でにらめるので、目にたまげて悪いものが来ない。(悪い物とはオオカミ、イノシシなどをさす)この晩にネギをいろいろで焼く。(栗生野)

コト八日、またダイマナコとも言い、二月と同じようする。堆肥場にササ(竹)の根を二本、上端を結んで出す。「水もならさぬコト八日」と言って、一日中静かに過さねばならなかつた。喧嘩でもしようものならうんとおこられた。(神戸)

夜なべをするものではない。またこの夜、十能の上で葱の皮をもした。さらにササバをコヤンバの上に出す家と、ダイマナコ(テケー、タサカリカゴ)の上に載せる家がある。ササはしの。(座間)

二月と二月の八日をコト八日という。

師走八日の日はダイマナコ(大きな目籠)に籠の葉をさした。又肥料小舎にも籠の葉を拂して、物をあげた。

この日はネギをたべるものだといい、イロリでネギの皮を燃したり、十能の上にオキをとつてネギの皮をもしたりした。(座間)

十一月八日はコトジマイ、木の葉籠をカイドに出してかぶせておく。これをダイマナコといい、病が大きな目を見て入ってこないなどといふ。朝飯は籠のところへあげる。(松島)

ヨイエビス(十九日)オイベス様に御飯とケンチソ汁をつくり、サンマをそえて供える。また金を桶に入れて供える。二十日はエビス講。(閑守・大畠)

エビス講(二十日)

十一月二十日の夜からざる。桐生の天神祭でオタカラを買ってきてあげた。(松島)

女と馬の年取り(二十七日)

二十七日は女と馬の年取りで、木の枝（また）にソバやうどん粉をこねたものをぎりつけて入り口にさしておいた。四、五十年前まではしていなかった。（下草木）

正月準備

縁払い 二十八日

餅つき 三十日、三十一日は「一夜餅はつくな」といって嫌う。

お松迎え 三十日にお飾りをするので、その日に明き方の山へいつて

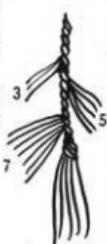
松をきつて来た。もとは七・五・三の段のある松を選んで伐ってきたが

今は枝松を用いている。（萩平・暮坪）

お 飾 り

門松 もとはオニウチギ（七本三角に割った木）—これは七鬼神をはたくという意味）をつかって松を立て、それに七五三籠を下げた。門松へ

は、左図のようなものをあげた。（萩平・暮坪）



そのほか稲荷様、大神宮様、年神様、荒神様、蚕神様などへもシメ縄をあげた。太神宮様へはゴボジメといつて太いのを横にあげ

た。（萩平・暮坪）

す す 竹

大掃除の竹はごみ棄場に棄てた。（下草木）

十二日がお松迎え。オサゴ、干柿、ゴマメを半紙にのせ、松の木の根

の上に供えて、松の枝をとる。とった松は、三ヵ所を繩二回しにまき、

の紙と同じよう結わえる。松は家の外におく。（おき場所は各戸き

まっている）そして毎日の料理を供える。（大烟）

二十五日から二十八日までに、餅を一人に一臼（四升）あてはつ

た。米餅だけでなく、栗餅、モロコシ餅をつく。餅をついたら、お供え

を最初にとる。「重ねを十二は必ずとつた。閏年には十三とつた。

お飾りは二十五日から始めて、三十日には必ずませる。（大烟）

二十六日、花輪に幕の市がたつた。お祭り、羽子板、カケジなどの正

月用品一切の外、魚屋、小間物屋、呉服屋、本屋などが店をだして非常に賑わった。商人は足利、佐野、柄木などからやってきた。（花輪・大煙）

二十八日、二十八日から三十日に餅をつく。（関守）

三十一日、大晦日。年越しそばを食べる。（関守）

松は二十八日伐って来る。杭はナラ、それに松竹を結えつける。煤掃

きは、大みそかに行なう。

餅つきは二十八日。

九日餅はつくな、一夜餅はつくな等という。（神戸）

お松をアキの方の山へ取りに行く。一夜飾りをするものでないという

が、今は三十一日に行く家が多い。ほとんど枝松。（下草木）

力松を立てられない家

阿部柳次氏の家では昔からカド松を立てられないで、竹だけを立て

る。一度、カド松を立てたらその年は調子がよくなかったといふ。（下草木）

阿部氏はカド松を立ててはいけないので、ナラの木を立てる。先祖安倍貞任が松の木の下で殺されたからといふ。（栗生野）

正月餅をつかない家

沢入の名越には餅をつかない家がある。近所からもらつて食べ、小正

月十五日の餅をついてお返しする。（栗生野）

屋敷稻荷

正月にこちらを供えるが、暮には祭らない。（下草木）

大晦日（三十一日）

シモズカリを作る。それは大なべに大根を下ろして入れ、鮭の頭を細

かく刻んで入れて長時間煮る。年取り豆も入れる。また酒粕も入れて煮

る。これは初午にも作って食べる。どちらかというと、初午の方が多い。

（神戸）

大晦日の夜食べる箸は、山からハシギを切つて来てつくるか、これを

イズクバシと呼んでいる。（座間）



オミタマサマにおたき上げ
(座間 昭和十九年一月十九日)

大晦日の日に、仏壇の前にオミタマ
サマと称して特別の供物をする。膳の
上に茶碗に御飯をもつて箸を一本ずつ
上に茶碗に御飯をもつて箸を一本ずつ
大晦日を茶わんに盛つて、六本箸を立て
て、仏様に供える。オミタマサマとい
う。(座間)

(補足資料)

神戸の観音様

神戸の清水寺の境内に観音堂がある。この観音様は、馬頭観音として
この近在では有名である。伝承によれば、中津寺湖畔の立木観音のわか
されという。

観音様の境内には、その信仰を示すいくつかの金石文資料がある。つ
ぎに記してみる。

普門山清水寺玉州代

奉為庚申供養観音宝前之蔵

当村善男子寄進之者也
于時寛文六年丙午歲仲月十八日

当寺六世倍壽代造立也

觀音音菩薩

享保二年酉十一月十五日

享保乙巳六月十八日

奉造立

倍壽代

施主當村寺惣權那
(石燈籠二基 造立者、助力衆の氏名省略)

オミタマサマ

元文六年
為汝是畜生
(馬の像の影刻あり)
正月十六日

親世音菩薩

上野國勢多郡神戸村清水寺
千時文久三癸亥年正月吉祥日

現住禪鑑叟代
上毛山田郡桐生住

鍋屋清吉作
(わに口)

馬頭観世音
大正七年

黒沢卯八建之

(以上注記のないものは石塔)

観音様の縁日は一月十七日である。この観音様の信仰がさかんだった
のは、おぼえて六十年ほど前で、その頃は足尾から大間々にかけての馬
が、一日に百五十頭も来た。馬に鈴や紅白の布をつけてござりたてひ
いて来たものだ。馬をもっていたものは、農家でも、運送屋でも皆観音
様へおまいりに馬をつれて来た。おまいりにつれてくるものは、三日も
前から馬の手入れをしたほどであった。馬は観音様の境内をまわって、
わに口の下でそれをならしてもらつて来た。馬頭観音は馬の守り本尊で
あったので、馬をもつてゐるものは、一月十七日の縁日には、近在の観
音様をめぐつておまいりしたものだ。神戸の観音様は、年にほどくに
午年の観音様として、三月十七、十八、十九日の三日間、お開帳をし
た。最近は略式になつて、一日だけとなつた。ご縁日には、むかしはち
よいちょいみせというが出て、「ちょいちょい買ひなよ、一銭五厘」
としらべて客をよんでいた。むかしは、ええこめ(家ごと)馬を継つてい
たので、観音様もさかつたものだ、今は馬がいなくなつて、おまいりに
も来なくなつた。

人 の 一 生

まえがき

この世に生をうけてからこの世を去るまで、人生は長い旅だといわれるが、その間の無数に近い生活体験の中から、一通りの習俗を取出していく。これを母親のおなかのなかで生命の芽生えを始めた時期から育児、更に青年期、そして結婚と第二の人生に出発して本格的に一本立ちとなり、最後にこの世と別れる儀式である葬儀、そして三十三回忌を

一、誕生から若人まで

概 観

生命的の芽生えから愈々お産が近づくと、安らかに軽くという念願は、いろいろの形であらわされている。産泰信仰、観音信仰は金県下に及ぶものであるにもかかわらず、この村では稀薄のようで、熊・蛇にあやかちなど、ひろく使用される。それにもまして強くみられるのは十二様であった。

終えてシントウバを立て、トムライジマイされるまでの三つに分けた。約百四十二平方軒にわたる地域に住む、七千余人の村人の一生の習俗を概観することは、極めて困難なことで、一毛にも及ばないかも知れないが、一応全地域にわたっての調査資料が集められた。

ノハナリ十二様にもあげることになっている。十二様は本県の北部山村一般にみられる「山の神」で、ここでは山の神の性格を男女に分けて意識し、男はオテンギ様、女を十二様とし、これを安産祈願の対象としているのである。沢入部落では三十余の小社が祀られている。こうした信仰は利根、吾妻にも広くみられることがあるが、この村もその信仰圈に入っている。

お産はナンドで坐産が普通であった。
セツチンマイリはオヒヤマイリともいい、子供のデハジメで、昔はミツメ（三日目）に行くところと一七夜に行くところと二通りみられる。然しその意義と行事内容に変りはない。またこの日の命名については、

素朴な稻荷信仰との関連がみられるが、早く命名しないと十二様に連れで行かれるといわれ、ここでも山の神が出てくるのは、生活との緊密性がうかがわれる。

生後百日或は百十日のクイズメには、一様に皿に石を盛って、生児に食べる真似をさせる。歯を丈夫にと祈る気持の表われである。拾い親については、内容に大きな相違はないが、資料は豊富で弱い子に対するものと、親の厄年に関連したものとに分けられる。

七・五・三の祝いはあまり盛ではないよう見受けられた。

若衆組については、婚姻の項にもあるように、その組織、活動状況についての断片的なものしか調査されなかった。詳細については知ることのできない程村生活が変化し、加えて今や青年団活動さえ行きづまつた状態になっているようである。

この山村の人々も、古くは盛んにヨバイを行なったようである。然しそれが恋愛から結婚に進むというわけでもなく、婚姻はまことに義理堅い「家」の結婚であった。ここに古くからのしきたりの中に生活する、素朴な若い人の一面がうかがわれるのではないかだろうか。

(池田秀夫)

(一) 妊娠・出産

腹帯

妊娠して適当な大きさになると腹帯を巻いた。戌の日に腹帯をするのは全く最近のことである。月数も帶とは関係なかった。腹帯に使う布は、夫の下帯が普通である。昔は「小さく産んで大きく育てる」といわれたし、労働も激しかったので強く巻いた。この帯は入浴の時もどちらかかった。従って夏は汗のためただれて困るものである。(黒坂石) また熊のお産は軽いので、これにあやかるため熊の百ヒロ(腸)を干し

て、腹帯と一緒にました。(黒坂石)

腹帯は三ヶ月目の戌の日に巻く。さらしに蛇の皮を入れると産が軽いといつて、安産守りとする。(座間)

イワタ帯といい五月目の戌の日に巻いた。(松島)

且那さんも一緒にツワリになることがある。(座間)

妻が妊娠すると、良人が弱くなるなどともいつた。(松島)

ツワリ

馬の手綱をまたぐ悪い。子供が十二月腹の中にいるから。(座間)
火事を見ると赤いアザができる。火事や葬式を見る時は、懷に鏡を入れてみるものだという。(座間)

妊婦が火事を見ると赤子に赤いアザ、死人を見ると黒いアザが出来るので、その時は顔をなでないで、専ら尻をなでると尻にアザが出来るのでよい。(黒坂石)

アザッ子は新仏の土で洗ってやるとなくなるなどといった。(松島)

「オサンシ(産婦)は、はめぎわに寝るな」といわれている、これは屋根にキツネがいて、赤子が泣くとキツネがおりてきて、尾で叩いて赤子を殺すからである。子供が泣いたとき、爐のカギ竹をそっとはずして、脇の下にはさんで外に出ると、家の棟にキツネがいるのが見えるといふ。(黒坂石)

産後二週間過ぎないと勝手には入れなかつた。大体二十日間は別生活をした。(神戸)

妊婦とその夫は死人に立会わせない。又穴ほりや棺かつぎもさせない。妊婦が死人に会うときは懷中に鏡を入れておく。そうしないと黒いアザのある子供ができる。(下神戸)

安産祈願

神戸の親元様、東京の水天宮様のお札、腰越の十二様のローソクなどがあつた。(松島)

産奉講はない。産泰様にもお祭り行事がない。安産の守りには、蛇の皮がよいといった。

十二様はウブの神といった。難産の時など産婆さんは「十二様を頼んで下さい」というので、近くの十二様にお詣りに行つた。そして安産すると、一〇〇日たってからお礼詣りを行つた。(座間)

オーゴトの山の神は男である。子育て安産の神として信仰が厚く、「大山祇命」または「山神」と書いた旗をオガシヨをかけた時に借りてきて、オガシヨバタンには新らしい旗をあげる。足尾方面からも来たものである。この神の安産の靈験はあるたかで、難産の時に馬を引いて迎えに行き、帰りに馬の背にサンダワラに幣束を立てたものを乗せてくるとお産が無事にする。

オガシヨバタンは出産後二十一日である。(名越)

出産には山の神様が立寄る。この山の神は桜木のノガミのウスノキの神で、出産が始まると、餅つき臼をきれいにしておくと、山の神がきて臼の上に坐神を組んでお産を見守ってくれる。このお礼には餅一臼を全部お供えにして奉納に行く。

これとは別にオーゴトの山の神は、安産の神であつて、オガシヨバタンにハタを奉納する。ハタには「大山神」と書き、奉納者の苗字を書く。(黒坂右)

安産を祈る事はある。昔はどこぞこの神様の御守などを抱いたりしたが、今はしない。昔は産婦が苦しくなると十二様にたのんでくれという。たのまれた人は口をそそいで、十二様のある方を向いて、どうぞ安産にして下さいとたのむ。

十二様は表山の上に石室のと木の宮のとがある。宿・高助・牛沢と各部落に十二様はある。

十二様の祭りは一月十一日で、掛物(大山祇命)をかけてまつる。高助では紙に書いて床の間へはって祭る。

無事お産がすんだ時は、家の神棚へ赤飯を上の時に名さして「十二様」と呼ぶ。(神戸)

出 産

分娩の場所はナンドである。昔は坐産であったが、今は仰臥して産む。また現在は産婆がいるが、昔は経験に富む部落の女が取上げた。なにかには独りで始末をした者もいる。(黒坂右)

産部屋はナンドであった。

昔ナンドの床を外して赤坊をいたといふことも聞いている。

明治以後のことだが、ホオツキの根を深く突込んで流産させたともいいう。(中野)

ナンドでお産をした。俵をほぐして油紙をすき、その上に布を敷いて生んだ。生み方は下向きで、カマスにつかまつて力を出した。(松島)

嫁入り先で産婆を頼んでうむ。(下草木)

トリアゲバーサンは近所の経験ある人に頼む。暫らくの間、盆、正月に礼を尽すがあとはしない。(中野)

青木ヨネさんは二百人位とりあけた。水沼から足尾にかけての名人といわれている。(松島)

腰越にいたコトリバアサン、トリアゲバーサンなどといった。ここらでは小中の村中で器用な人が頼まれる。(大畠)

コトリバアサン、トリアゲバーサンに頼んだ。(座間)

初子を産むとき夫がいると、しまい子まで夫がいないと生れないなどと。(松島)

お産は昔は布団を丸めて寄りかかってした今は臥て生む。

場所は納戸という部屋。(この附近の一般の間取と納戸の位置を図示する)と次の通りである。

初子の時は嫁の実家で生むのが多い。(神戸)

お産は嫁入った家です。生家に帰ってす
ることはない。(座間)

死産

死産すると赤い布を表の通りに立て、水を
かけてやつた。(松島)

へソの緒

へソノオはカヤを二つに割りさいて切る。
その後はナンドの柱に釘で打つておくのが

習慣である。(黒板石)

エナ・へソノオは、今の発電所の社宅の所
に山があり、「フクライバ」と呼ばれていた

が、必ずそこへ埋めた。下神戸の人は皆そこ

うこんをつかい、青の麻の葉模様をつかう。(神戸)

エナ・へソノオは、今の発電所の社宅の所
に山があり、「フクライバ」と呼ばれていた

が、必ずそこへ埋めた。下神戸の人は皆そこ

うこんをつかい、青の麻の葉模様をつかう。(神戸)

へ埋めた。(神戸)

大切にしまっておいて、その人が死にそうになつたとき煎じて飲む
と、一度は助かるという。(中野)

握つて一束分残して切る。赤ん坊が死んだ場合は、その子と一緒に埋
める。育つた子はとつておく。(大畑)

とつておいて九死に一生のときにのませるという。(松島)

とつておいてその人が病氣で危いとき、せんじてのませると助かると
いった。(座間)

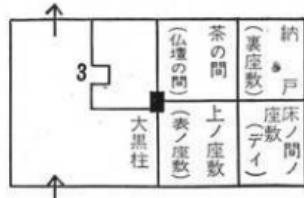
(2) 生児儀礼

産湯

初湯を使わせた後、その湯はナンドの床下に昔は捨てた。(黒板石)

方角をみてよい方向に捨てるか、穴を掘つて捨て埋める。

(中野・大畑)



産着

新生児の着物は用意をさせない。また紐をつけさせない。新生児の着
物は一人で縫うものとされた。(名越)

初生児に着物を作つておくと、次子以下の着物を準備しておいてよい
とされる。赤子は昔は生れてから着物を作つてきせた。(黒板石)

うこんをつかい、青の麻の葉模様をつかう。(神戸)

産着には、紋をつける所に糸で△型に縫いつけた。(中野)

胎便をカナババという。(名越)

生まれてすぐ飲ませるのはマクリとかホオズキの汁である。(名越)

赤ん坊にホオズキをしゃぶらせた。虫がきれるからといった。(神戸)

生まれるとすぐマクリを飲ませた。(黒板石)

カナババがよく出るよう薬屋で買ったマクリを飲ませる。(大畑)

奈良・富山・越後からくる薬入りのもつてくるマクリを飲ませ、カナ
ババを出す。然しマクリは今はなく、白砂糖を脱脂綿にしみこませて飲
ませる。(中野)

ウブタテノゴハン

近所の女衆に頼んで米一升を炊く。一生米に暮せるよう。それをオ
タカモリにして、膳にのせ箸を添えて、生児の枕もとに置く。(座間)

ウブノゴハンといい、十二様にあげる。男は謙、女はハサミをそえて
進せる。(松島)

出見舞

親戚、近者的人が、見舞といって、米一升、干瓢などを贈る。又産着
(ウブギ) といって布地を贈る。(座間)

孫ダキといふ。産婦の生家からはウブギその他の布類、カツブシ等。
他に親類、組内の者も贈る。それに対してもオブスナマイリの日に赤飯を
かえす。その重箱には小豆や大豆を入れてかえす。マメに育つようにと

いう意味である。（座間）

実家の親元から子供の産着を作つて贈る。麻の葉の模様のついた紋付きで、たものある着物である。（白浜）

ミツメ（三日目）

近所の人をよんでもセツチンマイ（またはオヒヤマイ）をする。赤子の額に鍋の墨で「犬」字を書き、大豆をいって砂糖をまぶしたのを持って便所に行く。橋を渡らずに三軒の家の便所に詣てくる。（座間）

三つ目に犬という字を赤ん坊のヒタイに書いて、砂糖豆をいって、三軒分の近所へ、橋を渡らずに便所を廻つて、おがみ、豆をおいてくる。

（座間）

生れて三日目に、ひたに筆で「犬」の字を書いて、近所の便所にお詣りした。今はお七夜にする。（栗生野）

産後三日目に三軒の便所を借りてお詣りする。産婆が赤子を連れて、いり豆をもつて廻り、便所に紙をしておいてくる。（神戸）

三日目にトリアゲバサンが抱いて、三軒の便所をめぐる。このとき子供にはオムツをかぶせて歩く。この日がすむまで橋を渡るなどといふ。

（松島）

ヒトヒヂヤ（便所まいり）

赤飯をふかし、組合、産婆を招く。（座間）

一七夜になると、取り上げばあさんが子供を抱いて近所の三・五軒を廻つた。以前は三夜にもした。（下草木）

大豆を一升いって少々紙にくるみ、オカシラ（ごまめ）と赤飯の三種類をもつて、自分の家、牌一軒計三軒の便所に詣る。このとき額に「犬」という字を墨で書く。大になつて廻るといい、丈夫に育つといふ。これを使ふ所と云ふといい、子供のデハジメである。（大畠・中野）

お湯をあびせてくれた人をよんで御馳走する。

この日女の年寄りが赤子を抱いて、家の便所に連れていく。これをセ

ツシメエリという。この時は豆をいり、赤飯をたいて便所に供えた。

またこの日赤子にカヤの箸を使ってたべさせる真似をする。箸が長いとオト（第）が遠い、短いとオトが近いという。（黒坂石）

お七夜にオヒヤマイをする。橋を渡らず、三軒の雪隠に豆をまいてくる。その折、子供の額に「犬」という字を書く。犬のようにコロ／＼育つようにとの意である。（関守）

命名

生後七日目で名付けする。今は七日目とは限らないが、もとはそうだつた。適当な名をいくつか書いて、これをお福荷様の前でひいてくる。

（座間）

物知りの仕事とされる。名付けの親に対しても親戚のつきあいをする。これで子供を生みたくない時には、スエ、トメという名前をつけた。（名越）

名付けはお七夜にした。名付けは親の仕事であるが、役場に届けに行く途中つけたこともある。父親が厄年の時は春場見のオガミヤについてもった。最近は沢入の産婆が命名する例がある。名付けの注意は近隣と同姓同名にならぬよう注意するが、たまたま嫁入り先で同姓名になる場合があり、黒坂石ではこのような場合は、夫の名前を一字とつて呼ぶ。例えばテルウメ（輝造さんの嫁のウメさん）（黒坂石）

弱い子供が続くと、命名を寺の僧や神職その他に頼む。名付親に対しても益、正月、死去したときには礼を尽す人もいるが、その他のときには物質的なことはしない。（中野）

子供の名はお七夜までに広間の神棚の下にはる字画を選んで書いた。が、苗字より名の画数が少ない方がよい。神棚の下には次のように書いた。

昭和九年四月十九日
寿名 千鶴万鶴太々叶

左側は「チカクマンキタカノウ」と読む。(足腰、柏ヶ谷)

名前は早くつけないと十二様が連れて行つて帰らないといい、仮の名でもよいかと一応早くつける。普通好い名を三つけてお福様にあげてひいてきめる。(松島)

末っ子になるように望むときは、エエとかトメのついた名をつけ、へ

ソノオが製造をしようのような形で生れた場合は、ケサのついた名をつける。(座間)

名前はお七夜につける。名前を三つ書いて、お福様にあげ、それを誰かが行つて一枚引いてくる。お福様から名前を貰つたという。その名前を大神宮様に呈り、組合の人をお祝いに来る。(閑守)

オブスナママイリ(オブヤキ)

男の子は生後二十九日目、女児は三十日目。近所の人を頼んでお詣りする。(座間)

子供が生れると男は十九日目、女は二十九日目にオブヤキの祝いをする。親許や組合、産婆など呼んで、赤飯にコブ巻きを作つて御馳走にする。また子供の額に墨で「犬」の字を書いてウブスナサマにカミマイリする。毛は紙にくるみ、神様におさめる。このときトドゲは残すが、そのいわれは不明である。(大畠)

男児は生後二十九日、女児は三十日。この日オコロをふかしてお祝いをして、オボスナ様にお詣りする。昔は産毛を剃つた。これをチヂングといい、子供が転んだとき神様がこのチヂングを引張つて起してくれるといい、また鼻血が出たときこれを抜くと止るという。

明治二十年頃まで、子供は着物の背中の紋の位置に、カキマモリを縫いつけた。これは柿の形をした布で作ったお守りで、四・五才頃までこれを見た。(中野)

宮詣りは、男女とも生後二十一日目にする。産婦は行かず、祖母が連

れていく。ウブスナ詣りという。この時嫁の実家から贈られたオボギを着せて行く。なお、ウブスナ詣りは、橋を渡り初めなので、お橋詣りともいう。

宮詣りの日には、誕生祝を贈ってくれた人々に、お返しとして餅、強飯、スルメを贈る。また誕生祝は、反物を贈ることが普通である。

(黒坂石)

三十日の祝といつて、赤飯を飲いて、出産見舞をもらった家に配る。

お祝の折をかえす家もある。(座間)

三十日目(男女共)にお宮詣りをし、赤飯を飲いて、スルメでもつけて産見舞をもらった家へ配つた。最近は菓子折とかお盆などを配る。

(神戸)

男の子が生れ二十八日、女の子は三十日目に赤飯をたいて、夫婦揃つて嫁の里にお客に行く。近所にも赤飯を配る。組合の人はオボヤキまでお祝いをしておく。(閑守)

産毛

産毛は二十一日に剃つた。この毛は産土様に供える。家によつては屋敷福荷に供える。昔は首の上の毛(ドンノコボのトドゲ)は三才位まで残しておいた。この毛を一本抜くと鼻血が止まるといわれた。なお子供の鼻血を止めるためには、川のロコのついた石を、ドンノコボに当てるといふとされる。(黒坂石)

クイゾメ

男女共に生後百十日目。石を皿に盛り、御飯とともに膳に載せて生児の枕下に置き、食べる真似をさせる。(座間)

生後百日でクイゾメをする。この日は膳部を供え、歯が丈夫に生える

よう、小石をお茶にする。たべる真似のみである。(黒坂石)

生れて百十日はクイゾメで、小石を川原から拾つてきて、赤児になめさせる。歯が丈夫に生える。(下草木)

クイゾメの膳には石を上げた。歯が丈夫になるという事であった。

(神戸)

生後百日、餅をついて子供に背負わせる。またクイズメといって飯をくわせる。(関守)

産後の食事

出産後二十一日間は粥と醤油とフの汁がたべ物だった。出産後の御馳走は蟹節味噌だった。甘い物は古血がおりないといつてたべることを禁じられていた。(黒坂石)

産婦の食物は、百日間位は油つ氣のあるものはたべさせない。お粥に塩、かつお節味噌、味噌づけぐらいなものであった。(座間)

授乳

乳が出ないと新里村奥沢の親音様からもち米を借りてくる。これを煮てお返しする。(中野)

乳づけ親

母親に乳が出ない場合、近所の人や親戚の人に乳をもらつて育てる。このチヂケ親に対しては盆、正月に礼をつくし、長い間親類づきあいもする。(中野)

乳不足の時は、乳の余っている人からもらい乳をするが乳の親と呼ばれ、親戚付合をする。また乳の親の実子とはチツ兄弟と呼ばれ、実の兄弟同様に付合う。(名越)

(三) 育児

あり合せのカゴ、コウリに入れてゆすった。(大畠)

小さい子供はエジメといふ葉製のメリッソを入れる。(神戸)

背負帯は、オトセリオビといって、木綿の布に色付けしたもので、背

負専用である。

振り籠は使わなかつたが、子供が寒くないようにツヅラに入れて寝かせた。(黒坂石)

呑竜坊主

体が弱かったり、初生児が病没している場合は、太田の呑竜様にオガシヨをかけて弟子入りして、頭を剃つた。オガシヨの年限によって三つ坊主・五つ坊主・七つ坊主などと呼ばれた。(黒坂石)

四才になると、危険だと云つて、花輪の穴薬師や太田の呑竜様にお詣りに行く。(座間)

七才以下の子供は神様だから、またぐものではないとトシヨリはよく注意した。(座間)

弱い子は呑竜坊主・七つ坊主といつてグリグリ坊主にすつた。その場合でもトトノケだけは伸ばしておいた。鼻血が出たとき、これをひっぱると止るという。(座間)

弱い子の場合、太田の呑竜様にオガシヨウをかけて、頭をかみそり落した毛は氏神様(屋敷稀波)の鬚の下に納めた。そろときに、ボンノクボに毛を少し残した。この毛は鼻血が出た時に引抜くと止るといふし、転んだ時に神様がその毛をつかんで起してくれるとかいう。五才とか七才で呑竜様にお詣りしてから伸ばす。(白浜)

夜泣きは、藁たたきの箱をもって、時計の針の動きと反対に赤児のまわりを廻るとよいとされる。(黒坂石)

夜泣きをなおすために、ミノを門口において唱え言をするとよい。(名越)

急に泣くようなことが多い赤児には、虫封じをする。これはオガミヤにて赤児の着物を持って行き、虫を封じ込んでもらい、お札をもらって帰つて高い所に打付けておく。(黒坂石)

長命の呪い 赤児に長命者の着物を仕立かえして着せると、長命であ

るといわれる。(黒坂石)

オマモリ 子供の襟の後に三角巾のような布を小学校に上る頃まで着付けておく。これをオマモリといい、炉に落ちた時などかんで引上げたりするものである。(黒坂石)

バヒフ (百日ゼキに似ている。イキを引くのが特徴である) にかかった時は、下図のようなさかさの札をトボグチの外に打つける。(名越)

百日ゼキには馬糞の汁を飲ませるとよい。(名越)

子育地蔵

子供が丈夫になるようと、赤布のハラガケ、頭巾を供える。腹や頭を病まぬようとに祈るのであり、病むと借りてきて、治るとお礼に新たに作つて供える。写真の如く高さ一四五厘米、台座には「庚申供養・元禄己巳二天正月吉日」開口平衡門他十二名の人名を刻んである。額には次の如く書かれている。

この地蔵はもと善門寺(昭和三十八年九月三十日焼失)の境内にあつたのを、飛驒から来ていた治助さんが背負ってきたと伝えている。

(中野)

子 明治四拾年三月吉日
生 地 蔵 尊
立 糸井利作

拾い親

初生児が死んだ場合、次子は無事に育つように三本辻に捨てる。この場合子め捨ててくれる人を約束しておく。この人は子供運のよい人を選ぶ。この人が捨てて連れてくると、「拾い親」と呼ばれて、子供と親戚つきをいをしている。(名越)

留賀 頭



子育地蔵堂 (撮影 池田秀夫)



子育地蔵像 (撮影 池田秀夫)

弱い子の場合は、三本辻に捨てて、一方子め頼んでおいた人に拾つてもらう。オヤになつてもらう。親しい関係になるようだが、それがどの位長く続くか不明である。

なお弱い子の場合に、名を変える場合もある。この部落では、「とり」を「たま」、「秀夫」を「亀夫」、「和清」を「多十」と変えた例があり、後者の通称で通つている。(座間)

子供が二才、父親が四十二才になるような年頃ち父が四十才の時に生れると三本辻に捨てる。よい着物を着せ土の上に置くか、子め知らせておいてその人に拾つてもらう。その人を拾い親といい、盆、正月にはつけとどけをする。(中野)

三十三の三つ子(三十三才厄年のとき三才になる子)は膝へもあげるなという。三本辻に座布団を敷いてそこに捨て、他人に拾つてもらう。抱いてきたのをいただいて、モライゴというわけである。拾つてくれた人を拾い親といい、三年位は盆、正月にツケドケをする。死ぬまでする人もあり、床についたときとか、変つたものが出来ると必ず持つてい人もいる。(大畑)

四十一才の時の子は、何処でもすきな所に捨て、拾い役(家人の人でな

ければ誰でもよい)を決めておいて拾つてくる。(関守)

オニッコ

十月目に歯の生えた子は、オニッコとして忌む。然し捨て子にはしない。

(座間)

初誕生

誕生餅を作る。餅はノシ餅で、この上に草履をはかせて渡らせる。

(黒板石)

ノシ餅をつき、餅の端を二片と財布を風呂敷に包み、赤兎に背負わせ(この餅をカネ餅という)餅の上にござを敷いて歩かせる。カネモチになるようにといふわけである。ノシ餅は餅の尻をあてて切り、これを二

片誕生餅として嫁の実家、組内に配る。(大畑)

ノシ餅をつくり今までにいろいろ贈られた家に対して、一軒一千升分位をお供えの形にして二箇つず配る。また誕生を迎えた子には、板の上にのした餅の上を歩かせたり、風呂敷に入れて背負わせたりする。家によつては財布を背負わせる。(座間)

生後一年たつと餅をいく白もついて、近所に配る。多い家は一俵もつ。子供にジョウリを作つてはかせ、お金を風呂敷に包んで背中に背負わせて、餅をふませる。「金もちになるよう」するのだといふ。餅は一色餅では悪いので、赤い餅や白い餅、青い餅をつくる。昔は餅を角に切つた。(上草木)

もとは誕生日に子供に餅を背負わせて歩かせる真似をする。
という。のし板にのし餅をのせてその上を歩かせる真似をする。

(栗生野)

餅をお供え餅にして、お金と一緒にフルシリキに包んでしょわせた。ただそれだけで歩かせない。(上草木)

風呂敷に金を包んでしょわせ、ぞうりをはかせて餅の上をふませる。

その餅は家でたべる。赤白のお供え餅を親戚に配る。(寒沢)

金を入れてしょわせて、餅生餅をふませる。その餅を親戚に配る。身

上に応じてつく。お供え餅、切り餅をくばる。また誕生を迎えた子供に草履をはかせ、餅の上をふませる。踏んだ餅は、その場でたべる。これで配らない。いろいろ餅ではなく、重ねにして、上を赤くする。

満一才。餅をつく。赤ん坊に背負わせて歩かせてみたりする。生後三

十日の赤飯もこの誕生餅も、もうと豆を包んでお返しする。(神戸)

タンジキウ(誕生)餅をついで、親戚、組合、嫁の里にも配る。また

この日にはトリアゲバアサン(専門家ではなく、近所の経験者)を招待する。(関守)

初正月

男女ともにカケジをもらう。(座間)

男女にはハマユミ(掛袖)女子には羽子板を買ってやる。(関守)

初節供

嫁の家からは内裏誰や御殿が贈られ、他家からも誰が贈られた。男児の場合は、嫁の生家から轔や吹き流し、他家からは轔、今は人形等が贈られる。これに対して餅がかえされる。(座間)

三月三日にはお雛様、五月五日には轔(武者轔、鯉轔など)を買う。

(関守)

四才の厄除け 四つになると、昔は反町の薬師様へ、今は荻原の薬師様へつれて行って厄除けする。(神戸)

七・五・三 三才、五才、七才の子が一戸に三人揃えば七・五・三の祝いをする。揃わねば七才までやらない。女児は七才で祝の着物を作りウブヌ様に詰り、赤飯をふかして供える。これをオビトキといふ。

男児が五才で祝うのをハカマギという。(大畑)

四年 祝

以前は大尽の家だけした。今は組合うち五十軒を呼ぶくらいにしてお祝いする。(下草木)

危除 女十九・男二十五の危除けには、荻原の薬師様で危除けをする。(神戸)

男四十二・女三十三の時には、全部ではないが川崎の大師様か西新井の大師様に危除けにゆく。(神戸)

七十七の祝 吹き竹を作り親戚に配る。一本揃えて水引をかけて贈る。自分の祝である。(神戸)

八十八の祝 親戚で赤い着物と帽子等を作つて贈る。(神戸)
八十八才になると「赤いもんぞろい」といつて、足袋からショウアリまでも赤いものを作つて身につけてお祝いする。(下草木)
米寿の祝には赤ゾッキの着物を作つて着せて祝う。酒や餅や記念品などを配る。(寒波)

子供会 大畑では愛宕神社及び一月二十七日の大日様のお祭りに子供が掃除する。これに対し戦前までは鉛筆・手帳などを与えた。

なお大日様の宵祭りには子供に甘酒を出した。(大畑)

若者組 昔は若者組があった。十五六才から入つて三十台の人もいた。

地芝居 年一回地芝居をした。田圃に舞台をかけ、また人家の庭を借りた事もある。若い衆の主催で費用は「花入」でまかなかった。この「花」はビラに書いて下げる。踊るのは商売人を雇つて素人芝居ではなかった。佐野辺りから芸人が来て一週間位やった。

芝居の題目は義経千本桜、安達ヶ原、寺子屋、二十四孝、太閤記など

年令階層

であった。

盆踊りも専ら若い衆の行事であった。旧のお盆中、広い庭のある家とか神社の境内を借りて踊つた。近くの村からもゆき来して多い時は百人前後の人気が集つた。女は老人は踊つたが若い人は踊らなかつた。盆三日の間毎晩やつた。若い衆は全部踊つた。踊の種類は手踊りが主で一部花笠踊りなどもあつた。節は八木節であった。

道善講も昔は若い衆がしたが、年一回今は村中で出る。その外に自主的にやる道善講が一回ある。(座間)

ワケエシは、検査後三十才位までである。お祭りはワケエシの仕事である。

祭りの指揮者はトウドリと呼ばれ、祭りの会計担当二名が帳元ともワケエシガシラとも呼ばれる。ともにワケエシである。祭りは東宮神社である。(西)

青年会 昔は高等科卒業すると入会した。大正五・六年頃で株金が二七三円、会員は十一名位あつた。現在は貯蓄会と改名し、烟六反余りをもつて十一名の共有地となり、貸耕作地となつてゐる。(下小夜戸)

大畑では大日様のお堂が宿となつてゐたが、風害で破壊されて以後は廻り番となつた。七月十七、十八、十九日の農休みに、三日交代で伍長の家に集り、好きな遊びをする程度で、一種の交際となつてゐる。

(大畑)

昔はツボ(小字)に一つの若い衆組があり、十七・八才から入つた。組頭が組の者の中立つて何でもやつた。若い衆組には結婚後もそのまま残り、三才位まで続いた。(下草木)

若衆の遊び

力石 豊里神社に二十四貫と二十二貫の力石がある。

物日には近所で集り、棒押し、腕相撲などして遊んだ。(松島)

夜バイ

昔は多かった。お互にしめし合せて、男が家の裏側から梯子など使つて、二階に入ったりなどした。(座間)

むかしは相当あたらしく、老人の話に「ものにすれば(女を)米一だん」などと、かけをしたなどと聞いた。がそれは話に聞いた程度である。(神戸)

六十五才以上の年令の人はたいていやつたものである。手で打合せておいて行くものもあり、黙つて入るのもあった。

昔Aがバクチ負け、勝ったBの妻をとつてやろうと夜ばいに入ろうとして、厩のカイバオケをかぶつた。その中に入つた粉をかぶり、そこにBが帰つてきた。そしてショーマダについた粉を払つてやつたという笑い話がある。

村では一般に戸締りがないから出入りは自由であるし、私生児は沢山いたものである。こうした私生児を連れ子にして嫁に行く者もあったが、普通は家において嫁に行つた。(中野)

夜あそびをしていて、あすこのむすめはいいむすめだからといって、その家へはいこむことをヨバイといつた。あのむすめをさがしてくんべき(さわがしてくること)といって、むすめの家へはいこむ。はいりこまれた家では、しんぱり棒をかつてねえからへえられたといわれる。

ヨバイのわかいしめがきて、かたんと音がすると、その家の親は、気をきかして、「猫が来たんべえから、なにかくれてやれ」という。これは娘におきらという意味である。また、「ヨバイが来たら、ぼたもちでもだしてやれ」という親もあった。

ヨバイで関係ができると、相手に娘をくれてやる場合もあった。

私生児

テテナシゴという。生れた当座はいろいろいつてもあまり苦にしない。(中野)
ホマチゴという、父親があつてない子のことである。(押手)

私
娘

ダルマという。花輪に置屋が四軒あり、一軒は旅館だが女中が同じことをやっていた。中野に二軒、清水屋というものは昭和六・七年頃まであった。何れも大正二年鉄道が開通するまで賑やかであったが、その後さびれた。何としても足尾への宿場町だから榮えたのである。また足尾に行くのに桐生・前橋方面からの芸人は、必ず花輪に一泊して往復したものである。(中野)

二、婚

姻

概 観

婚姻團は何れの山村でもそうであるように、昔は部落内が多く次第に広範囲になりつつある。たゞ当村では小中部落と中野部落の縁組は、神戯にからんで縁組をしない例外がある。この兩部落の間はヨバイも恋愛もなく、豚の子を買って飼つても育たないとされている。

婚姻は「家」と「家」とのものという意識が極めて強く、特に昔は家格と労働力の増強という第一目的が強調されていた。従つて男女の交際・ヨバイなどはあっても、それが結婚まで結びつく例は殆どなかつた。結婚の主体性は親、仲人が握っているため、「見合い」さえ行われなかつたのである。

縁談の開始は村のタチキキである仲人と仲人の交渉に始まり、それが親のもとに持込まれ、最後に本人のところに来るというものである。仲

人は二組必要であった。この山村の婚姻に、若衆が積極的に関与した形跡がないのは、昔はあったのが消えたかも知れない。確かに若衆が部落入口で出迎えて行列に加わり、嫁を護衛するということがみられる程度である。

結婚はすべて「嫁入婚」で、タチガタメ、結納、結婚の順をふむ。ここで注目すべきことは、トマリゾメ、カリブン（足入婚）が一般に行わ

れていたことである。大体はその後も無事幸福に一生を終えているが、なかには「仲人は腹切り道具」ということも、意の満ちた言葉であろう。

座間での「イチゲンウケ」は嫁入婚の形式を僅かに残す一例かもしれない。

嫁が婿の家に来て三三九度の前に仮壇に嫁入りを告げること、式場での添嫁・添婿は単なる侍女房の如き附添人というだけではなくたるうし、式の翌日又は翌々日の産土神詣りなどは一応注目してよいであろう。また小夜戸での記録にみられた、歸のあと燐火を消しましたすぐ点火するという儀式も、何か深い意味をもつてゐるように考えられる。

（池田秀夫）

(+) 結婚の条件

結婚年令

昔は女は十七才、男は二十才位が多かった。三才違いはよく、九才違ひは悪いといふ。女の三才上のことをミツマツという。夫をみますといふ。（花輪二区）

適令は二十才以上、ワケエシと呼ばれる。小ワケエシというのには、十才以上二十才位までの男子である。（名越）

年齢のよしめについてはかなりやかましくいわれ、近親結婚も多

かった。(中野)

嫁の条件

家庭円満、近所すぎのよい人、気持のよい人。以前は仕事第一、気質第二。最近は気質第一、仕事は第二になった。(足腰・柏ヶ谷)

嫁選び

特に男女交際の機会はないが、三夜マチの日には、若い男女が廻り番のヤドに集まり、コンニャクベッタリを作ったり、小豆の粥を作り、さまざまなことをしゃべり、月が出るとしてから、食べて散会した。

まことにこれが恋愛に発展することは少なかった。(名越)

長男の場合、見合い結婚というのではなく、殆ど親が決めた。従つて嫌でも一緒になる人がいた。概して嫁は家のために考えて選ばれる。年上の女房は家のためによいとされ、おしつけられる場合が多かった。次男以下になると恋愛結婚もたまにはあった。然し男の人達が娘と月の祭などに出掛ける機会は多くあっても、それがきっかけで引き続き交際するということはなかった。(中野)

見合いは特にしない。村中お互に知っているので見合いの必要はない。(名越)

見合結婚というのは昔はなかった。多く村中か近くで、双方知り合つていて結婚した。今でいえば恋愛結婚という事になるが、そんな言葉もなかった。踊りとか芝居見物などで知り合う場合が多かった。(座間)

恋愛結婚はナレアイといふ。見合いと半々で、ナレアイのときは有力者が戀愛の人をたのむ。たのまれると紙に墨をぬったようなもので、ひきはなすことはできないのだから」などと説得する。するとたいていは「本人の思うように」とまとまる。(足腰・柏ヶ谷)

許婚

いいなずけは親の約束で、青年はそのものを相手にしない。早くきまつていると仲間に入れないので、さびしいときがある。(花輪二区)

通婚圖

昔は主として部落内が多かったが、最近は交通が開けて範囲が広がった。昔は小平、河内、仁田山方面が多かった。渡良瀬川を渡るのが困難なため、主にこちら側で通婚した。(座間)

村内が主である。(名越)

縁組みは、村内と村外が半々。むかしは村内の縁組みが主であったが、最近は里に出たがって困る。七割は東京を希望している。

(足腰・柏ヶ谷)

小中と中野の縁組みはしない。

むかし小中の先祖の鳥海弥三郎(鳥海神社)は、中野の先祖の鎌倉五郎(御靈社)と敵味方であったから縁組みしてもまともならないという。以前この先例を破つて結婚した人があつたが、日露戦争で夫が戦死してしまった。(松島)

村内が多いが、次男以下になると他部落の男女と恋愛関係が生じても特別のことはなかつた。たゞ小中部落の者との結婚は避けている。

(中野)

仲人

仲人サマは、他の適当な部落のロキキと相談して縁談を進め、双方の親、本人の納得を得て婚約を成立させる。従つて仲人サマはタレ方の仲人サマとモライ方の仲人サマの二人出来る訳である。仲人サマは男で、夫婦でなく一人ずつである。(名越)

仲人はしつかりした頼りになる人である。謝礼は普通は金を包む。その割合はモライ方一、タレ方一の割合で、その後少くとも三年間位は、歳暮・中元をする。仲人は夫婦げんかの仲裁その他種々なもの責任をもつことになつている。(中野)

親の知らぬ間に仲良くなるとカンドウされることがあつた。縁談が始まるのは、イチゲン(結婚式)の席上で、仲人サマに頼むことから始まる。仲人サマは村のロキキである。(名越)

仲人は貰い方が一組たてる。(座間)

仲人礼は、三日目位に「仲人振舞」をしたときにやる。初子が生れると、節供ぐらいまでお祝いを届けた。そして仲人親ともいい、死ぬまで益、正月はつけとどけをし、その葬式には必ず参加する。

(足腰・柏ヶ谷)

仲人は三回するものだという。

仲人七でんぼう、仲人がとりまとめるためにウソをいうことである。

しかし今はそんなことはない。

仲人の名人 花輪に仲人の名人がいた。七、八十回した人がいる。

(足腰・柏ヶ谷)

オッタテなこうど

若人同志は話が決つていて、形式的に仲人を立てるもので、主に貰う

方で頼んで話をもらう。(栗生野)

(二) 婚約・結納

クチガタメ

仲人は買ひ方から相手方へ、口ガタメといつて酒と肴をもつて行く。

く。買ひ方では近所の一人、三人を呼び、結婚の決定を挨拶する。又近

所、組合へは仲人が手拭又は半紙などをもつて廻る。(座間)

婚約が成立すると口ガタメをする。双方の仲人サマが、相当の家で、

親戚、部落代表立会いのもとに、部落毎戸一人の人を集めて縁談の成立

をねる。このとき仲人サマは名刺代りに半紙一帖づつ配る。御祝儀の

日取りは取入れ後の十一月か十二月で、高島曆を見て決める。不淨日、

仏滅、申の日は避ける。日取りが決ると仲人サマは、部落の毎戸にこの

ことを告げ廻る。(名越)

婚約の成立に際して行われる。仲人が金一封(戦前は五円位)に酒一升・スルメをもつてくれ方に行き、組合の代表を交えて酒宴となる。そ

のとき仲人は組合全部の家に婚約成立の挨拶をする。この酒宴にツルカメをうたうこともあった。婚約の確實性はこのクチガタメで決る。

(中野)

酒一升を貰ひ方から持参して、嫁と仲人と益を交し、次で親戚、組合の代表と益を交して取決めることになる。その後で仲人は嫁方の組内に挨拶に廻る。

貰ひ方は特に決った儀式はない。仲人が手拭を名刺代りに持つて組内を廻る。

口がためのとき、結納金(金一封で金額は書かない。昭和初年頃は五

円か十円であった。大体筆筒代金程度)なども決めてくる。

(足腰・柏ヶ谷)

貰ひ方から酒一升もって、くれ方に行く。酒にスルメをつける。一人

で行つてもよい。(栗生野)

トマリゾメ(足入婚)

姻戚関係などで事情のわかつている場合に、特に必要にせまられて足

入婚があった。見合結婚などではない。「トマリゾメ」といつた。こうし

て始まつた結婚が駄目になつた例はない。(座間)

今も行われていていることで、仲人が吉日を選んで連れてきて、泊めて帰

る。(花輪・区)

吉日を選んで仲人が嫁を貰ひ方へ連れてきて帰る。事实上夫婦生活に入る。(足腰・柏ヶ谷)

クチガタメの時に、仲人が嫁になる娘を連れて婿方に行き、家族に顔見せをする。この日に昔は大概トマリゾメをした。これで話はまとまり、こわれることは殆どない。祝儀までの期間は自由に往来して、家族とも慣れ、仕事の手伝いなどもする。取れ秋が終つて一段落した頃、いい日を選んで式をあげる。(栗生野)

カリブン

婚約成立後、女はカリブンといって、御祝儀前に男の家に手伝いに行

く。泊ることもある。(名越)

結婚前に婿方に来て、事実上の結婚生活に入る。労働力の関係などで、式の前に連れてきて手伝わせる。(花輪二区)

タチガタメを済ませると嫁は婿方に行く場合もあった。所謂足入れ婚のようなもので、これに失敗して裁判沙汰になった例もある。こうした折には仲人は適当におさめなければならず、仲人は「腹切り道具」だといわれた。(中野)

ご祝儀をしないで、くらがための酒でかりてきて、つかっているものをいう。その後のなりゆきで、あとで式をあげる。(押手)

結納

婚約成立後、適当な日に結納をおさめる。結納の品は、酒、スルメ、ノシ、末広、小袖、襦袢(この二つで一点とする)、タシ、コウガイ、オビ、ベニオシロイ、カツブシ、シラガ(麻、結納金の十二点である。これに対し嫁方は、目録に裏書して受取りとし、結納返しに、嫁の手土産(金)、下駄、名刺(半紙一帖)を渡す。(名越)

結納品は嫁の衣裳と結納金だが、やはり仲人が買ひ方からくれ方にもつていく。今は当日もつていく(金を)例もある。(座間)

長のし、祝樽、末広、さば、するめ、ともしらが(麻)、小袖一重、長襦袢、拂、こうがい、紅おしろい、毛抜鉄、ハコセコ等十二種類を贈る。今は七種類ぐらいになつた。

結納金は金額を書かない。書いておくと破談のときは、つけて返さなければならなかつた。昔は五円位。今は五万円位である。(花輪二区)

結納品は金一封、目録、祝樽二つ、はさんみ箱には長襦袢、小袖、帯、紅、白粉、鉄、拂、笄、笄、末広、シラガ(麻、スルメ、カワオブシ等十

二品入れて届ける。結納がえしはない。(中野)

小夜戸の星野幾太郎氏宅に保存されている結納目録によると次のようである。

結納目録

一、長駒斗
一、室内喜多留

一、香
一、小袖
一、腰帶

一、帶
一、襦袢

一、櫛笄
一、紅白粉

一、白毛
一、毛抜鉄

一、丈長
一、金拾門

一、毛拔鉄
一、毛拔鉄

一、毛拔鉄
一、毛拔鉄

一、毛拔鉄
一、毛拔鉄

一、毛拔鉄
一、毛拔鉄

一、毛拔鉄
一、毛拔鉄

一、毛拔鉄
一、毛拔鉄

以上

明治十四年三月十五日

群馬県南勢多郡小夜戸村

星野新平

⑩

栃木県上都賀郡足尾村字原
斎藤長三郎殿

(裏書)

表書目録物品幾久數目出度受納仕候

斎藤長三郎

⑪

(小夜戸)

（三）嫁入り

イチゲン

婿と仲人、婿の兄弟、近所の組合の代表の人など五人乃至七人が朝、嫁方に行く。先方では「イチゲンウケ」といって、親類の人が出て接待する。婿は嫁と一緒に先方の家を出て来る。今度は先方のイチゲンがついてくる。（座間）

結婚式の日に、婿、婿方の仲人さま、婿の叔父母、兄弟、チユウゲン（婿の近所の人で嫁入道具を運ぶ）の一行が嫁を迎える。迎えに来るのは大勢が喜ばれる。迎えに来ると嫁の家で「迎えイチゲン」が行われ、婿と嫁の両親との間でオカカズキといつて、義理の親子のかためのサカズキが交換される。

嫁入道具は、昔は二重のタンス、張り板、断ち板、タライが決まりであった。タنسがないと「フロシキ嫁御」といってさげすまされた。

（名越）

貰い方が先に出かけ、近づき、盃のとりかわしなどして帰ると、嫁方のイチゲンも一緒に嫁をつれてくる。（足腰・柏ヶ谷）

中宿

大きな祝儀になると中宿というのがあるが今は大概略す。中宿ではオチツキという軽い食事を出すが、今は墓子位になった。（座間）

仲人が先に立つて嫁方のイチゲンの人が嫁を迎えて行くが、このとき婿も行く。そして先ず中宿に入る。（仲人が中宿に嫁だけを迎えて行くこともあるが、その場合は婿は自分の家に居る）中宿は休み場所であるが、婿の家に戻ってくるような位置は選ばない。そして式の終るまで嫁のイチゲンは中宿に待っている。式が終ると仲人が迎えに行き、嫁方のイチゲンは嫁の家に来る。中宿のない場合はウタイと一緒に入り別

室に控えている。そしてトリムスピが終つてイチゲン座敷となる。（中野）

嫁迎え（カドムカエ）

近所の若者が出掛け、部落の入口で迎える。家に入る前に、昔は青竹を花嫁にまたがせたこともある。嫁はトボグチから入る。このとき嫁が蛇目傘をさしき、手をとつて台所へ入れる。嫁の場合は縁側から、また嫁は実家を出るときは縁側から出る。これは死者の棺も縁側から出るので、一度と帰れないことを意味するという。白もくを着るのは嫁と死んであるともいう。イチゲンは縁側から入る。（足腰・柏ヶ谷）

迎えの人と共に嫁を送り出す。嫁には、父方の叔父、母方の叔母、くれ方の仲人さまが送つて行く。くれる方は数が少なくてよい。チユウゲンは挾み箱と祝樽をもつて従う。部落の入口まで迎えに、部落のワケエシが出て行列に加わる。これは嫁の護衛役である。嫁の家の二十米位手前でケンカズキといつてワケエシは詠いをする。

ワケエシは御祝儀の詠い役で、時々練習をする。

嫁はトボグチから入り姑が出迎える。先ず仮壇のある部屋に入り、姑と共に祖先に嫁入りを告げる。一方迎え送りの人は縁側より入り、茶の間でオチツキといつてお茶をのむ。（名越）

婿は嫁より先に家に帰つていて、嫁の来ると、仲人夫婦と門先まで迎えに出る。このとき取り結びのお酌に出る男女二人の子供が提灯を持って一緒に迎える。

家に入るには、イチゲンは縁側から上り、嫁はトボグチから入る。家に入る時姑が手を引いて入れてやる。嫁は第一番に仮壇をおがむ。それから取り結びの座敷へ行く。（座間）

婿は玄関、嫁はトボから入る。そのとき姑が手を引いて入れる。トボで盃を交すことはしない。（花輪二回）

嫁の姉妹、仲人、イチゲンがついていく。附添いの女は嫁の服装を直してやる。嫁は昔は振袖にアゲボウシ、頭巾をかぶつて行った。また嫁は馬に乗り、祝樽を両側につるし、タنس一棹もつて行つた。これがこ

われるとよくないといい、水ですべってタンスがこわれたら数年たたずに嫁の死んだ例が二三ある。

組内の者は提灯をつけて途中一丁位の所まで迎えに行く。従つて御祝儀が近くになると、提灯を張替えて用意したものである。組内的人がカドに来て、連絡して謡をうたい「……着きにけり」で縁側に着く。嫁が婿の家のトボグチに入るときは竹をまたぎ（これは再び出てはいけないというマゼンボの意味をもつ）姑が菅笠（今は傘）をかぶせる。そして台所から入り、縁に上るときは姑が手をとつてやる。婿は廊下から上がる。尚イチゲンは玄関から入る。婿取りの場合は婿は玄関から入る。そして組合の者が松明をたき、青竹で道を横切り、縁に青竹をまたがせた。

結婚式（トリムスピ）
祝儀の座敷は次図のようであった。



祝儀の話は玄関つきの時「高砂やこの浦船に」をうたい、三三九度の時「処は高砂の」をうたう。終りに「四海波」をうたう。

坐席につくと男蝶、女蝶という子供のお酌がいて、男蝶が嫁に、女蝶が婿につぐ。そこで謡もうたつてから仲人の前で代りて別々の相手にお酒をつく。盃毎に謡がある。取者に巻きするめをもつて、婿と嫁六つづつに切つてある。謡をする人が二つずつする。お膳は取りかえなに出す。その場ではたべない。吸物は口をつける。お膳は取りかえない。三回の謡がすむと皆手伝いも集つてもらって、手ばたきをする。謡う人が音頭をとる。

手バタキシャン、シャン、シャン、

「オシャンシャンシャン」。

この拍手は明治三十年頃から始まつた習俗だという。（神戸）

式の次第は次のとおりである。
①トリムスピ挨拶（大要は、この辺の習慣でやるからよろしく。）

トリムスピの式場（デエである）は次図のとおりである。

酒ツギは両親の揃つた年少者がなる。



(2) チョウアワセ—三三九度の真似

③ 三三九度

④ 話(高砂、四海波、ナガキノシ、千秋楽)

式はトリムスピ(部落のワケエシの代表)の進行で行われる。

このあと親子のカヅキといって、娘と男、姑との間に親子のサカズキが交される。その後イチゲンといって披露宴に移る。イチゲンは、テッシュ役(オショウバントもい)い部族の口達者の人があつとめる。この人は社交性に富まねばならない。昔はトリムスピ以下一切で酒をひどだる二本半位飲むのが普通であった。

イチゲンが済むと送つて来た人々は泊らずに帰る。

その後、台所仕事をしてくれた人々に對して、ゴタイギ振舞といつて、御馳走をする。娘も婿も当日は殆ど徹夜である。(名越)

式の座敷に坐るのは仲人、新郎新婦、イチゲン客、添え嫁(嫁の兄弟かこれに準ずる者)添え娘(娘の姉妹かこれに準ずる者)男蝶、女蝶(三三九度の酌をする少年少女一人ずつ)お相伴(式の進行係)である。三三九度の盃はお相伴が指図して、男蝶、女蝶が交互に三つ組の盃に酒をついですすめる。

昔はイチゲン座敷(嫁方の親類の御馳走)がすむと、お大儀振舞といつて、この日手伝いに來た人達を、婿と娘とが先に立つて酒をついで振舞う。

最後に「嫁御のお茶」といって、帰る前にお手伝いの人に娘が茶を入れ、手土産に持参した菓子を出して解散する。(座間)

トリムスピの式は、新郎新婦が上座で向い合い、次回のように位置する。

式は代表がウタイの音頭をとり、三種類うたつて終る。一回毎に新郎新婦が盃をとりかわす。ウタイは高砂、庭の砂子、長き命の三種である。(足腰・柏ヶ谷)

新郎	女仲人	若衆組の男衆
○	○	○
新婦	男仲人	(蓬萊山)
○	○	○
○	○	○
○	○	○
○	○	○

トリムスピは両親持ちの子供がとりもつて男蝶、女蝶の盃を同時に交す。昔はこのとき若衆が指で障子を破つてのぞいてみたものである。トリムスピが終つて娘と婿との盃を取交す。これをオヤコのカヅキといふ。これは話うたつた人が指図して、両方のイチゲン座敷の並んだ所で、先ず親から娘、次で娘から親に返す。昔はトリムスピを終えて、そこに親子親戚が集まつて、親子兄弟のカヅキをしたものである。これが終つてイチゲン座敷に紹介した。(中野)

大字小夜戸の星野幾太郎氏に保存されている安政二乙卯年十一月吉日から昭和四年四月までの記録によると次のようになつてゐる。

成 立 招 入 嫁方へ御酒一升又は金一封納入する。これを口をためといふ。

結婚式 大字小夜戸の星野幾太郎氏に保存されている安政二乙卯年十一月吉日から昭和四年四月までの記録によると次のようになつてゐる。

う。媒人は嫁方、婿方両方の組合員にこれを報告する。

結納品を納めるため、近親者五人乃至七人(婿及び媒人夫妻のはか)で、迎えの新客として嫁方へ行く。結納納めの式を行つて、両親及び近親とオチカヅキの式を行い、これがすむと

宴會となり、終つて嫁は送りの新客と共に婿方に行く。途中一時中宿に入る。式場の準備が出来ると女蝶、男蝶並びに式場の係は中宿に迎えに行く。

式場 床の間に天照大神の軸を祭り、島台(蓬萊山)、鏡子、盃そをうたう。

式次第

- (1) 式場係が始める旨述べる。
- (2) オチツキの式。
- (3) 銚子の酒を互に三回交す。
- (4) 男蝶、女蝶は同時に婿、娘に三階の一番上の盃に酒をつぎ、娘嫁は同時に飲む。三回重ねて落つきの盃にスルメ、梅干を取って置く。
- (5) 終つて女蝶、男蝶は位置を交代する。
- (6) 話
- (7) 話
- (8) 一番下の盃で前回同様に三回重ね、スルメ、梅干を前回同様にはさむ。男蝶、女蝶は再び位置を交代する。
- (9) 話
- (10) 係員は式の終了を宣す。
- (11) 係員は式の順序は次のよう改められた。
- (12) 桜湯
- (13) 長熨斗
- (14) 銚子合せの盃
- (15) 四海波
- (16) 千秋楽
- (17) オタカモリの飲食
- (18) 盆
- (19) 幾久敷の挨拶
- (20) 先祖への報告
- (21) 式場は次回の通りである。



島台(蓬萊山)は台上全面に白米一升を撒く。中央に松竹梅、その周囲には向って右に鶴二羽、左に亀二四、中央に三重ねの盃でこれをはさんで高砂の老人夫妻。鶴の附近に若干の梅干、亀の近くに幅三分、長さ二寸に切った切昆布を若干おく。亀は体を芋、頭、足をゴマメ、尾を昆布で作り、鶴は体を芋、頭、足を唐辛で作り、高砂老人は体を昆布頭をねぎ、熊手、帶などは鶴の羽を糊でつける。

次に料理の献立表をみると次の通りである。

- 一、長熨斗
一、御茶
一、御菓子
一、御煙草盆
一、落附吸物
餅、板、ミツ葉
一、吸物
金附はまぐり、口ふき
一、折詰硯蓋
みかん、日の出板、蓮根板、きんとん、香芽、小串、
梅かん
島、せり、口ゆす

一、刺身 鮎、しらか大根、ほうふ、わさび、雨後

一、吸物 鯉こく、口あさくら

一、鉢着 ぶり、てりやき、源平蓮

一、吸物 松茸、板、ロリズ

一、取肴 醋だこ、しらか大根、生のり

一、吸物 腹うしは、うど

一、御肴 船浜やき、さんしょ、黒くわい

一、引龍 ほら、車海老、こんぶ、切みつば、はまぐり

一、本膳 大鍋 うどん

一、御平 大根、青菜

一、御皿 花鰓魚、海苔、ゆず、から志、胡麻

以上

明治四十三年一月十四日

星野

料理人 林 嘉三郎

大木 熊吉

なお島台の飾り方は、昭和四年以降次のように改められた。

台の中央に松竹梅、その前に向って右に鶴、左に大根一本、中央に蓋

をおき、周囲には右から梅干、海老、數の子、中央に駄斗(人夢で作る)

左側に龜、巻するめ、昆布を置く。

娘の茶

最初嫁方のイチゲンに茶を出す。これで一同も引揚げる。(足腰・柏ヶ谷)

添嫁

添嫁は嫁方の方から嫁についてゆき、式の当日は取結びがすみ、嫁が

着物を着かせてお茶を出すまで、ついていて嫁の世話をする。(座間)

初夜 仲人がフトンをかけてやった。紙の音を聞くまで仲人は帰らぬことも

あった。(中野)

四 披露・里帰り

ヨメビロウ

式の翌日は、近所の人々を集めて、ヨメビロウをし、嫁が接待役で御

馳走をする。(名越)

近所まわり 式の翌日嫁が、半紙とか手拭をもって母親に連れられ、鎮守様から近

所を廻る。(座間)

式の翌日姑が嫁を連れて、親戚その部落を廻るのをタミアイ廻りとい

う。これは仕事の関係で半年かかったこともある。(中野)

ミツメ・ヒザナオシ 結婚して三日目、ミツメといつて星に近所の手伝ってくれた人と、仲

人サマを迎えて御馳走をし、これをすませてヒザナオシといつて、嫁は

婿と共に日帰りで里帰りをする。(名越)

三日目、婿とつれ立つて里へ行く。(座間)

新夫婦揃って、婿とりの場合は男親が、嫁とりの場合は女親が送つて

実家に帰る。このときは泊らずに帰り、くれた方の親が送つてくる。これ

をヒザナオシといい、これで結婚後両家の親が初めて往来したわけである。

昔は三日目に神社に詣つてからヒザナオシに行つたが、今はトリムス

ビの前に神社に詣つてからヒザナオシに行つたが、今はトリムス

嫁が里に帰れる日

特に決ってはいない。正月に帰るけれど、特に一定していることはない。(座間)

正月 新婚夫婦で、十二月三十一日に帰り、正月三日か四日に帰つて四日に帰つてくる。

節供 三月二日に新婚夫婦でウドン粉をもつていきイキブルマイをして二人で十四日に出掛け十七日に帰る。

盆 春はやらないが秋のオクンチには嫁を里にお客にやる。

(足腰・柏ヶ谷)

正月、盆、祝儀、不祝儀、ハツサタ。(下草木)
盆、正月、節供、アキアゲなどであるが、結婚後初めてのお盆には、嫁をお客にやらない。また子供が生れると、三ヵ月たたないうちにお客様に行けという。三月をまたぐのはいけないといわれ、例えば七月に生れると八月に行く。(中野)

結婚式の三ヶ月(三日目)

この場合には、むこの土産として嫁の実家の小姑やとにより、下駄とか反物をもつて行く。婿の両親と仲人もついて行く。この日むこは嫁の里方の隣組を、名刺とか手拭をもつてあいさつにまわる。

一月十五日 よめさんの御年始。

この日は年始をもつて行く。お歳暮に行けなかつた場合には、この日と一緒にもつて行く。むこは、行けるかぎりは一緒に行く。子供でも多くなると、行かなくなる。

お節供(二月三日)

この辺では、お節供までは里へ行かなくともいいということが多いわれている。

彼岸には行かない。

五月五日

この日には、三月三日と同じく嫁むこそろつて行くのがたてまえだ

が、なかなかそろつては行けない。

盆

盆の十五日には嫁(子供がいれば子供も)だけで行く。手土産をもつて行く。

村祭

この場合には、来られたたら来てくれという程度で、とくに行くことはない。

秋あげ

こなしごと(農作業)が終つてからで、十一月の末か、十二月のはじめのころ、米一升とか、粉(小麦粉)を土産としてもたせてやつた。おぼえてこの例はないが、むかしは泊ってきたようだ。たとえ隣からよめに来ても、秋あげには里がえりをさせた。(花輪)

四 そ の 他

ビリソウドウ

他人のカミサンをこまかすことで、こうしたことがおきてても村の口キキによって大騒動にならずに済む。(名越)

オハグロ

昔は結婚すると、フシの木の実でオハグロの粉をつけた。マユをそるのは明治三十七、八年頃までやつた。(中野)

入籍

嫁の入籍はおそい。子供が生れる直前に入籍されるのが普通である。子供の出生届と親の婚姻届が同時という例もある。(名越)

夫婦の部屋

夫婦の部屋はどこでも別にしてやる。(座間)

嫁・婿のよび方

嫁さん嫁さんというのは、子供が生れる頃までそうよぶのが一般である。(座間)

嫁、婿と一般に呼ばれるのは、舅、姑が元気なうちで、五十、六十になつても「ヨメ」「ムコ」と呼ばれる例は多い。(名越)

離縁

結婚して三年たつても子供を生まない嫁は裸、裸足で追い出されても止むを得なかつた。また夫が他に女を作つても異議はいえなかつた。

(名越)

三年たつて子供がないとか、年寄りと折り合いが悪いと縁切りになる。このとき男は好きなことをして返してやってよいといわれ、髪の毛を切つてやつた。中には指を折つて帰してやつた例もある。

(花輪二区)

三 葬 制

概 観

過去に行われた民俗調査の際、何れの町村でもみられたように、この村にも「魂呼び」の習俗がみられた。「千度申す」「水ヨリ」など特に昇天しようとする人の靈魂を呼び戻すことが、真剣に行われる。葬儀はホーバイ単位で行われる。この言葉は葬儀のときに使われるもので、隣組の意だと落居ではいわれているが、そればかりではなく村組織、構成に関係した、一種の村の交際組織としての性格がある。勿論葬儀の場合兄弟親戚を中心にを行い、ツボの人々がこれに参加するが、更に側面からこれを応援しているのがホーバイである。ホーバイで棺をかつき、穴掘りをする者が六尺のたすきをかけるので、ロクシャンクと呼ばれるのも面白い。

(一) 死・喪

死の予兆（死の知らせ）

鳥なきが悪いと人が死ぬという。星野某氏の祖母がなくなった時、仏壇の鉢がチーンとなつたという。（下神吉）

マンスケどんのいた話に、座間の正作さんのオッカアは姉妹だったが大病だった。その人の死ぬ時仏壇の鉢が鳴った。そこで「……（姉妹の名）なら今一度だけ」といたら、又チーンとなつた。

昔は男が死ぬと本堂へ、女が死ぬと勝手の方へ知らせがあった。

これは人魂ではなく、物音のような知らせがあった。

人が死ぬ時はお寺の鉢が鳴った。××氏の先祖の時は、鉢を着て中門を歩いてゆく姿が見えたという。坊主は本堂へ行って、下から××が来るというので衣を着て待っていたら、告げが来たという。

今の和尚さんのお袋に、人が死ぬと知らせがあるというが「本当かい」と聞いた事がある。そしたら「ありますよ」という返事だった。（神戸）

同時に二人の死人があると必ず三人目が続くとされ、槌（カケヤ）を葬つて防ぐという習俗はここでもみられた。

死後四十九日の餅つきの杵の音を聞いて、靈魂が家を離れるという。このオタナアゲの儀式を行うのは、葬儀の日、一七日、四十九日といろあるが、これが一つの区切りとされて、死後の供養、忌に対する觀念が強く意識されているものと考えられる。（池田秀夫）

魂呼び

病人が重体になると、屋根にあがってその人の名を大声で呼ぶ。

(荻原)

組内の人が出で、神社を千回まわる。また水垢離をとつて「千度申せ、千度申せ」という。(関守)

病人が九死に一生のような大病のとき、島海神社で「千度申す」をする。これは組の人が「千度申せ、万度申せ」と唱えながら神社のまわりを、棒でたたきながら廻る。(松島)

生死の境のとき、屋根の上にのぼつて大声で病人の名を呼んだ。(明治のはじめ)

お産で死にそうな人があり、髪の毛を天井に向けてひきあげ、水をふきかけ、大声で名を呼び、呼び戻した。その人は生きかえった。(花輪一区)

区では鉄砲を打つたこともある。「千度申せ、万度申せ」や、川で水をかけっこをして拵んだこともある。(松島)

下の家の孔子さんが十幾つかで亡くなったとき、家の者がくず屋の棟に登つて、ハブの所から家の中へ向つて、大声でその子の名を呼んだ。四十年前のこと、名を呼ぶと生き返るといわれていたが、ついに亡くなつた。(寒沢)

おげん婆さんが亡くなりそうだった時(六十年前)話者のじいさんと下のばあさんの二人が水ぶねの所でコリをとつた。裸になつて十回位水をかぶつて身体を清め、神社の方を向いて「助けてくれ」と祈つた。このことを何といふのか不明である。(寒沢)

白人の出た家では、たちうすを逆さにして入口(玄関)につるした。

白がなければ、白の絵をかいてはりだした。(宿)

白の絵を逆さまに描きトボグチにはる。(関守)

(神棚)

死者があると神棚に笛をひいた。又は白紙をはつた。これは四十九日がすむととり除いた。(下神戸)

死者がでると神棚には白紙をはる。(関守)

耳ふさぎ

同じ年の人が死ぬと、耳ふさぎ餅をつく。餅を耳にあててふさぐ真似をする。(花輪二区)

遺體(マクラナオシ)

死者を北枕にし、魔物避けに刀をその上にのせる。(関守)

死者は北枕、上向きにねせる。(下神戸)

死ぬとすぐ北枕にし、猫除けに刀を抜きかけてあげておく。

(花輪二区)

ツゲ

死んだ事を知らせ、葬式の日時の知らせをツゲという。告げは必ず二人して行つた。今はオートバイなどで一人で行く。昔はツゲの人には必ず御飯を出して御馳走し、清め(酒)を出した。(下神戸)

一人で行く。昔は短刀をさして、旅費も必ず持たしてやつた。途中の事故を防ぐためである。受けた家はすぐ飯をたいて出すのが礼儀とされている。(花輪二区)

ツゲには組合の人が二人で行く。一人で行くと相手は気分を悪くする。

寺に告げる場合は一人で行く。(関守)

ツゲには必ず二人で行く。ホウバイトがきちんとつげる。正しい日、時を徹底させるために二人で行くのである。(草木)

ツゲは牌のツボの人から出た。二人で一組になって行く。(宿)

マクラメシ(枕团子)

死者があると、戸外で竹と木三本(二本竹、一本木、又は二本木、一本竹)を立てて組んで、そこから籠を下げるて鍋をつるして作る。枕團子は三コ。團子もそのお皿も米の粉で作る。枕めし、枕團子は共に葬式の

時お墓に供える。



これを炊いた時の灰は三本辻に捨てる。(下神戸)

台所で竹一本と木の棒一本を組み合わせた三叉をつくり、それに鍋をつるして飯をたいて死者に供えた。このときの灰はすぐ三叉と共にサンにあげて、三本辻に運ぶ。そのときシナモジも添えておいてくる。

マクラ飯は三本辻で、木の棒一本と竹一本で三脚を作り、それに小さい鍋をつるして煮る。飾り団子は四十九箇作って、七本の串に夫々七箇ずつさし、二カ所をしばって供える。(関守)

サンギ(三木)で枕團子をゆでた灰は、サンイにしやもじと一緒にのせて、サンボノツジ(三木辻)へ捨てた。(宿)

ユカン

湯濯をする人は、昔は男は裸になつて擗たたきをかけ、女は腰巻に襦袢・襷の帶という仕度でやつた。屍体に水をかけて洗つた。

今は上着をぬいでアルコールで一寸ふく位になつた。

すむと湯に入ったものである。湯に入らぬ時は、塩で手を洗つて清める。これは戸外である。(下神戸)

湯濯は醤油樽に湯を入れ、水をたしてする。男は裸になり、腰に薬繩を巻きつけ、女は薬繩でたたきをかけてする。後に醤油樽や使用した布などは、男が越中一つで小黒川に流す。(関守)

湯は風呂でわかす。納戸の聲をあげて、そこでたくさん湯をつかつてきついにした。洗うとき用いた布などは、死者の身につけていた汚れたものと共に、大目坂の捨場に捨ててきた。(花輪二区)

死者を水でぶいて湯かんとする。今はアルコールで顔をぶいてすま

す。(寒沢)

納棺

死者の着物は白いサラシで作つて着せる。普段の持物を入れてやる。

(下神戸)

棺はたて棺が大部分で、若い人が死んだら左前に着物を着せ、六文鏡や死者の好んだものなど入れてやる。(花輪二区)
棺にはサラシの座布団をしき、その上にサラシの着物を着せて納める。また死者の好んだもの、六文鏡、きょううかたびらなども一緒に入られ、周りに薬やかんなくすを入れて動かないようにする。

墓地に穴が四尺も掘れる時はたて棺、下が掘れない時には寝棺を使う。(寒沢)

（二）葬送

ホーバイ

学校に行かない子供の葬儀は、組合だけでやり、一人前の場合には村内の組合以外に、各戸から男一人手伝いに出、組合からは二人である。組合の人がツゲに出て、組合外の人が穴を掘る。(関守)

組内的人がすべて片づける。(萩原)

組合の者以外に、買物、引物、穴掘りなどの仕事と、親戚の多い少ないによって、ホーバイを頼む。草木では、昔は六十戸、今は百六十戸。武尊神社から向うをホーバイといふ。それでも人數が余るから、このツボを二つに切つて、組合八軒、あと十数軒をホーバイとする。(草木)

ホーバイとは葬式のときに使う言葉で、「となりのくみ」という意味である。

葬式の仕事は隣組単位としてやつてある。大体十五軒前後で一つの組をつくっている。この言葉は古い言葉で、今では隣組合という言葉を使つてゐる。(落居)

葬式の時には、穴掘り、棺箱、籠かきなどの人数の割振りをするために、組合が八軒、残りの十四軒がホーバイを頼む。上組二十二軒のツボを二つに分け、組合が八軒、残りの十四軒がホーバイとして頼まれる。ホーバイの人は墓所に穴を掘り、その人が棺をかづぐ。そのため草履をはいて行くのがしきたりである。(寒沢)

部落ではツボが日常生活の一単位となっている。役場からのフダ(徵税令書)の配付とか、部落費の取立てなどは、ツボ単位になされている。葬式の場合には、死人の出たツボだけで間に合わないときには、隣のツボをたのむことになる。その場合、隣のツボ(組)をホーバイといふ。それ以上範囲をひろげる場合(大きな家とか古い家の葬式のとき)には、これをオオホーバイという。

隣のツボ(ホーバイ)の人達は、はたを作ったり、棺おけの繩を作ったり葬式の準備をするが、その中から六人の人(これはジャンボン帳があつて、その順番はきまっている)が出て、仏様をかついだり、穴掘りをしたりする。この六人の者は施主から六尺のたすきを出してもらってかけた。この人達をロクシヤタという。六人は埋める仕事のはか、あまりしなくともよかつた。ロクシヤタには、墓地で清めの酒が出た。仕事を終えて帰ってくれば、食事の用意ができていた。(宿)

葬儀の参加者

葬儀に参加するのは、知人、本分家関係では分家まで、血縁関係ではハトコ程度までである。

近所の顔のきく人が、施主がわりに客の接待役をつとめた。(宿)

つみせん

つみせんは、つきあいの程度によつて違う。昔の例だと、一円・五円・十円とあつたすると、十円はふかい兄弟の場合である。(宿)

お手伝いの作るもの
花籠は竹であら、色紙の切ったのとお金(一円・五円・十円位)を入れ

れる。

七本木、棺桶、膳、位牌、塔婆などを作る。(下神戸)

葬儀の日

友引、三隣亡、寅の日をさける。(閑守)

おっしゃん(和尚)の都合によるほか、三隣亡、寅の日は駄目、友引はよろしくない。それ以外の日ならよい。施主の力、人物によつて賑やかに行われ、特に終戦後は賑やかになった。(草木)

葬具

葬具は寺にある。(下神戸)
棺は坐棺である。(閑守)では棺台がないので二人で担ぎ、荻原では棺台にのせて四人で担ぐ。なお棺には横にさらしを一反位巻いてある。これは埋葬前にとつて和尚に渡す。)

出棺

葬式の出る時は、施主は頭へサラシの三角形のカムリミをつける。女は手拭の二つ折みたいなものを麻ひもでゆわえてかぶる。デナナメシは坊さんの読経の終り頭、軽く一箸ずつ御飯を参会者に配る。

カムリモノ、ハイモノは紙で草履の形、カシムリの形を切つて近親者に渡す。それをつけていく。(昔は本当に冠物をし、草履をはいたのである)それを襟とか下駄へはさんでゆき、お墓でお焼香の時埋める。出棺と同時に両親のある男女一人ずつの子供が座敷や廊下を掃き出す。(下神戸)

棺おけを出したあと、死人がいた座敷は、笛ぼうきを作つて、女の子の男の子ではき出した。(宿)

棺をかづぐ人、穴掘りは、親戚を除いたホーバイの人がやる。おつしやんと施主は草履をはくしきたりである。院号つきの時は、三坊主類んでチンドンシヤン(によばちと、たいことけいすつていううちかね)がたてまえになつてゐる。(草木)

葬送に参加するもののうち、親戚の者や近しい人のうち女人の人とロクシタは、わらじをはいた。わらじは市販のもの。別のはきものを用意して行って、帰りにわらじを捨てて、はきかえてくる。このわらじの名前は特ではなく、またわらじをはく意味についてはわからない。（宿）

腰はたし

病気中神仏にお願いをかけたまま死ぬと、出棺のときその人の着ていた着物をさかさにしてふるう。（神戸）

葬列

縁近い人から順に並んで行く。（関守）

①提灯二つ ②竈二つ ③花籠二つ ④行燈二つ ⑤花輪 ⑥弔旗

（死人の名前を書いたもの一つと色旗數本）（関守）

葬列は膳部係、献立、引き物、戒名、三坊主、チン（鎧・ようばち）

ドン（太鼓）、シャンの順で、親族が参列する。（寒沢）

葬列は寺の庭で左に三回廻る。（関守）には寺がなく、萩原の寺の和尚

さんが檀家に出張する形なので、その家の庭でやる。）

お寺の坊さんが引導をわたし、親子の別れを読み上げる。そのときお線香を順にあげる。それが終るとロクシタが棺をかついで、寺の庭を七回（今は略して三回）廻る。そのあと墓地へ行って埋葬する。（宿）

葬列の持物

位牌 あととり

お膳 位牌もち（あととり）の嫁

香立 次男

墓地

神戸では畠の端にある墓地がある。墓は自分の一番よい烟を使って埋めてもらつておくと、人がその烟を買いたがらなくてよいのだという。（神戸）

墓地は個人ごとに寺のまわりにもつてある。（宿）

穴掘り

（ホーバイの項参照）

組合の人が掘る。棺をかつぐのも組合の人がする。

（宿）穴掘りに使用した道具はそのまま墓場におき、一七日の頃塙をかけ清めて持ち帰る。

（花輪二区）

新規が一般的である。たて棺の場合もあり、寝棺の場合もある。埋める時には、たて棺の場合には東向きにするのが多く、寝棺の場合には西に向かって。（宿）

頭を向いた。（宿）

（花輪二区）

土葬が一般的である。たて棺の場合もあり、寝棺の場合もある。埋める時には、たて棺の場合には東向きにするのが多く、寝棺の場合には西に向かって。（宿）

（花輪二区）



新規 墓地（神戸）
(撮影 今井 善一郎)

埋葬

新規が一般的である。たて棺の場合もあり、寝棺の場合もある。埋める時には、たて棺の場合には東向きにするのが多く、寝棺の場合には西に向かって。（宿）

（花輪二区）

新規が一般的である。たて棺の場合もあり、寝棺の場合もある。埋める時には、たて棺の場合には東向きにするのが多く、寝棺の場合には西に向かって。（宿）

（花輪二区）

新規が一般的である。たて棺の場合もあり、寝棺の場合もある。埋める時には、たて棺の場合には東向きにするのが多く、寝棺の場合には西に向かって。（宿）

（花輪二区）

新規が一般的である。たて棺の場合もあり、寝棺の場合もある。埋める時には、たて棺の場合には東向きにするのが多く、寝棺の場合には西に向かって。（宿）

（花輪二区）

新規が一般的である。たて棺の場合もあり、寝棺の場合もある。埋める時には、たて棺の場合には東向きにするのが多く、寝棺の場合には西に向かって。（宿）

（花輪二区）

新規が一般的である。たて棺の場合もあり、寝棺の場合もある。埋める時には、たて棺の場合には東向きにするのが多く、寝棺の場合には西に向かって。（宿）

長男から最初に土をかけ、以下近い者順にかける。そしてサゴ石をのせる。これは径三乃至四厘位の適当な石をみつけてのせるわけであるが、一度のせたら動かしてはいけないことになっている。(関守)

墓地では棺を穴の中に納めると、縁者が刀で縁切り綱を切る。土を落としてやり、そのあと土をかける。埋葬が終って家に戻ると、立ち臼を逆さにしたのに腰をかけ、手洗い水で手を洗う。きよめに塩を出す。

(寒沢)

送ってきた人が順に土をかける。それが終るとロクシャクが埋めて、はなかこの竹を使って火はじきをつくる。(宿) 施主が最初に土をかける。棺をしばって穴におろす縁切り綱を、施主が刀で切る。刀のないうちでは、なたで切る。そのあと組内の者が、土をかける。(刀は死者の胸の上にあげておいたもの) 棺の中に昔は六文銭、好むものならば煙草なり何なり入れてやる。穴は寝棺、たて棺、それに土質によって違うが、たて棺で四尺位、寝棺で三尺位である。

土葬したあと、うちに戻り、立白を逆にし、腰をかけて手を洗い清める。今は半紙に立白を描いて戸に張る。そのあと施主のふるまいをうける。(草木)

清め

塩をカマドにまいて清める。(関守) 野邊のおくりをして帰ってくると、参列者は、入口にあるなみの花(塩)と酒をよめてから、玄関に入る。なお野邊おくりに行くときには親は玄関から出るが、それ以外の人は、わき座敷から出ることになっている。(宿)

ホーベイ念佛(ホーバイ念佛)

葬式のすんだ晚、念佛をする。念佛玉は赤飯のおにぎり二つが多い。

(花輪一区)

葬式のあと、組合と近い親戚の人が埋けてかえってから念佛をする。

①南無阿弥陀仏 ②十三仏

男の場合はこの他に地蔵念佛をし、女の場合は血の池をやる。

念佛がすむと昔は念佛玉といって、赤飯を出した。今はお菓子などが出て来る。(神戸)

ゆずり

葬式の晩に、形見(衣類が主である)を縁者に分ける場合も多い。

(関守)

位牌わけ

葬式の夕方串団子をつくる。これは七個を一串にさし、七串を一結びにし、これを二組作ってあげ、紙の位牌を分けるとき、この串団子を添えてやる。(花輪一区) 死者に供えた飾り団子は、親戚に二つずつ分ける。位牌と一緒に半紙に包んでやる。(関守) 団子を位牌につけて親類に配る。これは紙の位牌で、仏壇の奥にはつておく。(松島)

ハダン

墓のおしのことと、昔は一七日にしたが、今はオツケハダンと称して当日にする。告げがくると「ハダンはいつでしょう」と聞くから、告げの人はハダンの日を聞いて行かなければならない。(花輪一区)

ユミキリ

一七日に行う。家によつては神主を頼んで行なった。来会者にはうどんを出す。家ではそのほか七日、七日には牡丹餅でもつくって墓参りした。(神戸)

（三）仏の供養

死後の供養

忌あけ 昔は一七日ですませたが、今は四十九日までする。この忌明けのすまぬうちは山へはいかない。（神戸）

四十九日 餅をつき、米会者に五つぐらいずつ配つた。（神戸）

忌ぎり 早ければ一七日でオタナアゲをする。この日坊さんを呼んで供養する。葬式のすんだあとにする家もある。これをハダンといい、なまぐさを出して振舞う。（宿）

年忌 一週間毎にお詣りし、四十九日は魂が家の棟を離れる日といて、オタナアゲをして墓詣りも一応終了する。その後は百日、一年忌、三年忌、七年忌、十三年忌、十七年忌、三十三年忌である。三十三年忌は杉塔婆を立てる。墓石は三年乃至十七年の間に立てる人が多い。

（花輪二区）

一七日まで家の者は毎日墓参し、毎夕墓の提灯をともす。三七日・三十五日・四十九日と法事をする。四十九日にはオタナアゲといって、今まで奥の間にあった位牌を仏壇におさめる。（関守）

喪解 百カ日過ぎれば神詣りをしててもよい。昔は親が亡くなつた時

は、一年間神詣りをしなかつた。以後一周忌・三年忌・七年忌・十三年忌・十七年忌（十五才以下で亡くなつた人はこれで罪いじまいにする）二十三年忌と法事をし、三十三年忌が葬いじまいとなる。杉の葉のついたまま（「三木位」）を切つてきて、崩つて、和尚さんに戒名と命日を書いて、墓に立てる。（関守）

供養は一七日、三七日、五七日、四十九日、あとが百カ日、一周忌、三年忌、七年忌、十七年忌、二十一忌、三十三年忌がとむらいじまいで、しんの立つている塔婆を立てる。塔婆は、杉、柏、楓でよく、しん

があればよい。四十九日に、六本木の最後を打ちこむと、いよいよ仏になつたかなというようない伝えである。四十九日の餅を作り、お墓前に来た人に配る。（草木）

年忌 一回忌、あと三年、七年、十三年、十七年、二十三年、三十三年に回忌をする。三十三回忌のときは、杉の芯のある塔婆を立てる。こはをトムライジマイという。（萩原）

念佛供養 葬式を出したあと、坊さんがきて拌む。そのあと老婆をたのんでアト念佛を申してもらう。このあと念佛供養をするのは次の通りである。年忌がすむと寺を呼んで供養してもらう家もある。

ヒトナノカ、三七日、三十五日、四十九日、百日、一周忌、三年忌、七年忌、十三年忌、二十七年忌（これは稀である）三十三年忌。十三年忌のころに供養をやめる家もある。三十三年忌は、トモライジマイとして、枝つきのしんのある塔婆（杉の木の小さいもの、ひのき、もみのきなど）で作る。もみの木が本来のものという。シントウバという）を立てる。このときには、親類縁者を呼んで供養する。これによつて、その仏様は先祖になるといわれている。（宿）

芭塔婆 三十三年のともらい上げに、杉の芯塔婆を立てる。（神戸）

石塔 三年、十三年、二十三年などいろいろあるが、結局は金である。（神戸）

一七日には和尚がきて供養する。三七日、五七日、四十九日とやれば丁寧である。墓地にある六本木を七日七日に打込んでいく、四十九日打込むと棺に通るといい、仏になつたかなあということになる。四十九日に餅をついて墓参の人に出す。その後百かん日、一周忌、三年忌、七年忌、十三年忌、三十三年忌とあり、とむらいじまいに芯の立つている木（杉、檜）の塔婆を立てる。ねづくやる人は五十年忌、百年忌もする。（寒沢）

昔の人は、親族が死ぬとその次の盆が来る前に、一度は赤城山に登る。すると新仏に会えるという。赤城の山開きの日だとよいといった。

袈裟丸山にはサイの河原と呼ばれる、石が一面になつた荒涼たるところがあり、八才以下で子供が死んだ人は、旧四月八日にここに行き、石を積んで帰る。(落居)

新盆 親戚、近所も皆新仏の家へ行く。最近は金を(近い人が千円位、組合など五百円位)もつて行くが、昔は砂糖、茶、うどんなどもつて行つた。古くはうどんと餅が多かつた。(神戸)

人が死んで三十三年忌の時は弔いしまいといつて、生木の塔婆を立てる。もとは杉の木を用い、その芯の部分一米程の長さのもの(三・四年立の木)で、幹の方をけずりお寺様に供養の文字をかいてもらつて墓地に立てる。(神戸)

杉の葉のついたもの(一米三・四十匁)をとってきて前、後をけずり、戒名と命日を寺で書いてもらつて墓に立てる。(関守)

畜生のなくなつた時は、雜木の二又の木を用いて塔婆を作り、死骸を埋めた上へ立てる。やはり字を書く処をかける。犬、山羊などの家畜を葬る時立てるのである。(神戸)

四 そ の 他

死者の魂の行方

なくなった人の魂は三十五日までぬきば(軒場)まで出て、四十九日にやのむね(屋根の棟)を離れるという。

七日ごとに死者の供養として墓詣りする。(团子をつくり、線香と一緒に供える)四十九日には、四十九日の餅をつく。この日お寺さんを呼んでおがんでもらう。四十九日の餅は、四十九の数の餅をついて供えられる。そうでないとえんまさま(赤鬼)に釘で頭をうたれるという。そのため餅を身代りにするのだという。(春場見)

死者は四十九日の餅つきの杵の音を聞いて、魂はやのむねから離れていくのだということである。(春場見)

死者の魂はお寺へゆくという。宝泉寺が焼けたとき、壇家の人が、

「弱ったな、死んだらゆくところがない」といつた。(神戸)

産婦の死

産婦が死ぬと、路傍の川のふちに、赤い四角な布の四隅を棒にしばつて立てておく。通る人が、それに柄杓で水をかける。特に流れ瀧頭といつた言葉を聞かない。(座間)

盆中彼岸中になくなった人

こういう人は、かわらけをかぶせて埋葬した。その理由は、盆、彼岸には先祖様は家に帰つてくることになるが、盆、彼岸中になくなった人は、逆に地獄へ行くことになる。先祖様は家に向う。死人は地獄に向う。その途中で会うことになる。そのとき先祖様は新仏に向つて「おれたちが来るといふのに、なんでお前は行くんだ」といつて新仏をはたくといふ。そのため盆、彼岸中に亡くなつた人には、かわらけをかぶせて埋めるのだといふ。(春場見)

ブク

親子とか夫婦は一年、そのほかのものは百日ぐらい。神棚へは一年間紙を張り出し、殆ど無関係となる。(宿)

カケヤ

一軒の家で、一年に葬式が二つ出ると、三つ出ないようについての施鐵鬼

三本辻に施鐵鬼の立札を立てる。そのとき何日間と指定してあるので、この間は乞食がきても一飯をふるまうことになつてゐる。たいてい一周間位でおわる。(花輪二区)

無縁仏

昔は無縁仏は共同墓地へ埋めてそのままにしておく。(宿)

子供の絶えた家の墓

昔は無縁仏は共同墓地へ埋めてそのままにしておく。(宿)

た。それが無縁の墓をつぐこともあつた。(宿)